諫早市美術・歴史館

研　究　紀　要

第2号

2026（令和8）年3月

「諫早の美術家展」－開催のあゆみと展望
田　中　麻衣子　1

「美歴 PR キャラクターズ」活動報告
PR キャラクターの必要性
古　川　知　佳　6

出前授業「諫早大水害」
岩　永　郁　子　14

諫早の民俗　諸職－下駄
川　内　知　子　17

エコミュージアムと博物館運営
坪　内　理　子　28

ながさきピース文化祭2025特別展
「諫早の武士と蘭学」シンポジウム報告
森　　健　史　35

諫早の武具職人
大　島　大　輔　76

「諫早の美術家展」 -開催のあゆみと展望-

田　中　麻衣子

はじめに

「諫早の美術家展」は、諫早市美術・歴史館の開館10周年を記念して令和5(2023)年に始まった企画展である。諫早市内で活動する美術家の作品を一堂に展示し、市民や子どもたちに芸術の楽しさを伝えるとともに、地域文化の振興を目的として開催された。

本報告は、本展および関連ワークショップ事業について、これまでの成果と課題を整理し、今後の期待について考察する。

1　展覧会の概要

始まり(第１回)

開催:令和5(2023)年4月15日(土)～5月14日(日)

趣旨:開館10周年を記念し、諫早の美術家の作品を一堂に展示することにより、郷土作家による多様な作品の鑑賞機会を創出するとともに「文化芸術のまち・いさはや」を市内外にアピールすることを目的とする。

開館 10 周年
記念ポスター

開館10周年を記念しての展示は洋画、日本画、水墨画・南画、彫刻・工芸、書、写真、デザインの7部門で構成され、153名(合計155点)が出品し、各部門の特色ある表現を幅広く鑑賞出来る内容となった。分野を超えて鑑賞することで、来館者は美術表現の多様性とその魅力を再確認する機会を得た。来場者アンケートでも「地元にこのような作家がいることを初めて知った」といった声が圧倒的に多く、地域認知の深化に一定の効果が確認された。また、「諫早の美術家展」では、展示に加えて市民向けのワークショップ(以下アート体験)やギャラリートークのイベントが併催された。制作体験や作家との交流を通して、鑑賞者が能動的に美術と関わる機会が創出された。特に子

どもや若い世代にとって、作品制作の背景や技法を直接学ぶ体験は、美術を身近に感じる機会となり、地域文化への関心を高める効果があったと考えられる。

諫早の美術家展
洋画部門

諫早の美術家展
書部門

ギャラリートーク

アート体験①「ハンカチを化学藍で染めよう」
令和５（2023）年４月３０日（日）
参加者（事前申込制）16名

「諫早の美術家展」最初のアート体験は藍染めということもあり大人の参加者が多かったが、二つとない作品作りに真剣に取り組み、「作家の話を直接聞けて貴重な体験だった」といった感想が寄せられた。

ハンカチを化学藍で
染めよう

アート体験②「揮毫にチャレンジ」
令和５（2023）年５月３日（水・祝）

「揮毫体験」は書部門の先生方に講師を依頼し、令和４（2022）年度からゴールデンウィーク期間限定で始まった子ども向けワークショップ（こども WEEK）の一環として開催された。
参加は自由だったが、家族連れが多く普段触れることのない大きな筆を使い、力いっぱい思い思いの文字を書き、満足げな表情の子どもたちが印象的だった。
今回のアート体験は共に美術を身近に感じる機会が提供でき、本事業の大きな成果といえる。

揮毫体験

２　継続と変遷（第２・第３回）

第２回（令和６年度）：令和６（2024）年４月２８日（日）～５月２６日（日）
　令和６（2024）年度には、彫刻・工芸、書、デザインの３部門で開催され、７０点（６８名）の展示が行われた。これは、第１回から展示構成を再構築し、規模を縮小したものの、大型の作品が多く展示され、企画意図の深化を図ったものと言える。

　アート体験「コラージュの技法でマイボックスを作ろう！」
　　令和６（2024）年５月５日（日）

　事前申込制で多数の応募があり、当日は３８名の参加者でのアート体験だった。簡単で且つオリジナルのファイルボックスということで、未就学児から高齢者まで楽しんで制作活動が出来た。

コラージュの技法でマイボックスを作ろう！

第３回（令和７年度）：令和７（2025）年４月２７日（日）～６月１日（日）
　令和７年（2025）年度は、洋画、日本画、水墨画・南画、写真の４部門を主体として７８点（７８名）の展示となり、異なる視点での展覧会が開催された。

　アート体験「巨大壁画をみんなで描こう！～いさはやの大好きを世界へ～」
　　令和７（2025）年５月１０日（土）

　子どもたち向けのアート体験をと実績豊富な洋画の先生方を講師に迎え、大型のテント地をカンヴァスに、子どもたちに個々の好きないさはやをテーマに絵を描いてもらい、一つの作品を完成させようと考案された。
　募集人数は事前申込制だったが大幅に定員を超えた申込みがあり、市民の関心の高さが窺えた。
　当日は、抽選で選ばれた２３名の子どもたちが参加した。会場には大型のカンヴァスを設置し、筆やローラーなど多様な道具を用いて制作を行った。最初は戸惑いを見せていた子どもたちも、次第に周囲と声を掛け合いながら描き進め、自然と協同的な雰囲気が生まれた点が印象的であった。午前から午後までと長時間に及ぶ作業だったが、子どもたちの「楽しかった」の声と、保護者からも「このような経験は中々ないので参加出来て良かった」といった声が寄せられ、体験型プログラムが果たす役割の大きさを再認識する結果となった。
　また、完成した巨大壁画は、個々の表現が重なり合いながらも一体感のある作品となり、会場を訪れた多くの来場者の注目を集めた。このようなことから、アート体験「巨大壁画をみんなで描こう！」は、「諫早の美術家展」と市民との関係性が一歩前進したものではないだろうか。

3　展覧会の意義と位置づけ

【1】地域文化振興の拠点として

本展は、地域美術家の創作活動の拠点的役割を担い、市民とのダイレクトな接点を創出するものである。多様な表現領域を示すことで、作品の鑑賞と同時に文化理解の深化を促す。

【2】社会的価値として

近年、美術館や博物館には作品の収集・保存・展示といった従来の役割に加え、地域社会と積極的に関わる文化的拠点としての機能が求められており、とりわけ教育普及活動やワークショップは来館者が主体的に美術に関わる機会を提供すると同時に、参加者同士の対話や協働を促進し、知識や経験を共有する場として機能するだけでなく、「鑑賞の場」から「学び・交流の場」への拡張、および美術館と地域との新たな関係性を構築する重要な手段として注目されている。

諫早市美術・歴史館でも、２０２２年度よりこれまでのワークショップの内容を一新し、ゴールデンウィーク期間を中心に地域住民が気軽に参加出来るワークショップを考案してきた。また、その翌年からは更に幅を広げ、年間を通して季節毎に参加出来るワークショップを実施している。

このようなことから、「諫早の美術家展」でもワークショップを取り入れ、アート体験やギャラリートークを通じて、鑑賞者参加型のプログラムが実施され、文化芸術の視野を広げる役割を果たしている。また、出展作家自身が講師となり、制作工程の紹介や体験型プログラムを実施することで、鑑賞者が「見る側」から「関わる側」へと立場を変える機会が提供された。これにより、作品の背景にある技法や思想への理解が深まり、美術をより身近なものとして捉える契機となった。

４　今後の課題

一方で、アート体験の制作時間や定員の関係から参加できない来館者も見られた。今後は参加希望者が出来る限り多く体験できる、またはより気軽に参加できる体験プログラムの検討が課題である。また、展示については、展示理解を深めるための多言語表示など、本展が地域に定着していくためには、継続性とともに、市民との距離を縮める工夫が不可欠である。美術は特別なものではなく、日常生活の延長にある文化として認識されていくことが重要である。

おわりに

「諫早の美術家展」は当初の企画から単年の展示を超えてシリーズ化・継続的な実施が計画されており、令和８年度には国内外で活躍する諫早ゆかりの作家の作品展を計画中である。

その後も若い世代の作家の展示やテーマに沿った作品の展示などを取り込み、展示テーマの多様化や参加者層の拡大または他の美術機関との連携強化（共同企画や交流展）など地域性を大切にしながらも、時代の変化や新たな表現を柔軟に取り入れていく姿勢が期待される。ベテラン作家の蓄積された表現と、若手作家の新鮮な視点が交差する場として発展していくことで、今後も地域に寄り添い、市民にとって親しみ深い美術展として継続されていくことを願いたい。

（たなかまいこ／当館専門員）

「美歴ＰＲキャラクターズ」活動報告
ＰＲキャラクターの必要性

古　川　知　佳

はじめに

諫早市美術・歴史館は２０１４（平成２６）年３月１日に開館し、２０２３（令和５）年度に１０周年を迎えた。私は１０周年を迎えた特別な年に受付案内員として当館で働くこととなり、受付案内員の傍ら事務補助として館の広報活動も担当している。

私は高校、大学と共に美術系の学校出身であるため、「他人よりデザインに触れる時間が長かった分慣れている」と自分を過信していた。しかし、実際に広報活動に携わってみると難しいことだらけで、頭を抱えることも多々あった。

そんなある日、ふと考えた。「この館はキャラクターを作らないのかな？」と。

最近では「ゆるキャラ」というものが世の中に浸透している。都道府県や市町村、施設や団体には必ずと言ってもいいほど「ＰＲキャラクター」が存在する。諫早市にも、諫早のうなぎの妖精「うないさん」がいる。彼らはとても可愛く（例外もいる）、親しみやすく、宣伝したい何かに触れる「きっかけ」となってくれる。言うなれば、彼らは「触れる前に躊躇する層」や「興味が無くて素通りしてしまう層」の興味を引き、一瞬立ち止まらせ温かく迎え入れる「玄関マット」のような役割を果たすのだ。

後日、企画会議に参加する機会があり、思い切って「ＰＲキャラクターの作成」を提案した。思っていたよりもあっさりと許可がおり、すぐにキャラクターデザインを考えた。

こうして生まれた「美歴ＰＲキャラクターズ」。２０２５（令和７）年度から始動した彼らの活動報告、プロフィール、そして「ＰＲキャラクターの必要性」について今後の活動と絡めながら考える。

１　美歴ＰＲキャラクターズ　２０２５（令和７）年度 活動報告（使用報告）

①チラシ･ポスター等の掲示物、館広報誌

▲スクールプログラム　各学校へ配布、当館エントランスに設置

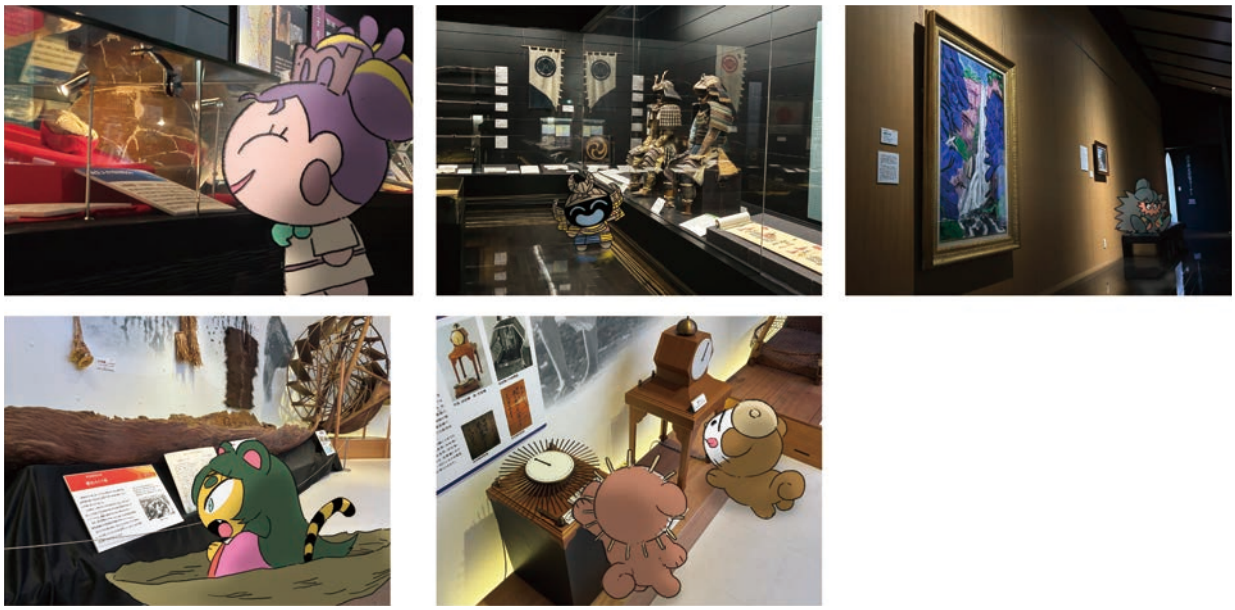
▲ BIREKI だより No.37 4 ページ目　（左）配布、設置
季節のワークショップ 2025 チラシ　（右）配布、設置

▲令和７年度「野口彌太郎作品展」ポスター　展覧会会場前、館内外掲示板に掲示予定 (2026(令和 8) 年 1 月現在)

▲ 11/3(月･祝)「文化の日 常設展示室無料開放」掲示物
正面玄関、常設展示室前に設置

◀ 常設展示室 注意書き　諫早の変遷コーナー いさはやデジタル年表前設置

②インスタグラム



▲ 11/3(月･祝)「文化の日 常設展示室無料開放」宣伝投稿用イラスト 5 枚　(2025(令和 7) 年 10 月 24 日 投稿)

▲ インスタグラム ストーリーズ投稿用 月間スケジュール表（当館インスタグラム ハイライト「月間スケジュール」参照）

③動画

▲ 諫早市美術･歴史館 PR 動画「美術･歴史館ってどんなところ？」　常設展示室の紹介　（スクリーンショット）
美術･歴史館 1F エントランスホール、諫早駅構内にて公開中 (2026(令和 8) 年 1 月現在)

◀ 公開の様子 (美術･歴史館 1F エントランスホール)

④その他

◀ 総来館者数 30 万人突破
記念色紙

◀ 総来館者 30 万人突破
記念イベントの様子

▲「諫早さるくマニュアル 二〇二五」
実際のファイル

◀ 美術･歴史館 ボランティア歴史ガイド用
「諫早さるくマニュアル 二〇二五」
ファイルの背幅装飾用に作成

◀ 美歴 PR キャラクターズ ぬりえ「季節のワークショップ バージョン」
全６種　夏休み期間中など子供達の来館が多い時にコーナーを設置

◀ ぬりえコーナーの様子 (諫早の美術家展期間中)

◀ ホールに設置した写真撮影コーナー (12 月末日～ 1/12 まで設置)

２　美歴ＰＲキャラクターズ プロフィール

「美歴ＰＲキャラクターズ」はグループ名であり、キャラクターそれぞれにもちゃんと名前が存在する。もちろんキャラクターデザインの基になった資料もある。実際の資料の写真とキャラクターを見比べて、資料の特徴がどのようにキャラクターに落とし込まれているのかを見て欲しい。（２０２６（令和８）年１月現在の情報であり、今後、情報の追加や変更の可能性あり。）

① ほほえみちゃん

キャラクター　（左）：髪型は菖蒲、髪飾りは眼鏡橋をイメージしており、基になった資料が縄文時代のものであることから、服装など全体の雰囲気を縄文人らしくした。

基になった資料（右）：「縄文人のほほ笑み」土偶頭部 西常盤貝塚（縄文時代 約5000年前）常設展示室「諫早の歴史」コーナーに展示

② 諫早（いさはや）くん

キャラクター　（左）：鎧兜をそのままデフォルメ。厳つく怖いイメージを払拭するために、やわらかく優しそうな表情にした。

基になった資料（右）：「紺糸威具足」諫早領主着用　（江戸時代）
常設展示室「諫早の歴史」コーナーに展示

③ しょーきくん

キャラクター　（左）：鍾馗様のように賢くて強いイメージと、像自体のもつ可愛らしさを表現。服には長与焼の独特な色合いの柄を使用。（見えないが）

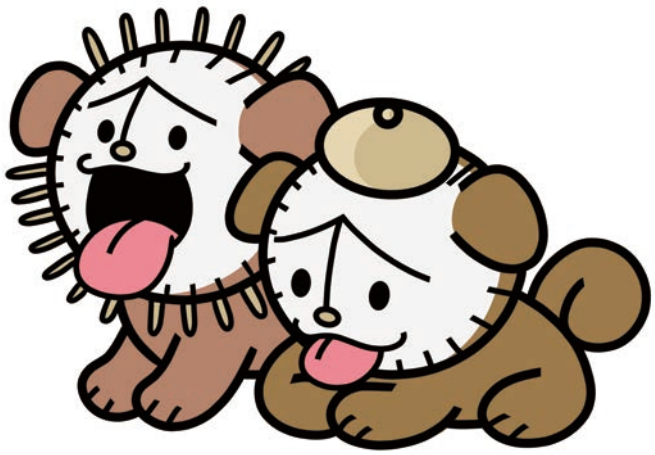
基になった資料（右）：「内田甕山焼 鍾馗像」　1925（大正 14）年
常設展示室「諫早の美」コーナーに展示

④ 虎御前（とらごぜん）

キャラクター　（左）：森山町に伝わる昔話に登場するお姫様「虎御前（とらのごぜん）」の「虎」の文字から、虎のお姫様をイメージ。

基になった資料（右）：「唐比のくり舟」（奈良時代後期～平安時代中期 約 1200 年前）
市指定有形文化財　1981（昭和 56）年 7 月 14 日指定
常設展示室「諫早歴史学習コーナー」に展示

⑤ ヱーセル犬（けん）



キャラクター　（左）：送信機と受信機からなる指字式電信機ということで、可愛く親しみやすい双子の犬とした。実際に触ることができるレプリカの展示があるので、気軽に触ってみて欲しいという思いも込めた。

基になった資料（右）：「ヱーセルテレカラフ」　（江戸時代）
国指定重要文化財　2016(平成28)年９月４日指定
実物は常設展示室「諫早の歴史」コーナーに展示（期間限定）
レプリカは常設展示室「諫早歴史学習コーナー」に展示

３　ＰＲキャラクターの必要性と今後の展開

ここでは諫早市美術・歴史館において、美歴ＰＲキャラクターズがどのような役割を担うのかを考える。

まず、ＰＲキャラクターの仕事とは何か。文字通りＰＲ活動をすることなのだが、ただ宣伝をするだけならキャラクターはいらない。何故キャラクターが宣伝活動に必要なのか。美術・歴史館の場合はこういう理由から必要であると考える。

①敷居を低くする

美術館や博物館ときくとどうしても格式高くお堅いイメージがあり、お客様の中には入りづらいと感じてしまう方もいるだろう。業務中、入り口で躊躇している方を見たことがある。展覧会の主催者として館を利用しようとする方の中にも「こんな立派なところで作品展を開催していいのかな？」と躊躇してしまう方がいるかもしれない。それらはあまりにももったいないことだ。

そこでキャラクターを使用することでどうなるか。キャラクターは持ち前の親しみやすさと可愛さで、格式高いイメージや緊張感を緩和し敷居を低くしてくれる。まるで手を差し伸べてくれているようなそんなイメージに近い。

美術・歴史館は地域に根付いた施設であるため、親しみやすさは必須なのではないかと考える。地域の人々がたまたま近くを通った時に、「ちょっと寄ってみるか」と気軽に立ち寄れるようなそんな場所を目指すには、キャラクターの存在も必要だと感じた。

②人目を惹く

何と言ってもキャラクターは人目を惹く。素通りしようとした人を引き留める力を持っている。「このキャラクターは何だろう？」、「ちょっと行ってみようか？」など訪れるきっかけになることは十分にあり得る。

美術・歴史館は無料の展覧会が多く、とても貴重な資料を無料で観覧出来る展覧会もたくさんある。常設展示室にも貴重な歴史資料や美術品等が展示してある。しかし、どんなに興味深く面白い展示でも取り扱うテーマによっては集客がなかなか難しい場合もある。折角の貴重な機会、どうせなら多くの人に見てもらいたい。そのためにはとにかく来館してもらわなければいけない。

その来館のきっかけの１つとして、ＰＲキャラクターは必要だと考える。キャラクターを目当てに来館し、期間中の展覧会や常設展示を見て帰る…このように訪れるきっかけとしてキャラクターが機能すれば、より多くの方に展示を見てもらえるはずだ。

美術・歴史館においてＰＲキャラクターはどのような役割を担うのか。それは、「館の敷居を低くしふらっと気軽に立ち寄れる雰囲気を作る手助け」と「今までとはまた違った客層の獲得」という２つの役割ではないだろうか。

まだ始動したばかりで美歴ＰＲキャラクターズの知名度は低く、館のＰＲ活動に役立っているのか、これから役立たせることが出来るのかと不安に感じることはある。しかし、上記の「２つの役割」をしっかりと果たせるくらいの立派なキャラクターにしていかなくてはいけない。つまりキャラクターを扱う側の力量も試される。

今年度は、すでにやっている宣伝方法にＰＲキャラクターをプラスするような形で使用していたが、来年度からはもっと積極的に「キャラクターだから出来る方法」を考えて、目新しいＰＲが出来ればいいと思う。まだ何も思いついてないが。

おわりに

始動して１年が経とうとしている「美歴ＰＲキャラクターズ」。今後、どのように活動させていくかはまだフワフワとしている状態だが、作った以上、人々に愛されるようなキャラクターたちにしていきたいと思う。

２０２６（令和８）年度も、「美歴ＰＲキャラクターズ」を温かく見守っていただけたら有難い。

（ふるかわちか／当館受付案内員）

出前授業「諫早大水害」

岩 永 郁 子

はじめに

≪諫早大水害≫

昭和32年7月25日、朝から降り続いた雨は、午後19時頃一旦小康状態となるが、19時30分を過ぎると雷を伴う大雨となり、本明川は氾濫した。特に21時からの3時間で300ミリの雨量となり、1 日の総雨量は1000ミリを超えたといわれている。 死者・行方不明者が630名、経済的な被害総額は98億円。

過去をしっかり学ぶことが、よりよい未来につながっていく。そう信じて令和6年４月、本明川流域を校区とする3つの中学校（明峰中・北諫早中・諫早中）に、「諫早大水害」の出前授業をさせてほしいと相談に伺った。3校共に快諾をいただき、6月中に実施できたことは意義深い。諫早大水害の概要については、『諫早水害誌』や『諫早大水害20周年　復興記念誌』からまとめた。

1　学校ごとに

全体的な被害の様子に加えて、それぞれの学校区での被害の中で、特に伝えておきたい事柄は下記のようなことである。

(1)明峰中学校

明峰中学校は昭和60（1985）年に本野中学校区全域と北諫早中学校区一部を校区として開校したが、「諫早大水害」時は、本野小学校大破、本野中学校も相当な被害を受けた。本野地区の山津波の写真は降水量のすさまじさを物語る。また、当時の校区駅前の永昌町も裏山橋右岸がえぐられ、死者は100人以上となった。永昌町から20キロ流され有明海で救助された小森洋子（当時中3）さんの話も伝えた。

(2)北諫早中学校

当時の校区である永昌町で100名、天満町で120名の死者が出た。上記の北中3年の小森洋子さんの体験の中で、特に小森さんが北中の校歌を歌い、自分を励ましていた話は外せない。さらに、この話が全国紙に記載され、ゆかりのない人からも「この校歌はいいに違いない」「聞いてみたい」と評されたことを、悲惨な体験談と共に胸に刻んでほしい。

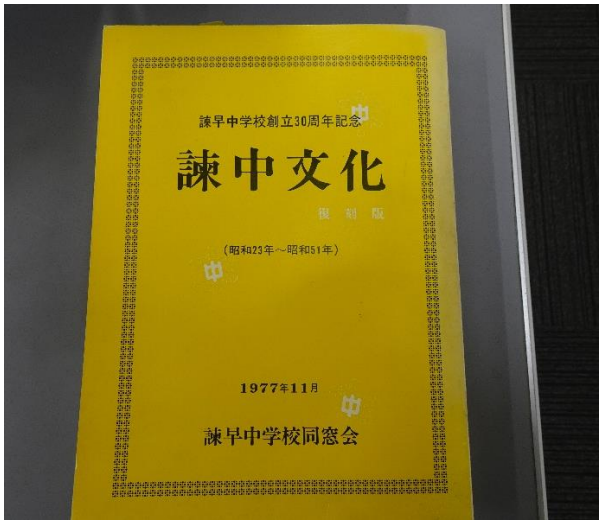
漂流12時間、少女教わる

丸太にしがみつき
歌い続けた校歌
波間に父母の顔浮ぶ

(3)諫早中学校

諫早中学校に勤務されていた二人の先生の水害体験をからめながら話した。原爆で妻子を亡くし、諫早で新しい家族と再出発をした大宮先生と校是《啐啄》の決定時の西岡校長先生の水害体験。大宮先生のことは水害学習のために昭和23年から昭和51年の学校便り「諫中文化」を読み、私自身初めて知り得たことだった。

また、この「諫中文化」には水害直後の生徒の作文や詩が掲載されているので、できる限り多くの作品を紹介したい。



2　共通して伝えたいこと

そして、出前授業の終わりには、2つのことをお願いした。

①7月25日の「諫早川まつり」では、万灯と花火は楽しみであるが、68年前の「諫早大水害」の慰霊の日であり、生き残って苦労された方を励まし感謝する気持ちも持ってほしい。

②数多くの「諫早大水害」の体験談を読んで、災害が起こった時に大事なことは「支え合う優しさ」と「我慢強さ」であると痛感した。これらを毎日の生活の中で自分で確実に育て、人の痛みがわかる人間になってほしい。

3　生徒の感想から

・知っているようでしらないことだらけだった。 しっかり学んで、伝えていきたい。
・川まつりでは、お参りする気持ちを忘れないようにする。
・祖父から話を聞いたことがあった。元通りになるまで大変苦労をしたらしい。もっと話を聞いて

おきたい。
・校歌を歌うたびに小森さんを思い出したい。つらい経験を乗り超えてこられたことに敬意を示すために。
・諫中を創ってくださった大宮先生の話はショックを受けた。そんな人生があるとは。自分だったら、と考えるだけで怖くなった。
・科学が発展して予報などが、詳しくなったが、災害は避けられない。被害が広がらないように知恵を出しあいたい。

おわりに

この諫早市美術・歴史館が所蔵する当時の写真や文書、記録をさらに活用することで、防災意識を高め、人の痛みを自分の痛みとして活躍できる若い世代の育成につなげたい。
これからも諫早市美術・歴史館が担う重責である。

（いわながふみこ／当館専門員）

諫早の民俗　諸職―下駄

（平成2（1990）年調査）

川　内　知　子

はじめに

履物に関して英語ではFOOT－WEAR、FOOT－GEARといった表現があります。前者は「足に着ける衣服」、後者は「足に着ける歯車」という意味です。履物の中で下駄は古代からあります。平安時代から中世の絵巻物、物語には様々な場面で描いてあり、水場での洗濯の際などに活用していた履物です。その下駄は諫早でも水を扱う作業が多い酒屋男が専ら履いていたもので、水汲みに往来する酒屋男の下駄の音は強く記憶に残ったものでした。

一方、農家や漁家では作業時以外の普段履きやよそ行き用としての活用でした。普段履きは庭下駄と呼んで、田畑や山での仕事上がり、近所へ出向くときなどに履き、あらたまった場へは上等の桐下駄などを履いていました。衣服とともに、時に応じて履くもので、「足に付ける衣服」というのが大半でした。下駄は正月に親や家族への贈答品とすることが多く、いただいた下駄は新しいうちはよそ行きに、それを履きふるすと庭下駄にと、着物と同じようにおろしながら履いたものでした。

下駄の歴史は古く、縄文時代から用いられていましたが、水田稲作の普及は灌漑設備をもつ「水田」での下駄の製作や着装を進展させました。下駄のなかでもっとも古いのは田下駄で、労働から生み出されたものです。しかし、この田下駄は昭和30年代には見られなくなりました。農地改良などで深田がなくなり、草や堆肥といった肥料から化学肥料に替わったことからでした。浜下駄と呼ぶものもあります。これは漁民が炎天下の海辺での作業時や、製塩での砂に深い足跡をつけないようにとも履いていました。

足駄（無歯下駄）

諫早でも、足駄と呼ぶ平板な下駄（無歯下駄）を諫早湾岸の潟地で履いていました。表面積を広くとった平板の大きな下駄で、粘土質の軟弱地盤である潟の中に足が練り込まないように、足が潟の上に出ているように履いたものです。このため潟に抜かる歯はありません。弥生時代の静岡県出土の大足に類するもので、足及び体を守る道具としての機能を持たせたものです。道具は手足の延長で、使う者の使い勝ってが良

いように、各々で自分に合わせて作ります。この足駄もそうした一つで、大きさや緒をすげる位置など個人により異なります。
　なお、この足駄は粘土質の潟の上での履物なため、潟から引き離す（足をあげる、かわす）のにコツが要り、片側をやや斜めに持ち上げ隙間を作り、その隙間の方へ足を滑らせるようにして潟から離します。そのまま足をあげようとしても、粘土に密着しているため、足は容易にはあげられません。

　本稿で紹介するのは大正７（1918）年12月創業の「杉本下駄」に下駄職人として16才から21才まで務めた話者の下駄作りです。
　下駄職人はどの下駄でも作るというのではありませんでした。幾種類も作ることはできますが、それぞれ差し歯下駄、連歯下駄、高下駄と専門に作っていました。話者は桐での連歯下駄を作っていました。ほかには後丸（2つ割りで作り、分け離しはしないで片方ずつ作る。幅3寸、高1寸４～６分）などを作ったこともありました。

1　材料

　下駄にする材は立木で購入します。真っすぐで、枝から枝までの間隔があり、虫喰いのないものを選びます。話者は桐下駄を専門に作っていたため、桐を求めましたが、そう多くはなく、諫早、大村、多良岳とまわり、2，3本ずつ購入。時には新潟や福島からも買い求めていました。10月から春先までに求めていました。芽が出るころからは木は太くなり、売主が売らなくなり、高値となるからです。購入した立木は長くおかずに8寸長さに輪切りし、皮を剥き、2つ割りや木によっては4つ割りし、そのまま干していました。アク出しです。尤もこうした丸太を割ったままで長期間置くと割れるものもありました。このため、しばらく置いたものは少しずつ糸子、枕と分きます。
　話者がよく作ったのは平下駄（連歯下駄）で、ほかに高下駄（差し歯）、利休（差し歯で低い）も注文があれば作っていました。差し歯にはタブやブナを使います。杉は反るため歯に向きませんでした。木には柾目、板目とありますが、長持ちは同じくらいです。板目の下駄の天には「天ばり」と言って柾目の板の鉋屑を接着剤で貼ります。「天ばり」のあと、これにフェルトを当て、何枚も重ねて万力で締めていました。

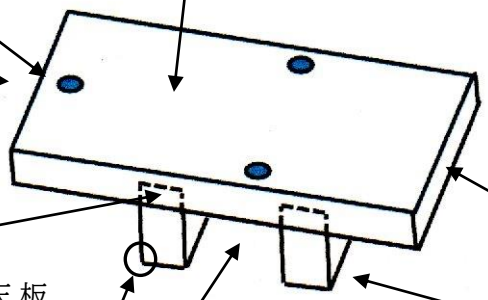
【下駄部分名称】

天板につくった 3 か所の孔を眼と呼びます。

天、天井
長（男物）7寸8分
（女物）6寸8分～7寸2分　ほど
幅（男物）4.5～5分
（女物）2.7～3分　ほど

天板の厚さは
（男物）4～5分
（女物）3分　ほど

はなさき
はなさきの幅をやや広くします。



けつ

あご
あごの深さはおよそ天板の2/3ほど。
差し歯を入れるところ。連歯下駄にはありません。

あい
あいの幅は1寸7分ほど。

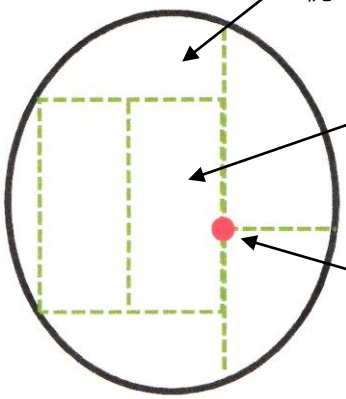
後ろの歯は前のより幾分高くします。

返りがよいように丸みをつけます。

歯の幅　（前）1寸1分ほど
（後）1寸2分ほど。
歯の高　（男物）1.75～2寸、後ろをやや高めに
（女物）1.6 寸から 1.8 寸、後ろをやや高めに
継歯の高（男物）2 寸 8 分
（女物）2 寸 5 分

2　下駄作り（連歯下駄）

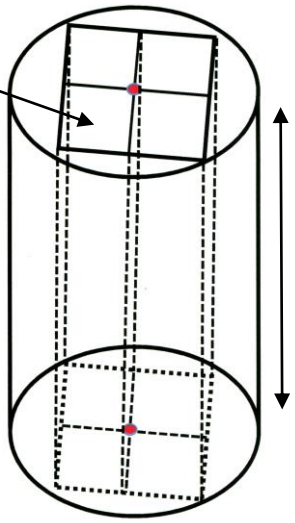
①糸子とり（木取り）



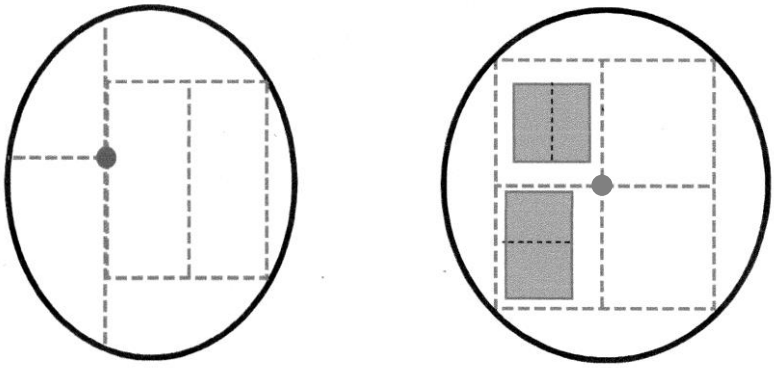
枕：片方分、節があるのも多い。

糸子
（一足分）

芯：木の中心が芯（真ん中）とは限りません。
芯を中心に木取りします。



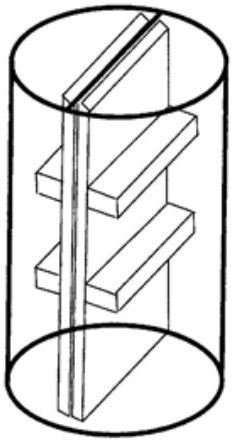
長8寸



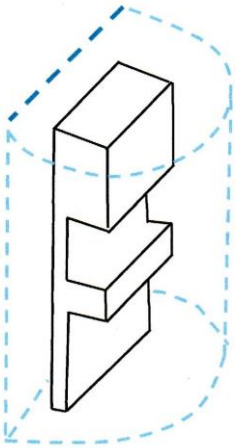
材を見ながら、無駄を少なくした糸子を取ります。

丸太（生木）から糸子と呼ぶ下駄一足分の8寸長さの材木に切り分けます。これが糸子どりです。8寸長さに分いた丸太はその大きさにより、2つ割り、4つ割りした8寸角材（糸子）にとります。これをワクと言います、分けることです。角にとった残りの端々は枕と言い、1足の片方がとれます。丸太の8寸輪切りは横びき鋸で分きます。縁は縦びき鋸で分いていました。話者の職場では糸子は4つ割りがほとんどで、板目は2つ割りでした。木の枝の部分は甲羅といい二つ割りや継歯の材料にしていました。甲羅では高下駄を作り、1つの甲羅を2つにたち割り、1足をとります。高下駄には差し歯のもあり助六と呼んでいました。助六の歯は薄歯（3分ほど）、厚歯（5分ほど）とありました。このほかに甲羅では利休も作っていました。利休は高下駄よりも歯は低めです。甲羅のように2つ割りしか出来ない材木からは子供用などの小さな下駄にする糸子もとっていました。

糸子をとれない材からは材の太さに合わせて、分きます。
甲羅のような2つ割りからは図のように天板を背中合わせにとります。
2つ割りのは板目の下駄で、節の跡があり、小さめのをよくつくります。



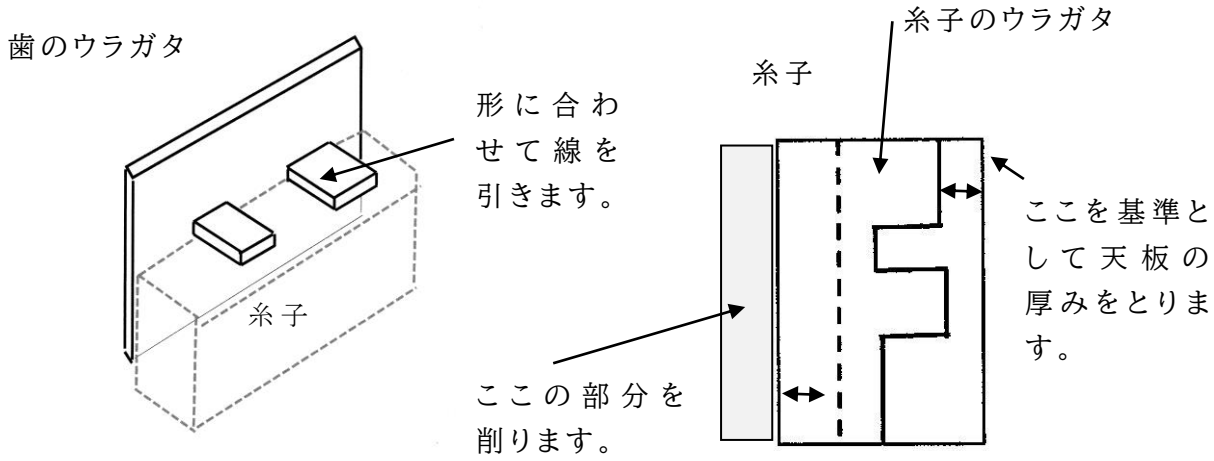
1つの枕からは片方をつくり、ほかの枕から作ったもう片方と組み合わせて1足とします。



②型をとる

糸子のウラガタをあて、型をとります。そのあと罫引きで天板の厚みをとります。

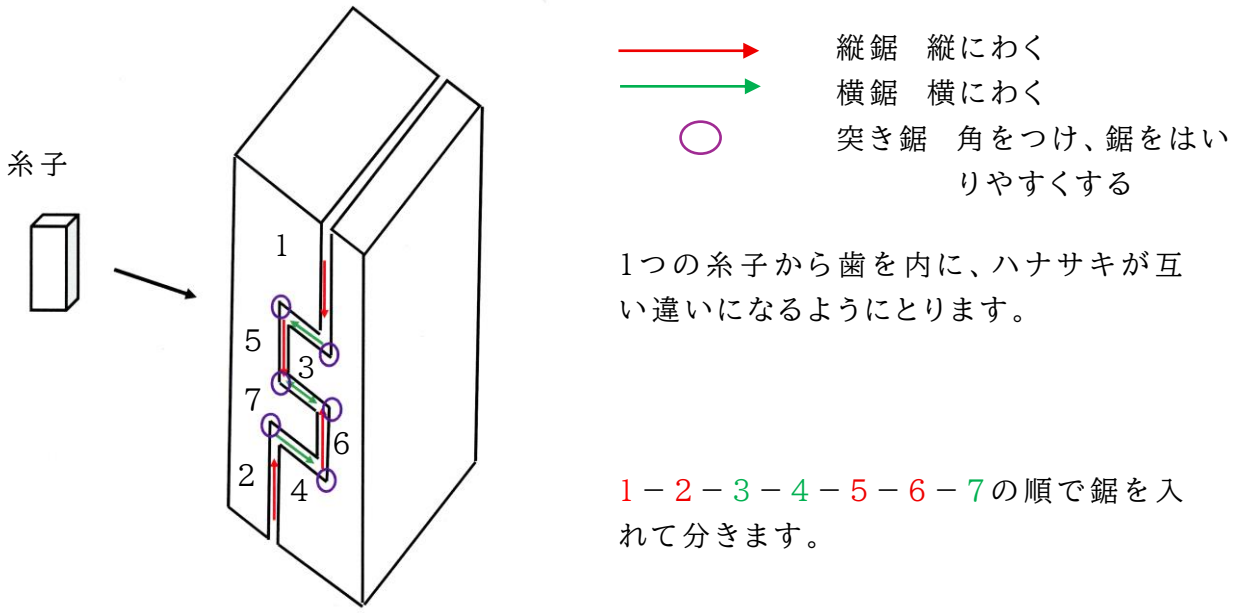
ウラガタを当て、型をとり、脇は罫引きで印を付ける作業です。ウラガタには糸子のウラガタの外に歯のウラガタ、天ガタとありました。



③糸子引き離し

糸子鋸で粗々に一足分の下駄に分きます。糸子鋸は縦鋸、横鋸、突き鋸とあり、3通りの引き方をします。糸子の両側から万力で締め、上下を返しながら上から下からと交互に分きます。

突き鋸は先端は細く、手元になるほど高くしてありますが、このほうが突きやすく、突き鋸もスムーズにはいります。一様に同じ高さ（幅）だと入れにくく、力もよけいにかかりました。



④天日干し

この引き分いただけの粗削りの下駄は庭に積み重ねて置き、雨ざらし、日さらしにしておきます。これは十分にアクを抜くためのです。もっとも日差しがあまり強いと割れたりもするため、重なる部分を多くして重ねます。桐はアクを抜くことで狂いが出ず、曲がることもありません。アクを抜いた下駄はやや白っぽく色がかわります。ここでの分いた下駄の天日干し期間は全体で凡そ2ケ月ほどでした。1足を乾かす期間はそう長くはなく、10日ほどで干しあげたり、職人が乾燥具合を見ながら干す期間を塩梅していました。

分いた下駄はこのように
重ねて干します。

⑤天と脇を削る

鉋をかけて、調整しながら削ります。このとき一足分を組み合わせます。正目の糸子からのは一つの糸子でとったのを一足としますが、板目のは同じ糸子でとは限らず、目の筋などを見ながら、別の糸子のと組み合わせて一足とします。

必ずしも一つの糸子から一足というのではなく、あちらの糸子の半分（左）と、こちらの糸子の半分（右〉と組み合わせます。組み合わせるのでこうした鉋掛けでの調整が要りました。

太平洋戦争中までは前が擦れないように鼻先をやや厚くしていましたが、戦後はウラガネを当てるようになりました。

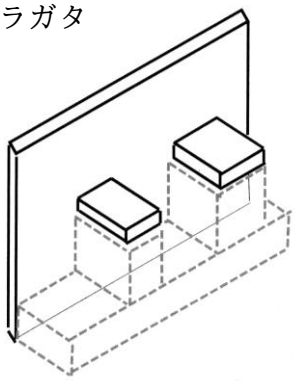
なお、差し歯下駄の場合、アゴに差し歯を打ち込みますが、この段階でアゴひき鋸で真っすぐにアゴ部分を垂直に分き、そのあとアゴサラエノミですき、アゴをつくります。

歯の幅に合わせてすますが歯の幅は4.5分から5分。高さは2寸8分（男）、2寸5分（女）。アゴに歯を入れるときは入れ込む部分を叩いて締めて、アゴに打ち込んでいました。

こうしたアゴですが後には高下駄にのみにつくり、ほかのは接着剤で歯を張り付けるよになります。これを継ぎ歯といい、接着剤が出来た太平洋戦争中から出回りました。継ぎ歯は高2寸8分（男）、2寸5分（女）で幅は4.5から5分くらいでした。

⑥歯のウラガタを打って歯を作る。

歯のウラガタ



歯のウラガタを打ち、鋸でひきますが、この時、同時に天型も罫引きで墨をうってとります。天ガタの鼻緒の位置に針をつけてあるため、これをつけることにより鼻緒の位置が決まります。歯は真っすぐのほかに歯の先がややすぼまった作りのものもありました。

歯には差し歯がありますが、差し歯にはタブやブナがよく、杉はそるため差し歯には向きませんでした。

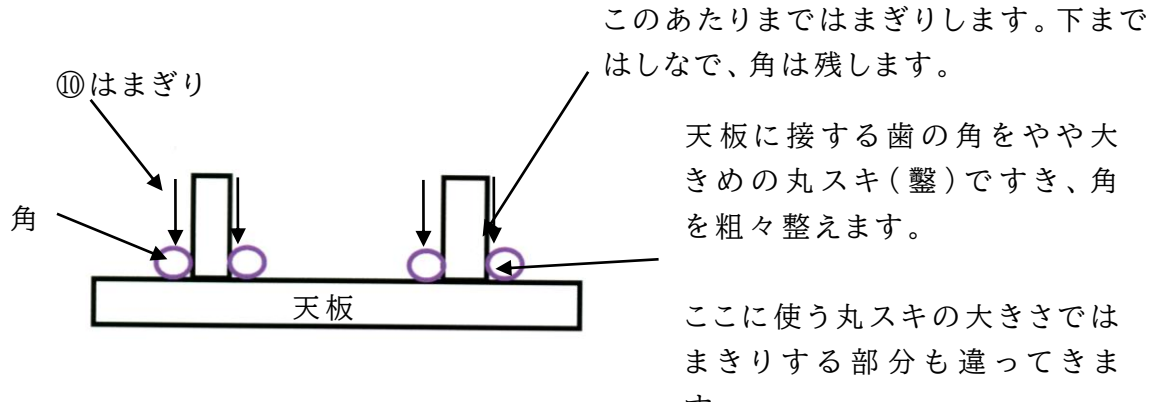
下駄の良し悪しを見るとき、歯を合わせます。連歯の場合は問題ないのですが差し歯の場合、左右の下駄の歯をあわせて、しっかり噛み合うのが普通のところ、隙間ができることがありました。これは差し歯を入れるアゴのつくりが真っすぐでないためで、差し歯を入れても真っすぐならず、そのため隙間が出来るのです。

⑦　高さ揃え

一足を並べで見るほか、片方をひっくり返し、高さをあわせます。

⑧アラスキでの角すき。

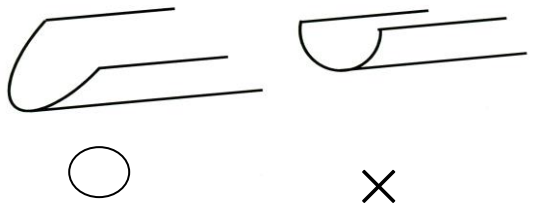
天板と歯の角をすく作業で、丸スキですきます。このとき、次の作業のはまぎりで残す角の部分を加減します。このため丸スキの大きさを選んでいました。丸スキですくときれいに仕上がりました。丸スキは 3 から 3.5 分くらいのスキノミ。



⑨鼻緒の孔つけ

鼻緒を通す孔をつけるもので、ツボキリで孔を開けますが、これに使うツボキリは丸のみで、刃の中央のところを先へ出したものです。

ツボキリの柄は角形でこれにトッテ（持ち手）をつけて回しながら孔をあけます。柄はこのトッテをつけるために四角としていますが、これは回すのを楽にするためです。



ツボキリの先は真ん中が出ている作りで、先が出ていない、平たいのでは木にはいりにくく、孔を通しにくく、木を傷つけやすかったのです。

⑩はまぎり

ハマギリ銑で歯の前後を削り、仕上げます。歯の角のあたりまで削ります。どこまで銑をかけるかは、次の角すきの作業で使う丸スキの大きさによります。

9寸ほどの長さの銑の両端を握り、左右に引きながら削ります。これは鋸で分いた

だけでは見た目が粗く、悪いため、銑を当ててなめらかに仕立てます。歯の角まではまぎりしないように、角は残します。

⑪角の仕上げ

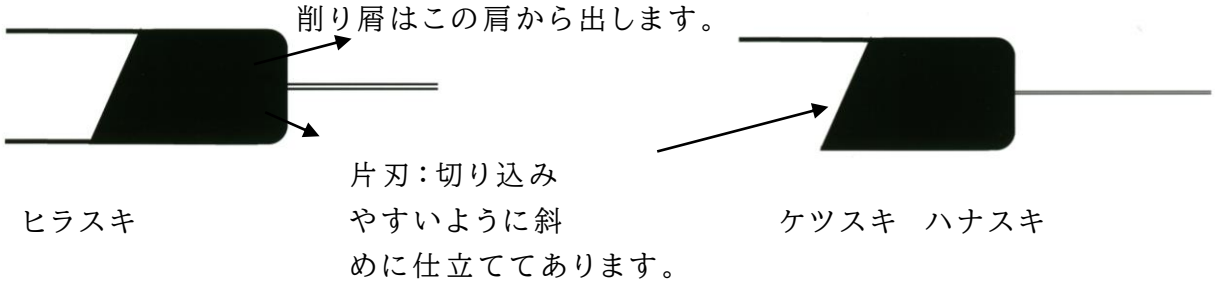
先にすいておいた角を丸スキで再度すきます。これで角をきれいに仕上げます。

⑫下駄の裏を仕上げる

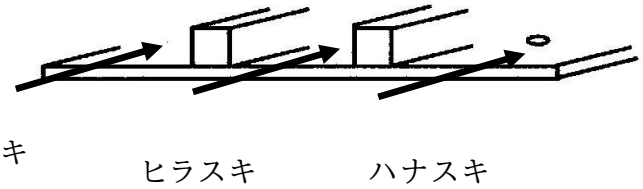
下駄の裏側を整える作業で、歯の間をジューノーですき、仕上げます。ジューノーは梳く道具で、天板の裏側部分を調整します。

ジューノーには　ハナスキ　鼻先を梳きます。片刃
　　ヒラスキ　歯と歯の間を梳きます。片刃
　　ケツスキ　踵のところを梳きます。片刃　　とあります

ジューノーは全て片刃で、端にケンと呼ぶ、針のようなものがつけてあります。ケンはヒラスキは両端、ハナスキ、ケツスキは片端につけてあります。



刃は切り込みやすいように斜めにつけます。ヒラスキは１寸６分ほどの片刃で、両剣があるために斜めに梳き込みません。まっすぐ、つまり薄くすくことができます。ケツスキとハナスキは剣が片側にあり、これをカタジューノーとも言います。ジューノーは大中小とあり、下駄の大きさ、つまり歯と歯の間隔にあわせて使い分けていました。



⑬なかを揃える

下駄は前後が同じ幅ではなく、後ろ幅をやや広めとします。恰好のよい下駄とするためです。

天板をあわせ、木の頭（上）から削りますが木の目にあわせます。根の方から削ると

逆目になるためで、木の上の方が下駄の尻になっていたら尻から削ります。木の目に合わせた鉋掛けで、前後が同じ幅にならないように、後ろ幅をやや広くとります。鉋をかけたあと、前後を互い違いに合わせ、前幅と後ろ幅に差があるのを確認します。

⑭角に丸みをつける

天板の角のところを丸メ銑で丸く削ります。

四隅の角に丸みつけるもので、これは足先を傷めないためのです。下駄の角は足先に当たると痛いものでした。

⑮調整

天板は仕上げ鉋をかけて調整。縁も鉋で面取りして仕上げます。

⑯色づけ

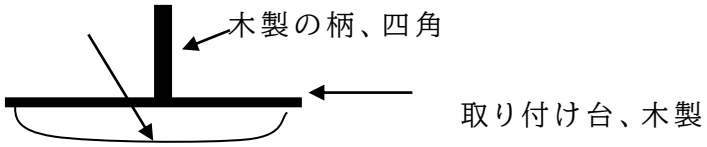
ベンガラ、研ノ粉を水でといたものを刷毛で塗ります。乾かしながら何度か塗りを重ねます。ベンガラ、研ノ粉、水はぽたっとするくらいの固さに混ぜます。色の具合を見ながら、乾かしては塗りを繰り返します。最後はバレンで磨き、研ノ粉を落とします。

砥の粉は板、柱の着色や目止め、漆器の塗り下地、刀剣を研ぐときの粉にも使われています。粘板岩、頁岩の風化により生成される超微細な粒状の粉、もしくは人工的に粉末とした水成岩、砥石を切り出したときに出る粉末を焼いて粉末にしたものです。

⑰蠟みがき

蠟を付けて、バレンで磨きます。この時には蠟を多量につけます。

こうすると艶がでていました。そのあと焼き物で磨きます。これで更に艶を出します。



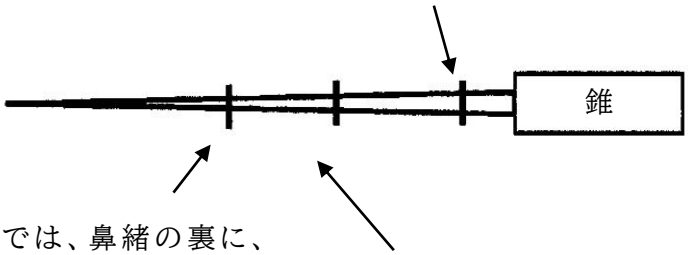
⑱鼻緒をすげる

鼻（眼）から通してすげますが、鼻緒の緩みは職人の勘です。

裏の結び目に錐を通し、通した位置で緩みを図っていました。錐の丸み分の緩みがつくわけです。鼻緒は麻で作りますが、上等の品になると麻を綿で巻き、それを布で包みます。

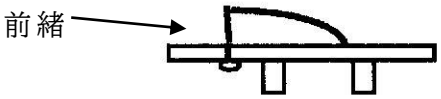
鼻緒をすげるのは下駄職人ではなく、ほかの者（家族や奉公人）がするのが大方でした。

足の形、大きさは人それぞれで、足の甲の高い人の場合は錐の根元の辺りで締めます。客に合わせて調節していました。



大きさ 9 文の下駄では、鼻緒の裏に、錐をやや前方の、だいたいこの位置まで通し、その状態で鼻緒を締めます。錐の部分が緩みとなります。あらかじめ仮に結んでおき、そこにこの位置まで錐を通し、その状態で締めるということが多かったようです。
9文の下駄の前緒は真っすぐ（ほぼ垂直）にたつくらいでした

10 文の下駄ではおおよそこの位置、錐を真ん中くらいまで通し、その状態で締めます。
10 文の下駄は前緒をやや前へ倒すくらいのゆるみをとります



女性用の高下駄です。天板に化粧用の畳表を貼っています。高下駄は泥はねを防ぐために歯を高く、さらに泥水との接着面を狭くする目的で歯を薄くしています。爪先をつけてありますがイチョウ柄を散らした模様入りのビニール製で、また歯も塗ってあり、高級品でした。

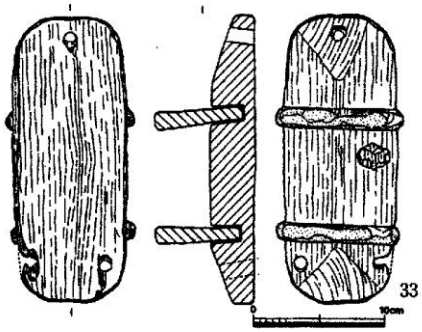
女性のよそ行き用の下駄で、天板に化粧板を貼ってあります。正目の板の鉋くずを接着剤で天貼りしたものです。雨（水）よけの爪先を掛けてあります。これは一般的な透明ビニールでの爪先です。鼻緒の裏にはウラガネをつけてあります。

なお、下駄は傷つくこともあり、そうしたときはケツを削った時に出るコクソウと呼ぶ削り滓を飯粒と練ったものを傷につけていました。

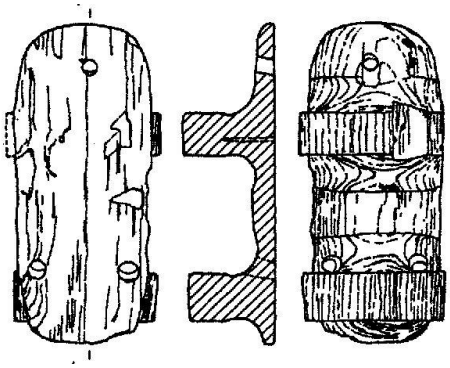
おわりに

諫早でも下駄は古くから活用されたのですが、諫早市教育委員会が平成9、10年度に実施した沖城跡の発掘調査では下駄の台部が出土しています。

差し歯下駄



連歯下駄



諫早市文化財調査報告書第14集「沖城跡」2000年　諫早市教育委員会より

上図は連歯下駄と差し歯下駄で、差し歯下駄の方は緒をすげる後ろ孔が後歯の後ろにありますが、出土品のなかには後歯の前に穿ってあるのもあります。沖城跡からは前のめりの歯を持つ下駄、イグサの畳表をつけた下駄、裏面の中ほどを刳り貫いた下駄など86点が出土しています。この当時からすでに様々な下駄を履いていたことがうかがえます。

沖城は仲沖町と幸町の境界にあり、室町末から戦国期にかけて伊佐早領内を統治した西郷氏が支城とした一つです。西郷氏は文明2（1470）年に高城（現諫早市高城公園）を築くと、領内に沖城を始めいくつもの支城を置きましたが、戦国末に龍造寺家晴に追われました。家晴は伊佐早に入部すると間もなく、沖城を隠居所としました。

（かわちともこ／諫早市文化財保護審議員・元当館主任専門員）

エコミュージアムと博物館運営

坪　内　理　子

はじめに

鎮西学院大学総合社会学部多文化コミュニケーション学科の特別講義のゲストスピーカーとして、大学生に話をする機会を得た。

これは、担当教授との２０年来の公私に渡る交流がきっかけであったため、気軽に引き受けたものの、大学での講義は初めてのことであり、９０分という講義時間にも多少の不安はあった。しかし、当館の来館者は、中高年が中心であり、大学生の来館があまり見受けられない。これは大学生に当館をアピールする絶好の機会なのではと考え準備を進めた。

講義のメインテーマを、当館が基本理念とする「エコミュージアム」とし、諫早市の特長を当館のエコミュージアムの取り組みに活かしている内容を伝えることで、学生生活の4年間を過ごす諫早市のことを、もっと知る機会になり、少しでも、当館への来館に繋がればと考えた。

1　受講生と美術・歴史館

鎮西学院大学は、市内唯一の4年制大学であり、平成２７年から本市とまちづくりの連携協定を締結している。そのため、まちづくりや、図書館のイベント等、市の様々な場面で学生の参画がある。当館においても、ゴールデンウイークに実施した子ども向けワークショップのスタッフや秋に開催している県美術展覧会の会場設営等に協力いただいている。

近年、同大学生は、地元出身者の割合が多くなっていると聞いていたので、本市出身の学生であれば、小中学生の時に学校単位での郷土学習等の機会や、夏休みの研究成果を展示する「小中学校科学展」、美術の授業等で制作した作品を展示する「小中学校美術展」等で来館があったのでは。もしくは、近年の大型企画展時に観覧した可能性もあると想像し、尋ねてみた。

（質問）出身地は？

→ほとんどの学生が長崎県内出身者であったが、本市出身は少な目であった。中には、東南アジアからの留学生もいた。

（質問）何年生ですか？

→1から4年生まで、すべての学年からの出席があり、比較的1年生が多い状態であった。
（質問）美術・歴史館に来館したことありますか？
→3人くらい。
（質問）美術・歴史館が諫早市にあることを知らなかったという方？
→まあまあの人数であった。
（質問）諫早市の人口や面積、長崎県の人口を知ってる方？
→回答が返ってこなかった。

受講生の構成としては、県内出身者は多いが市内出身者は少ない。美術・歴史館の知名度も低いということがわかった。

ぜひ、諫早市の地元ネタを、そして美術・歴史館のことを伝えたい。準備したネタは、何でも話せると安心した。そこで、これまでの異動歴を活かした諫早市の現状について話し始めた。

2　諫早市について

諫早市の人口や面積を知ってますか？

	人　口	面　積
諫早市	１３３，８５２人	３４１㎢
長崎県	１，３１２，３１７人	４，１３０㎢
九州	１２，７７８，９５８人	４４，５１２㎢
日本	１２６，１４６，０９９人	３７７，９７５㎢

（令和２年国勢調査）

（表1）

令和２年国勢調査のデータを引用し、表1により、諫早市、長崎県、九州、日本の人口、面積を説明。人口、面積ともに、日本の1／10が九州、九州の1／10が長崎県、長崎県の1／10が諫早市。つまり、諫早市は、日本の1／1000のまちと言える。

九州地方の自治体人口ランキング

NO	都市名	人口（人）	NO	都市名	人口（人）
1	福岡市	1,612,392	１１	都城市	160,640
2	北九州市	939,029	１２	諫早市	133,852
3	熊本市	738,865	１３	飯塚市	126,364
4	鹿児島市	593,128	１４	霧島市	123,135
5	大分市	475,614	１５	八代市	123,067
6	長崎市	409,118	１６	延岡市	118,394
7	宮崎市	401,339	１７	唐津市	117,373
8	久留米市	303,316	１８	別府市	115,321
9	佐世保市	243,223	１９	大牟田市	111,281
１０	佐賀市	233,301	２０	春日市	111,023

（表2）

表2により、人口規模を九州内で比較した場合を説明。諫早市の人口は、長崎県内21市町の中では3位であるが、九州7県233市町村では12位。会場からは、思った

より上位だったとの反応があった。

図1により、地形の特長を説明。長崎県の中央に位置し、特性の異なる3つの海に囲まれている。東は諫早湾、西は大村湾、南は橘湾。日本全国でも3つの海に囲まれている市は他にない。北には多良山系の山々。市中心部を流れ、諫早湾に注ぐ一級河川本明川とその下流域に広がる広大な干拓地である諫早平野は、平野としては県内一の広さ。山あり、海あり、川あり、平野あり、自然豊かなまちであること。

交通の便もよく、4つの国道と高速道路があり、鉄道も新幹線と在来線、私鉄があること。また、古くから4つの街道が交差するなど、今も昔も交通の要衝であること。

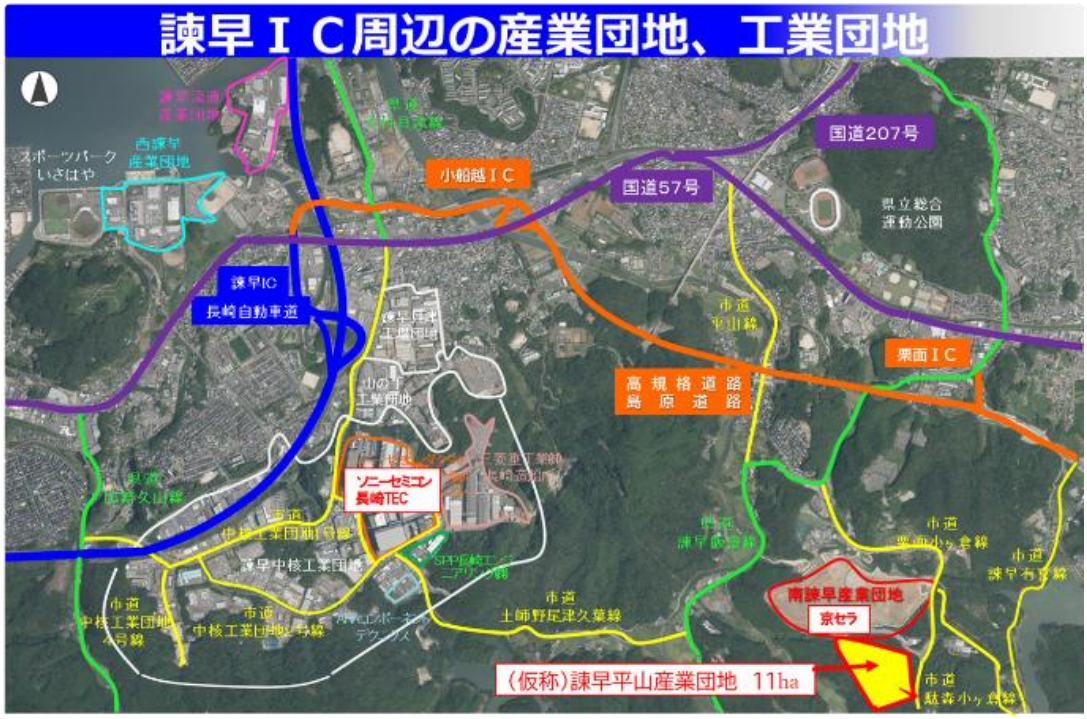
（図1）

農畜産物農業産出額順位

（出典：諫早市HP）

順位	平成３０年	令和元年	令和２年	令和３年	令和４年
１位	ブロイラー 15億円	ばれいしょ 16億5700万円	ばれいしょ 25億7500万円	ばれいしょ 27億8300万円	ばれいしょ 16億6400万円
２位	レタス 13億5000万円	ミニトマト 14億9000万円	ミニトマト 13億4900万円	ミニトマト 13億2100万円	ミニトマト 12億7600万円
３位	ばれいしょ 12億2600万円	ブロイラー 13億9500万円	たまねぎ 12億7800万円	ブロイラー 11億6200万円	レタス 12億800万円
４位	みかん 11億2100万円	レタス 12億9200万円	レタス 12億5200万円	みかん 10億3700万円	たまねぎ 9億5500万円
５位	ミニトマト 9億9900万円	みかん 10億200万円	ブロイラー 12億900万円	レタス 7億7700万円	みかん 9億5000万円
６位	たまねぎ 9億8200万円	たまねぎ 9億5000万円	みかん 8億8800万円	米 7億4900万円	ブロイラー 8億9000万円
７位	米 9億3300万円	にんじん 6億8400万円	にんじん 8億8700万円	たまねぎ 7億500万円	米 6億2000万円
８位	にんじん 8億2800万円	米 6億3100万円	米 6億400万円	いちご 5億5200万円	いちご 6億100万円
９位	いちご 5億3100万円	いちご 5億5700万円	いちご 5億5400万円	きゅうり 4億9900万円	にんじん 5億1600万円
１０位	牛 5億1700万円	牛 4億6100万円	牛 4億4300万円	牛 4億7700万円	きく 4億9500万円

（表３）



（図２）

表３、図２により、このように豊かな自然と交通の利便性の良さから第一次産業、第二次産業が発展していったことを説明。

農業産出額県内４位、製造品出荷額県内1位であることを説明しながら、もっと PR を強化する必要があると感じた。

若者と話をするせっかくの機会なので、再度、質問を投げかけた。

（質問）第三次産業の中で観光業について、「諫早市の魅力」って何だと思いますか？

「諫早には、な～んもなかばい。長崎県内には観光地が多いけど、諫早には観光名所もなかし、歴史的に有名なことも知らんばい」諫早の人から良く聞く言葉です。

とつぶやいた時の反応のよいこと。

そうそうという顔の受講生に、「私の推し観光名所」写真４点を紹介。クイズ形式で質問を投げかけてみたものの、まだ、運転免許はなく、ドライブもあまりしたことがないので、よくわからないとの回答であった。

インスタ映えスポットとして人気の
「フルーツバス停」（諫早湾）

「長崎県だんだん畑１０選」選定の
絶景スポット（橘湾）

長崎県出身シンガーソングライターが歌った
「弓なりの線路」（大村湾）

雲仙普賢岳と諫早湾干拓地が一望
「白木峰高原」（多良岳）

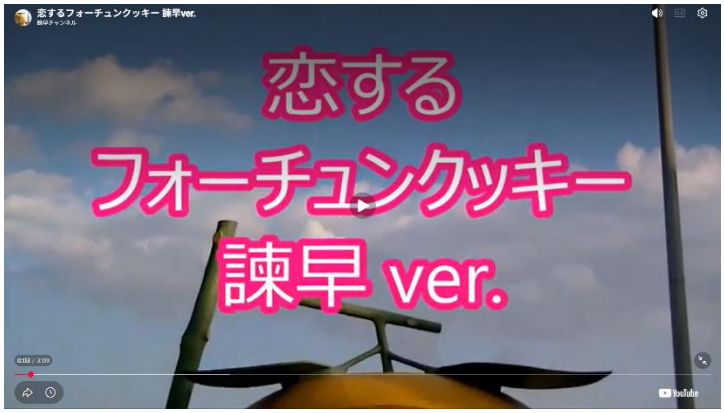
（写真４点）

それでは、大学や諫早駅から徒歩でも行ける、諫早公園にある眼鏡橋について説明をした。「眼鏡橋」のことは、諫早にいる間にぜひ知ってもらいたいとの思いから、図３により「諫早眼鏡橋１８０の真実」を掲載している、諫早市のホームページの QR コードを紹介。

▶眼鏡橋

- 諫早公園には1/5のミニ眼鏡橋もあり、親子眼鏡橋のフォトスポット
- 諫早公園近くの本明川の飛び石は、眼鏡橋の形に並んでいる
- 諫早駅前には1/7のミニ眼鏡橋がある
- 市内にはいろんな眼鏡橋がある！
- 諫早市のHP　諫早眼鏡橋「180の真実」を見てね♪

（図３）



（図４）

話が長くなったためか、会場に重たい空気が漂っているような気がした。ここで奥の手、YouTube の力を借りる。アイドルグループ AKB48 の曲「恋するフォーチュンクッキー」でまちの魅力を発信することが流行になった時に制作した動画を紹介（図４）。

平成２６（２０１４）年秋開催の長崎がんばらんば国体機運醸成の取り組みの一つとして、その一年前に、全国からの国体訪問者に向けて、諫早市の魅力を全力で PR するために制作した動画である。諫早市の観光名所や特徴的な場所で、それぞれに関わる地域の方々にご協力いただき、軽快な音楽に合わせて踊った内容は、大学生に諫早市を少しでも伝えることができたのではと感じた。

３　美術・歴史館とエコミュージアム

美術・歴史館は、平成２６年３月１日に開館したが、整備に先立ち、平成２１年度に建設基本構想をまとめた。その基本理念の中で『周辺に点在するさまざまな歴史的文化的な遺産や豊かな自然、図書館などの公共施設と連携し、市全体をひとつの「エコミュージアム」ととらえ、これらを総合的に結びつける交流拠点』との表記がある。エコミュージアムとは、エコロジー（生態学）とミュージアム（博物館）とをつなぎ合わせた造語であるが、地域の自然や文化、歴史、住民など様々な環境を総合的に活用し、博物館の運営に活かしていこうとする考え方である。

４　開館１０周年記念企画展でエコミュージアムを表現

美術・歴史館は、その基本理念に基づき、特に、諫早ゆかりにこだわったエコミュージアムの考え方で運営をしているが、際立ったのが、開館１０周年記念の企画展４件であった。エコミュージアムを伝えるため、その内容を伝えた。

「ウルトラ空想特撮ワールド－ウルトラマンと夢見る未来－」では、本市出身の脚本家市川森一が脚本に携わったウルトラセブンやウルトラマン A を始めとした円谷プロダクションの企画展示を実施。併せて、特別コーナー「～ウルトラマンと諫早～市川森一創造の世界」では当館建設に整備検討懇話会のアドバイザーとして関わり、また諫早図書館の名誉館長としても長年携われた市川氏の功績を展示。そのほか、子どもたちが空想し夢を描くようなワークショップ等を実施。

「諫早の美術家展」では、諫早で活動する美術家の作品１５５点を一堂に展示し、郷土作家の存在をアピールするとともに郷土作家によるアート体験のワークショップを実施。

「諫早の酒造り展」では、当館学芸員が長年研究を重ねてきた本市の酒造りの歴史とともに市内唯一の酒蔵である（株）杵の川の協力を得て、酒造りの道具を展示。酒米を活用したワークショップや市内の酒造りゆかりの地を巡るバスツアーも実施。

「野口彌太郎展」では、本市ゆかりの洋画家野口彌太郎の作品を、これまで最多の９２点を展示。館周辺や諫早のまちなかに点在するパブリックアートを巡るウォーキング

も実施。
　若者の記憶に少しでも残ってくれたらと思いながら、少し暑苦しく話した。伝わっていることを期待して。

おわりに

　当館のエコミュージアムの取り組みを説明した後、大学生の皆さんに問いかけた。
（質問）もし、皆さんが企画するなら、どのような内容にしますか？
→諫早市内の体育館でプロバスケットボールB1リーグの長崎ヴェルカの試合を見たことがあります。長崎ヴェルカで企画展やってください。
　なるほど、若者は、歴史や美術よりスポーツの方が興味あるのかもしれない。以前、サッカー漫画家の原画展を実施した際、これまで来館がなかったような若い層の観覧が多くあった。
　また、諫早市は「スポーツのまち」としてPRをしている。サッカー、陸上、体操などなどいろいろな企画ができそうである。その時は、大学生や高校生など、若い世代の市民とプロジェクトチームを作って実施するのもいいのではと思った。
　博物館の運営にエコミュージアムは、広がりと深さがあるので、今後も引き続き研究を重ねていきたい。

（つぼうちりこ／当館副館長）

ながさきピース文化祭2025特別展
「諫早の武士と蘭学」シンポジウム報告

森　　健 史

はじめに

令和7（2025）年秋、長崎県内各地で「ながさきピース文化祭2025」が開催された。

諫早市においても、地域文化発信事業13件及び分野別交流事業3件、合計16件実施され、おおいに盛り上がった。 その地域文化発信事業の1つとして当館では、特別展「諫早の武士と蘭学」を9月14日（日）から10月19日（日）まで実施した。

本特別展は、諫早家の家臣たちが学んだ蘭学・洋学の事実や成果等を紹介し、西洋の文化や技術の伝来の窓口である長崎の海外との長い交流の歴史を伝える展覧会であり、本シンポジウムは、その中で、多様な立場の専門家・関係者が研究成果を発表し、意見を交わす場として開催したものである。

本報告書では、当日の講演内容を整理し、ここにその概要を報告する。

1　概要

日　時：令和7（2025）年10月5日（日）
場　所：諫早市美術・歴史館　2階研修室
次　第：1. 開会挨拶　　加藤　成昭（諫早市美術・歴史館長）
　　2. 趣旨説明
　　岩﨑　義則（九州大学大学院准教授）
　　3. 諫早家中の蘭学
　　森　健史（諫早市美術・歴史館学芸員）
　　4. 諫早日記にみる阿蘭陀通詞の動向
　　藤本　健太郎（長崎外国語大学准教授）

5. 古賀本『西洋船図集』の伝来を考える

井上　修平（九州大学大学院人文科学府博士後期課程）

6. 質疑応答

7. 閉会

2　議事録

【アナウンス】

それでは皆様お待たせいたしました。ながさきピース文化祭 2025 特別展「諫早の武士と蘭学」シンポジウム　諫早の武士と蘭学を只今より開催させていただきます。まず、開会の挨拶をこの特別展の主催である「諫早の武士と蘭学展」実行委員会代表、また諫早市美術・歴史館の館長であります。加藤の方がご挨拶いたします。

【加藤】

皆様こんにちは。本日は、シンポジウム「諫早武士と蘭学」にご参加をいただき、誠にありがとうございます。主催者を代表して心よりお礼を申し上げます。

ご承知のように、江戸時代後期長崎を拠点として、わが国に伝えられた西洋の学問蘭学は、単に技術や自然科学の知識を導入するにとどまらず、人々の思考や社会のあり方に大きな影響を及ぼしました。特に諫早市においては、武士たちが藩制や地域の発展に尽くす一方で、蘭学を通じて新たな知識を吸収し、近代化への道を切り開く役割を担ったことは、私達が誇るべき歴史的な財産と思っています。

本日のシンポジウムには、当館職員で学芸員の森の他、九州大学大学院岩﨑義則准教授、長崎外国語大学藤本健太郎准教授、九州大学大学院井上修平氏をお迎えしております。岩崎先生は九州大学大学院で日本史学の研究を行っておられ、令和 3 年 11 月に開催されました長崎県政 150 周年記念講演会で、「長崎県の成り立ち」という基調報告をなさいました。藤本先生は長崎外国語大学国際コミュニケーション学科で、近世近代の長崎地域史や近世日朝関係史の研究、井上氏は大学院において日本史学を専修しておられます。

この後、まず本日司会進行をお願いしております九州大学岩﨑准教授からこのシンポジウムの趣旨説明、続けて当館学芸員の森職員が「諫早家中の蘭学」、長崎外国語大学藤

本准教授が「諫早日記にみる阿蘭陀通詞の動向」、九州大学大学院井上氏が「古賀本『西洋船図集』の伝来を考える」と題し、順次報告を行っていただき、その後、質疑応答の予定となっております。それぞれ蘭学と地域との関わり、蘭学を巡る国際交流の意義、新しい研究の成果を交えながら、今後研究の可能性についてご発表いただけるものと思っております。

本日ご参加の皆様におかれましては、先生方の多角的なお話を通して、諫早に生きた武士たちの姿、そして彼らが蘭学に向けた眼差しを改めて深く考える機会となることを願っております。どうぞ最後までご清聴いただきますようお願い申し上げて、開会のご挨拶をいたします。

【アナウンス】

続きまして、シンポジウム趣旨説明を九州大学大学院岩﨑准教授にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

【岩﨑】

皆さん、こんにちは。先ほどのご紹介にあずかりました九州大学岩﨑義則と申します。本日はご多忙のところ、また貴重な休日にも関わらずご来臨いただきまして誠にありがとうございます。

本日は先ほど館長様の方からご案内がございましたが、諫早市学芸員の森健史氏、長崎外国大学藤本健太郎氏、九州大学大学院生井上修平氏の 3 名の方にこの後、ご登壇いただき大体全体で 2 時間ほどのシンポジウムの方を実施させていただきたいというふうに思っております。なお、3 名の報告につきましてはですね、お手元に図録がございますかと思います。この中にですね、後ほどご覧になっていただきたいと思いますけども、この中にコラムということで、本日登壇いただきます 3 名の方以外に、諫早図書館の橋本さんの論考とそれから私の論考五つのコラムという形で収録させていただいておりますが、それが一応の報告の要旨というふうな形になるかと思います。あわせて後ほどご一読いただければと思います。

なお、今回ご登壇いただきます 3 名の研究はいずれも諫早家文書の日記であるとか、あるいは宮内庁書陵部のですね古賀本と呼ばれるような書籍類記録類ですねそういった

ものの基礎的な研究がベースとなっております。なぜ、我々のようなですね九大の人間がこういった諫早の研究、諫早の蘭学についての研究をやっているかということですけども、端的に申しますと 2020 年にですね、諫早図書館に寄贈されました、長崎県の方から移管されたのですけども、諫早家文書の長崎県文化財指定に向けた事前調査がございまして、そのときに私が長崎県の方から調査を依頼されて、当時諫早の図書館にいらっしゃいました森さんとか橋本さんと一緒に調査をするというようなことがありました。その中で当初諫早家文書の中に周知されていなかった西洋船図集というのが、これは諫早家文書の中に入れるべきだ。要するに漢籍とか書籍の方に分類されていたのですね。これは文書の方に入れた方がいいのではないかということで、ちょっといろんな調査を重ねていくうちに、これがオランダの版画家のヘリット・フルーネウェーヘンという人物が刊行した銅版画を写したものであるということがわかりました。要するに当時の長崎の町人がオランダから輸入された銅版画を持っていて、それで写しているということです。ですから国際交流の賜物でもあるのですけども、そういったものが諫早の諫早家文書に残されているということで、これはとても貴重な資料ではないかということで、この西洋船図集の基礎的な調査というところから、これは是非九州大学の私どもの研究室と一緒に諫早市の方と共同研究をとってはどうかということを議論しまして、それで 2020 年ですから、2020 年の 5 月ぐらいにですね、お互いに文書のようなものを交わしまして共同研究をやりましょうということで始まったということになります。この西洋船図集の研究の成果につきましては、長崎学研究所紀要『長崎学第 5 号』、これは藤本先生のお薦めもありまして、無事に掲載することができております。その後宮内庁が所蔵しております同じ名前の西洋船図集というものがこれ宮内庁にもあるのですけども、それが古賀本と呼ばれる井上さんが研究されますがあの古賀侗庵或いは古賀精里とか、古賀謹一郎のですね、古賀 3 代がどうも集めた資料の中に同名の資料含まれているということで、森さんたち橋本さんたちと一緒に宮内庁での共同調査を実施いたしました。また、その際に佐賀藩士の菩提寺であります港区の賢崇寺というお寺さんがあるんですけども、そのお寺さんに行って、3 人で墓碑をずっと見て歩くというですね、そういうちょっと根気が必要な調査なども行ってまいりました。そういったかれこれをやっている内にですね、本年の秋ですけども、只今ということになりますが、諫早市美術館歴史館あるいは美術・歴史館ですね、すいませんちょっと名称が間違っておりますが、諫早市美術・歴史館、或いは諫早図書館を初め関係者皆様の多大なご尽力により素晴らしい企画展が実

現するということに至っております。その栄えある特別展に合わせて、諫早家の蘭学の意義やその関連資料が持つポテンシャルってちょっとわかりにくい言葉ではありますけども、歴史資源としての可能性ですね。例えばこういったものを今後諫早の振興を考えたときに、何か利用できる可能性みたいなものあるんじゃないかとかですね、そういったものの、あくまでも一端ということになりますが、そういったのをお示しすることができれば、それはそれでいい機会になるんじゃないかというふうに思っております。

この 3 名の研究はですねいずれも学術的な見地からも画期的な研究成果ではないかと私個人的には思っております。特にあの森さんのご研究は天保 11 年より前に諫早の蘭学の始まりみたいなものが想定できるんじゃないかという指摘がございますし、藤本先生の藤本さんのご研究はこれまであんまり着目されてこなかった諫早家と長崎の阿蘭陀通詞ですね、この関係を諫早家文書の日記からも丹念に追っているという研究、そういったことでもちょっと画期的な研究ではないかと思います。また、井上さんの研究は西洋船図集が宮内庁の古賀本のですね、古賀家が集めた文庫の中に残されているということの事情とか背景を考察しています。恐らく、ここまで迫れたのは井上さんが多分日本国内で初めてだろうというふうに思われます。ですからいずれも3名の研究というのは私どもが、なんていいますかね学術的だというふうに言ってしまえばそういうことになるんですけども研究史的に見ても重要な指摘がなされているんじゃないかというふうに思いました。ご来場の皆様とともに、3名のシンポジウムを聞きながらですね、充実した時間を過ごすことができればというふうに思っております。

なお、すいません余談ではありますけども、要するに諫早の諫早家のですね蘭学を考えていく際に、その拠点となったのが、長崎の浦五島町ですね、現在の五島町にある長崎屋敷といったものが一つの重要な舞台になってきます。その位置関係を少し当時の長崎の絵図を使ってこういうふうに示しておりますけども、長崎港に面したですね、現在の五島町ということになりますので、非常にこう舟運ですね、船を使った輸送とか流通あたりが非常に便利なところにあった蔵屋敷だということがおわかりになるかと思います長崎の方では諫早蔵屋敷という表現で出てまいります。これが珍しいんですけども、蔵屋敷の区画を書いたやつが、長崎の渡辺文庫に残っておりまして、ちょっと見づらいんですけども、上が北で下が南になるんですが、浦五島町の一番下の区画が諫早の屋敷地ということで、2 ヶ所ですかね。1 ヶ所とか 2 ヶ所っていう意味のこの区画を長崎で表現するんですが、その 2 ヶ所

の区画を諫早家が持っていたということがこの絵図からわかります。ヶ所の広さとかですねそういったものもわかります。この浦五島町の大きな特徴としてですね、北側から見ていきますと柳川の蔵屋敷があり、筑前福岡藩の蔵屋敷があり、鹿島の蔵屋敷があり、深堀の蔵屋敷が有り、諫早の蔵屋敷があるということで、あの西国諸藩の蔵屋敷が並んでいるというふうなそういう町です。しかも一つの街の中に鹿島・深堀・諫早というですね、佐賀の支藩或いはそれに準ずるような家の蔵屋敷が存在していたということになります。しかも福岡藩も佐賀本藩と長崎警備を命じられた福岡藩の蔵屋敷もあるということで、正しく浦五島町は長崎警備の一つの大きな拠点になっていたというふうに考えているかと思います。あと、ちなみにですけど大阪の銅吹屋泉屋の屋敷とか、或いはお店ですかね、泉屋のあの屋敷、それから大村藩の捕鯨業者でありました深沢義太夫の屋敷があったということもこの資料から確認できます。現在諫早家の長崎屋敷はあの致遠館跡というですね、碑が建っております。周辺一帯は宮島ガレージの所有地になっているかと思います。この諫早家長崎屋敷では幕末期になりますと、いわゆる致遠館というですね、英語伝習のため、英学伝習のための塾が置かれまして、あのフルベッキなどによって伝習が行われたということで、あの非常に著名な、もう有名な場所ということになります。また、この長崎屋敷においてはですね、いろんな記録がどうもこの場で編纂されたようで、ロシア使節がやってきたときの記録など、大量なものが諫早藩士らによって編纂されたのも、この長崎屋敷で編纂されたんではないかというふうなことがちょっと推測できるような感じになっておりまして、今後の研究の必要性を痛感しているところでございます。

すいません時間がないところで大変恐縮です。近代になりますと、この諫早家の長崎屋敷は一時期長崎の町人らによって運営されます。賃貸に諫早の方から出されていたりするんですけども結局明治 43 年頃に宮島醤油というですね、醸造会社、醤油の醸造会社の方に売却されまして、そこの長崎支店ということで存続していたということになります。ですから宮島ガレージに今現在跡地がなっているというのは、やっぱり宮島醤油との関係の上ではないかと思うんですけども、今では宮島ガレージ敷地の中に先ほどの石碑があるということになるかと思います。なお、この諫早家の長崎屋敷にあった鬼瓦ですね。これも展示の図録の中に入っておりますけども、鬼瓦が今現在佐賀の致遠館中高等学校の方に寄贈されて、そちらの方に収蔵されているというそういうようなことがございます。あとは、これは非常に雑談的なところですけども、宮島醤油ですね意外とこの福岡方面では、こういうそ

の醤油ではなくて、焼きそばの粉のソースだったり、ちゃんぽんのスープであったりとかですね、あのこういったものが福岡の方ではよく見かけます。ちゃんぽんのスープあたりを売っているのをみるとやはり長崎に支店が置かれていたということの意味ですね。中華関係のなんですかね、需要に対応するためにこういったのが開発されたんじゃないかとかですね、いろいろ思うところがございますけども、ちょっと話のなんていいますか、ちょっと雑談的なものですけども、意外と身近なところで諫早家の長崎屋敷というのは我々の身近にそれを推測するようなものが存在しているというふうなことでございます。

ちょっと最後、雑多な知識ということになるかもしれませんが、諫早家の長崎屋敷について少し簡単にご紹介を申し上げたということになります。ただ、ここが今回諫早の蘭学とかを考えていく際に一つの重要な拠点になっていたということはもう間違いないだろうということになりますのでよろしくご承知の方をできればというふうに思います。

それでは以上をもちまして私の方から趣旨説明の方を終わらせていただきます。引き続き第 1 報告を森さんの方からお願いいたしたいと思います。

〔第1報告〕

【森】

はい、それでは改めましてこんにちは。諫早市美術・歴史館の森と申します。まずこのシンポジウム最初の報告として、私の方から諫早家中の蘭学ということで、今回の特別展開催に至るまでにわかってきた蘭学関係の記事、資料だとか研究過程や今後の課題なども含めてですね、ご紹介させていただければと思います。

まずこの諫早家中の蘭学、ということで研究するきっかけになったのは先ほど岩﨑先生の方からも趣旨説明でございましたが、諫早家文書が長崎県指定有形文化財に指定される。この際に西洋船図集というものが、この再発見されたというのが一つのきっかけになっております。諫早家文庫の伝来と貴重文物に関する九州大学との共同研究ということで、岩﨑先生と私と諫早図書館の橋本職員とあと藤本先生のご協力を得ながらこれまででやってまいりました。この特に西洋船図集を中心に研究を進めまして、その西洋船図集には 3 名の名前が登場してきます。まず名村元義、オランダ通詞、オランダ語の教育者としても活動しますし大通詞に昇格していくという、比較的有名なオランダ通詞になります。続いて嘉村穏藏、この穏藏という読み方がちょっと正しいかはわからないんですけれども、嘉村穏

藏という人の名前があった。これは調査の過程で、天保 6 年から天保 15 年の間に長崎聞役を務めた佐賀藩士の嘉村源左衛門であるということがわかってきました。この嘉村源左衛門のもとに諫早家家臣が蘭学稽古に何名か行っているという記事も日記、諫早家の公式記録である日記の方に登場してくるようになります。最後に福田思恭、諫早市内の方には福田渭水という呼び名の方がなじみあるのかなと思います。市役所前に石碑がありますけれども、諫早家の家臣、通称は七郎なので、諫早家の記録・日記にはですね、福田七郎という名前で登場します。号が渭水で、思恭という呼び名もあった。郷学好古館の教諭として子弟教育に当たったという、そういう人物になります。西洋船図集の、ちょっとこちらはお手元の方に添付しておりませんが、お名前があるところですね。これがまず名村元義というオランダ通詞です。この名村元義の識語から西洋船図集が始まります。続いて嘉村穏藏、この名村の識語の次に嘉村穏藏の文章が続くのですが、そこに西洋船図集を作成するに至った理由などが書かれています。この辺が、ここはですね銅版画ですが、これを写すのは難しいけど、何とか写して、それに和訳を書き加えて、1 冊として西洋船図集と名付けたというふうに記載してあります。また、これただ単に、展示してありますのでご覧いただいた方をご承知かと思いますが船がたくさん書いてあります。ただその船の絵を見て楽しむだけじゃ、私が作った意味を失っているよというようなことを書いています。最後に福田思恭、写しましたっていう署名部分になります。この文章が続いて、ずっと船の絵が続いていくんですが、福田思恭の署名を見ると、臣福田思恭謹んで写すと署名しています。来歴としては諫早家から寄贈されたものになりますので、諫早家が所持していた。福田自らは臣と称しているんで、諫早家への献上物、提出物じゃないかなと推定をしております。ただ、命じられたものか、自発的なものか、ってのは、ちょっとわかりませんけれども。あとは天保甲辰ということで天保 15 年、その後は、冒頭に識語、最初に名村元義の識語がありますので、名村元義が関与する資料であろうということで、そこを見ていきますと、名村の識語には、嘉村は長崎で役についているんですと記載がありました。また、名村が和訳しているので、元々はオランダ語だろう。蘭学じゃないのかなということで、この福田、天保、名村、嘉村、で長崎、蘭学この朱線部のキーワードを日記を丹念にちょっと調査をしていきました。そうした結果、諫早家家臣による蘭学稽古というのが見えてきます。出てきたのがこちらになります。天保 12 年、蘭軍学、御聞番の嘉村源左衛門、長崎大黒町、これ佐賀藩の蔵屋敷があったところになります。で、福田七郎。先ほど挙げた朱線部の 6 個うち、5 個が

該当する文章が出てきました。これどういったものかというと、福田七郎が許可をくださいと願ったもので、何を願ったかっていうと、元々蘭軍学を長くやっていました。そうしたところ長崎聞役の嘉村源左衛門のところで蘭学を学べる。なので、その嘉村がいる長崎の佐賀藩蔵屋敷で蘭学稽古をしたい。なので、この秋から来年の秋まで 1 年間の御暇をくださいっていう許可を求めた内容になります。これ実際はですね寺田大助という諫早家の家老から諫早家領主に伺いを立てた記録の写しになります。その最後の方に先ほどの福田の口上が書いてあります。寺田大助の伺の内容はですね、長崎聞役の嘉村源左衛門から会談の誘いがあった、お家の為になることだからぜひ来てくれということで、会談が成った際の内容が大体は異国船のことだったということを書いてあります。異国船はもう従来のやり方で撃退できそうにない。嘉村源左衛門は蘭学をずっとやっていたんで、仲の良い通詞、よくしてもらっている通詞がいるよ。長崎は虎口前、ようは最前線なので、蘭学の者を取り立ててはどうだろうか。蘭学の者を取り立てるのであれば、私の下で蘭学稽古できるようにするよというようなことを言っています。それを聞いた。寺田は、もう朱線部のところにあるんですけど、「至極最もに相聞こえ候につき」ということで、田中九八郎という家臣を遊学させたいという伺いを立てます。その際に、先ほどの福田七郎、私も行きたいと願い立てています。結果、福田はですね自腹、田中九八郎のところはですね、ご飯代とか食料そういった支援をしないと稽古が成立するのは難しいだろうと書いています。ただ福田については自腹だからこれ幸いだ。また 1 名で学ぶより、2 名の方がお互い励まし合ってうまくいくとか。火急の際にどちらか一方でも成功すればいいとそういったことで 1 年間の蘭学稽古を 2 名に許可をこの時にします。蘭学、田中と福田が長崎で蘭学稽古、で日記これ以前を見ていくと、今のところその蘭学関係の記録っていうのはなかなか出てきません。一体諫早家中の蘭学っていつからなのかっていうところで、気になるのが天保 11 年の記録になります。佐賀藩の蘭学奨励みたいな表現ができるのじゃないかなという記録になるんですけど、こちらが実際の資料になりますが、ちょうどこのところに「蘭学相学び候う様、少将様仰せ出でられ候につき」ということで、蘭学を学んではどうかっていう方針を示します。それに伴って諫早家中もですね、ここに、「相学び度存候者」の願いがあったら、許可をするように、そういったものを当時諫早家の領主は佐賀にお住まいですので、諫早に伝達してきた。そういう伝達が来たので、それを触れ出したっていう記憶になります。この中にはですね、諫早は長崎の隣だから、一通り蘭学を収めている者の見込みがある。ただ蘭学がやりたいという者

があれば許可するようにというような書き方をしています。さらにこれまでは内々の稽古としていたものを今後は表向き、正式に申し出なさい。それ以外にもこれまで蘭医、オランダ医、医者のやっていること、そういったことも書いているので、これはその後に出てくる先程の天保 12 年の田中福田のこの両名の蘭学稽古が最初ではないのではないかと捉えることができると思います。あくまでも日記への蘭学稽古記載のきっかけになったのではないか。そう、今のところ捉えています。実際、天保 12 年以前ということで、展示しておりますけれども、佐賀県立図書館の所蔵している資料に諫早家臣の中尾家由来の資料がございますが、そちらは文化年間に佐賀藩士、こちらも嘉村源左衛門が出てきますが、嘉村源左衛門が秘蔵書としていたものを、早田何某、ちょっとその早田何某はちょっと特定できておりませんが、これを通じて嘉村に借りて、藤原伯懋という人が諫早で写したという記録が残っています。ちょっとこちらについては、藤原伯懋がどういった人物なのかとか含めてですね、今後の研究対象です。ちょっとまだ、はっきりとはしておりませんけど今後の研究課題かなと思っております。こういった実際の資料がありますので、天保 11 年、天保 12 年以前に蘭学が始まっていたのだろうと考えることができると思います。ちょっとこの点についてはですね、ちょっと現時点ここまでしか言えなくて、今後蘭学の始まりがいつなのかっていうのは今後研究課題としております。

その後、天保以降の記録なのですけど、日記にたくさん出てくるようになります。こちら図録の方にもリストを載せておりますが、ぱっと見ていただいてわかるように、やっぱり長崎であったり、佐賀といったところは、蘭学稽古の中心になっております。ただ、嘉永5年の高比良っていう人と、万延元年の野口良陽、この人は諫早図書館の設立、いや前進の諫早文庫を設立した野口寧斎のおじいさんですね、になります。あと、元治 2 年の山本、野田、松永。慶応 2 年の山本、慶応 2 年の木下、慶応 3 年の犬尾っていったところになると、出てくる資料が、こういったもの「御切手控」、領内から出るためには切手が必要になりますので蘭学を学ぶために切手をくださいというそういう申し出の記録しかちょっと残ってないです今のところ、なのでどこに行って何を学ぼうとしたかまではわかるんですけれども、実際行けたのかそういったところまでちょっと追えてないっていうところは今後の課題です。

最後にちょっとご紹介なのですけど、明治期諫早家当主の留学ということがあります。こちら 17 代の諫早家崇公になります。明治 4 年にドイツ留学しています。経済を学ぶために、帰国は明治 12 年になります。こちらも展示しておりますけど、諫早図書館所蔵の洋書

類があるのですが、そちらにウィーンで求めたと考えられる署名があったり、あと内容的にはドイツ語の文法や経済関連の書籍っていうのを目立ちます。実際はこちらです。署名の部分、諫早千吉郎、幼名が千吉郎ですのでそのように書いてあります。これが当初どうかと思ったのですけど、大体ウィーンってこういう書き方が一般的で、こっちでも書いたりするのですけど、ウィーンじゃないかなと。他の資料にこういったものがありまして、ウィーンと、で全く同じ書き方がされています。ただ、この人物が諫早靖敏さんって読むのかちょっと定かじゃないのですけど、この人が誰なのかっていうのがちょっとまだわかっていませんので、もしかしたら千吉郎が家崇になる前にこう名乗ったのかもしれないですし、ちょっとそこはまだ確証を持てておりません。諫早さんが 2 人行ったのか、そういったところちょっとわからないのですけど、この家崇に随行で行った家臣っていうのは、あの 1 人がわかっております。それは福田嘉太郎という、ちょっと読み方はすいませんちょっと確定できておりませんが、この福田さん、福田思恭の子です。家崇と同じ経済学を学ぶために渡っています一緒にベルリンの後、ウィーンの方、オーストリアの方に行っています。ただ残念ながら、この明治 6 年にウィーンで亡くなってしまいます。病没しています。お墓があったと書いてある書籍もありましたけど、もう今はもうお墓は何もなくてただ公園になっているというような記録です。この随行の家臣が途中でなくなっちゃうので、代わりの随行が必要になります。で行ったのが福田拡之允いう人。元々は山口拡之允という人なのですけど、福田の養子として福田家を継ぐ。結果として、福田家は 3 代に渡って西洋の学問に触れたのかなということが言えるのではないかと思います。

　では、最後にまとめなのですけれども、まず天保 11 年の触出以降日記に諫早家中の蘭学というのが記録されるようになります。その成果として天保 12 年の田中九八郎、福田七郎が学んだ際は『西洋船図集』これが成果物と言えるのではないかなと思います。後、天保 14 年のこちらも展示をしているのですけども、公文四郎右衛門のという人が同じ嘉村源左衛門のところに蘭学稽古に行きます。こちら蘭法火術という火術ということで、何を学んだかっていうのがしっかり記録が残っています。ただ、具体的な内容については、起請文を交わして他に漏らさないっていうことで日記にも書いてありますので、具体的には何らかの手法というのは書いてありません。ただ、必要な道具類の一覧とかを書いてあったりします。ただし、天保 12 年田中九八郎、福田七郎は、諫早家中で最初に蘭学を学んだものではないとは言えると思っております。天保 11 年の触出に、そのように一通り心得の者もい

ただろう、そういう見込みがあるというふうに書いております。実際に佐賀県図書館に資料が残っているというのは、先ほど紹介させていただいた通りです。後、日記類、天保期以降は蘭学および洋学稽古の記録が多く残ります。内容としては軍事・医学が中心である。稽古先は長崎・佐賀が多いということが今のところ、まず言えます。今のところわかっていることはごく表面的なことかなと思います。今後の課題としては、日記の調査、先ほどのですね、この表なのですけど、今回特別展をやるにあたってこの資料を見直していくと、どんどんどんどん増えていきました。やっぱり諫早家の日記っていうのはまだ解読が進められている途中なので、整理が十分されていませんので、読めば読むほどちょっといろいろ出てきます。ですので、もしかしたら読みなおせばまたちょっと増えていく可能性もあるのかなと思っております。さらに日記についてはですね解読が 1800 年からスタートしています。だから 1800 年以前の日記はちょっと解読がまだされていない部分が多い。なので、そちらをちょっと読み込んでいって、何か記録が出てくれば、いいな。そうすれば蘭学の始まりがちょっとさ遡るのかなと思ったりもしています。後、これまでちょっと私が調査しているのは、以前図書館いたという関係もあるのですけど日記を中心にちょっと調査をしていますで、日記以外の資料を当たる必要があるな。あとは諫早家資料以外からの記録、蘭学稽古に行った先に何か記録が残っていれば、より深められるのではないかなと思っております。

ちょっと駆け足でちょっと説明をさせていただきましたけれども、今のところ諫早家中の蘭学についての、あの研究成果ということになります。ご清聴ありがとうございます。

【岩﨑】

では続きまして、長崎外国語大学の藤本健太郎さん、よろしくお願いいたします。

【藤本】

皆さんはじめまして。ご紹介に預かりました、長崎外国語大学の藤本と申します。
私が担当させてもらいますのが、第 2 報告「諫早日記に見るオランダ通詞の動向」になります。これからお付き合いを頂戴できればと思います。

はじめに、このシンポジウムの「諫早の蘭学と武士」というテーマを考えるにあたって、やはり関係性が深い場所というのが長崎というまちになるかと思います。特に蘭学つながりであれば、言語でコミュニケーションを取った通詞との関わりが、欠かせない人的要素として

認識されているかと考えております。先ほど森先生からもご紹介がありましたが、今回の特別展の主要展示品である『西洋船図集』は、もともと佐賀藩士の嘉村源左衛門が長崎聞役の役職にあった時に、長崎蔵屋敷に出入りする「館入」なるものを勤めたオランダ通詞の名村元義に対して、和訳依頼したという経緯で出来上がった資料を諫早家中の福田思恭が写し取ったという伝来があります。

嘉村源左衛門は佐賀藩士ですけれども、実は佐賀本藩だけではなく、諫早家にも館入のオランダ通詞がいました。それが、今回主に取り上げる石橋助左衛門、そして小川慶右衛門という 2 人のオランダ通詞です。

実際はそれ以外にも諫早家に館入した阿蘭陀通詞は助左衛門をはじめとして、ほかにも何人かいるんですけれども、今回はこの 2 人に対象を絞って、彼らの動きを通じて、阿蘭陀通詞がなぜ佐賀本藩に館入しているのに諫早家にも館入する必要があったのか。さらに館入というものが諫早家、そして阿蘭陀通詞双方にとってどういった意味を持っていたのか。長崎の地役人が蔵屋敷に出入りするということの意味を考えてまいります。

まず初めに阿蘭陀通詞とは何者かというと端的には、文字どおり日本人のオランダ語通訳官にあたるわけですが、実態としてはオランダ船との通商実務であったり、外交文書の翻訳、さらにはオランダ商館長カピタンの江戸参府への同行であったり、19 世紀に入ると幕府の天文方に蘭学に通じた人材として派遣されて和解を担当するようになる、そのような広範多岐にわたるオランダ語を中心とした言語コミュニケーションに関わる仕事をしていたのが阿蘭陀通詞であります。阿蘭陀通詞は蘭学を、九州各地、とくに今回の場合は諫早をはじめとする周辺地域に伝える媒介としての役割をも果たしていました。そういったところにも注目しながら、ご紹介をしてまいります。

なお、今回取り上げます石橋助左衛門と小川慶右衛門の名前を初めてお聞きになられる方もいらっしゃるのではないかと思います。本日お配りしております資料の 4 ページにそれぞれ略歴を掲載しておりますので、ご参考になさってください。

前置きが長くなりましたが、ここからは館入がそもそもどういったものであるか、ご紹介させてください。長崎の場合、主にその蔵屋敷を設けていた大名家が、その貿易品の調達や情報収集を行うにあたって、関連業務に知悉した長崎の地役人や商人たちの力を必要とする場合があります。こういった場合に大名家が地役人や商人に対して、扶持とか合力と呼ばれる俸禄に値するような援助を行う。そしてその代わりに情報提供を受けるというもの

になります。情報提供する際には、蔵屋敷の敷地中に「立ち入る」ということで館入という名称が付けられたと考えられています。

「館入（やかたいり）」など人によっては、そういった読みをなさる方もいらっしゃるかと思います。当時の史料にふりがなが振ってあることは極めてまれですので、読みの確定は難しいですが、今回の場合は「館入（たちいり）」と呼称を統一して、報告を進めてまいります。

ここで気をつけないといけないことは、前述したように阿蘭陀通詞だけが館入をしたわけではなく、長崎市中各町の町政に関わった町乙名をはじめ、そのほかの役職の地役人も館入をしていたというのが記録上で残っているということです。館入を許されることによって、許された地役人側にどういった利点があったかといいますと、これは例えば、裃（かみしも）、武士の礼服ですね。こちらを式日に着用することが許可されるほか、長崎の場合は、現在は一般に長崎くんちと呼びならわされることも多い諏訪神事の際に、館入をしている大名家から下賜金が渡されたなどの記録も残っています。ある意味、特権として蔵屋敷に立ち入りするということを許された立場になりますので、そういった武士に準じる扱いをされたというような形で、館入が地役人たちにとっては、自らの地位の向上に繋がる名誉というふうにもみなされていた形跡があります。とくに、今回の主人公の 1 人でもある石橋助左衛門は 19 世紀後期に入り、阿蘭陀通詞の代表的な存在になるわけですね。助左衛門の職務経歴は非常に長く、およそ 70 年間にわたって通詞として活躍する人です。こういった中で、第 11 代将軍の徳川家斉の時期に、当時の地役人たちの中で名字帯刀ブームっていうのが起こります。その過程で、石橋助左衛門が阿蘭陀通詞の筆頭として帯刀を長崎奉行所に願い出た記録も残っています。助左衛門はこうした願い出を複数回行っています。それだけ帯刀に対する思いが強かったわけですね。

なぜこれほどまでに助左衛門が執念を燃やしたかといいますと、そもそも 17 世紀後期まで阿蘭陀通詞は、二本差しを許されていました。ところが、1683 年に一本差しに変更させられています。つまり阿蘭陀通詞は地役人なのだから刀を二本差すなという命令ですね。そして長い歳月を経て 19 世紀に入ると、助左衛門たちがまた二本差しに復活させてくれと帯刀運動を繰り返すわけです。それではどのような理由を掲げて、助左衛門たちが帯刀を願い出たかといいますと、自分たちが天文方の用務を帯びて江戸に赴任する、あとは異国船が到来したときに、阿蘭陀通詞は最初に異国船に乗り込んで臨検をやるわけですが、そういった仕事にあたる際に相手方から軽く見られることを非常に懸念している様子

がうかがえます。そういった劣等意識の解消という意味も含めて、助左衛門たちは帯刀を願い出ていますが、そのときに館入をしているという実績は自らの要求を補強する要因の一つになっていたのではないかと考えています。

いっぽうで諫早家が館入を抱えておく意味がどこにあったかをお話ししたいと思います。これは参考文献に挙げている梶嶋政司先生の研究成果なんですが、長崎警備の時に佐賀本番がどう考えていたかというと、もし急に異国船がやってきたときは、はじめに近接している諫早家と深堀鍋島家が駆けつける想定をしています。そういった中で諫早家としては最初に自分たちが情報を掴んで、長崎に馳せ参じなければならない。そういった役割を諫早家は佐賀本藩から任されていたということが明らかにされています。ですから情報をいち早く掴むというのが大事なわけです。

2 ページ目に移りますが、先ほど申し上げたように佐賀本藩にも館入がいます。阿蘭陀通詞であれば、具体的には中山家、そして医学分野でも著名な人物を輩出した楢林家、さらには西家、これは幕末期に幕臣に召し抱えられます。主にこの三家が館入を務めていました。

諫早家の場合は石橋家と小川家。これは 19 世紀以降の記録、いわゆる諫早日記がある程度翻刻されている時期の言及に限りますが、石橋家の当主と小川家の慶右衛門が交互に館入をしています。ほかに長崎警備を担当していた深堀鍋島家や武雄鍋島家の事例とも綿密な比較が必要になってまいりますが、もしかすると情報提供元が重ならないように佐賀本藩と諫早家や他の家老家とかも含めて館入の調整が図られていた可能性も考えられます。様々な情報源から情報を集めていたのかもしれません。

ここからは諫早日記や関連史料をもとに、石橋助左衛門、小川慶右衛門それぞれの動きを時系列にしたがってご紹介してまいります。石橋家はもともと助左衛門の父にあたる助次右衛門の代に館入を務めていた前歴が綴られているのですが、助次右衛門が亡くなったあと、諫早家の財政的な問題もあって館入を止められた経緯がありました。ここで何が言いたいかと申しますと、つまるところ館入とは必ずしも特定の家柄で固定・世襲されるものではなくて、例えば、当時の阿蘭陀通詞としての職階、職階が高ければ、その分、機密に触れる情報を手に入れることもできるという可能性が高まりますので、そういった部分ですとか通詞としての力量・経験なども勘案されて、館入の要否が判断されていました。あと当然ながら扶持を払うので、払う側の懐事情なんかも考慮されています。

助左衛門は 1799 年に諫早家から 3 人扶持を支給されています。この時になぜ立ち入りが許可されたかというと、当時の諫早家当主の世子であった敬輝が長崎にやってきた際に助左衛門が、単にオランダ関係の情報を伝えるだけではなくて、奉行所との連絡調整業務とか手続きの代行などもろもろ力を尽くしたということで称賛を受けた結果の産物であったりします。助左衛門が諫早家の館入として果たした仕事としては、前述のような当主が来崎した時の関連業務に加えて、主にオランダ風説書、これはオランダ商館長が、ヨーロッパから東アジア海域にかけて海外情報を幕府に報告したものになりますが、オランダ風説書の写しを諫早家なんかにも提供していることが綴られています。ほとんどの場合、九州各地に所在する大名家を対象にオランダ風説書の提供がなされているのですが、佐賀藩関連に関しては、本藩に加えて諫早家と武雄鍋島家と深堀鍋島家、この三家も別途通知がなされるということが史料上で記されています。

助左衛門はフェートン号事件の直後にも 9 人扶持に加増を受けています。理由としては、家老とか御用人に対する適切かつ迅速な情報提供っていうのが書かれています。実際に助左衛門は、フェートン号に乗り込んでそこで 2 回ほど折衝に携わっており、最前線で現場に立って仕事をしているわけです。佐賀本藩はフェートン号の時に手痛い失策をしてしまうのです、諫早家の場合においては、助左衛門の対応を非常に高く評価します。その後、あの異国船打払令が発令された 1825 年には、有馬温泉で湯治中だった助左衛門が帰ってきたところを長崎で捉まえて、東北あたりに異国船がなんかうろついているようだけど、どういう状況なのかということで聞取を実施しています。これは、ある意味オランダ通詞として磨かれた感性とか、沿岸警備に関する認識というものに関して、助左衛門が諫早家から大いに頼りにされているということが垣間見える記述になります。対外危機の高まりとともに、内外で見聞きしたものを諫早家に報知して、今後の見通しを示すという意味において、諫早家にとって助左衛門という館入の存在が重要になってゆくということがわかります。

その後、助左衛門は 1838 年に亡くなるわけですが、どうやら館入は助左衛門の孫にあたる助十郎という人が継承したようです。しかしながら、1842 年頃に助十郎も亡くなっているようで、諫早家の館入は石橋家の手からいったん離れて、小川慶右衛門に置き換わってまいります。もっとも、石橋家にも助十郎の弟と比定される庄五郎という人物がいるのですが、若年であったこともあったのか、諫早家から館入は許されていません。阿蘭陀通詞は

大別すると上から大通詞、小通詞、稽古通詞という三つの職階に分かれているのですが、小通詞の中で経歴が長かった小川が諫早家と関係性を有していたということで、諫早家の館入は石橋家から小川家に変更とになります。館入の選任にあたって必ずしも家柄は重要な要素ではないということがわかります。

小川慶右衛門もかつての石橋助左衛門と同等に、諫早家にあってそういった長崎周辺での情報提供とか、オランダ風説書の通報などに努めています。さらに小川慶右衛門は1850 年にオランダ商館長が江戸に行くとき、それに同行する重要な役割を任されます。そのときに諫早家から餞別を下賜されるといった形で諫早家との交流がかなり綿密に築かれている様子が諫早日記に記されています。オランダ風説書の通知の際には、決まって誰から通知を受けたかということが、同じく諫早日記に書いてあるわけですが、その書きぶりとしては「大通詞小川慶右衛門、その他」というような綴られ方をします。「その他」というのが誰を指しているかというと、これが先ほど諫早家から館入を止められてしまった石橋庄五郎です。つまり、庄五郎自身は館入で無くなったのちも、定期的に諫早家に対する情報提供に取り組んでいるわけですけれども、諫早家では館入のオランダ通詞の枠っていうのは、財政的な問題で 1 人枠と決められています。やはり能力とか経験とか、知っている情報量などに応じて館入となるべき人物が選ばれていた。必ずしも有名な通詞の息子だから、館入にしようなどという安直な判断は行われていないようです。ところが、慶右衛門が1857 年に牢舎になります。このあたりの事由は詳らかにできていないところで申し訳ない次第なのですが、何はともあれ慶右衛門が牢に閉じ込められてしまいます。この慶右衛門が、しばらく役職に復帰するっていう見込みが立たないと踏んだ諫早家は、慶右衛門が駄目だったら、今まで「その他」ぐらいの軽い扱いにしていた石橋庄五郎に館入を変更してゆく。そういった形で、期待するだけの仕事を果たせるかどうか、諫早家の家中では冷静に見極めを行ってゆきます。それはつまり長崎での接遇であったり情報提供、オランダ風説書の通報であったりそういうことが遺漏なく対応できるかどうかという部分になります。適当に形だけ館入という仕組みを設けていたわけではなくて、諫早家として本当に長崎周辺の警備に関わる情報っていうのを欲していた結果、石橋助左衛門や小川慶右衛門が館入を許されていたということがよくわかります。

最後にまとめです。諫早家が扶持を支給してまで阿蘭陀通詞の館入を許した意義について、これはいうまでもなく佐賀本藩の家老として長崎警備でも諫早家が重要な役割を担

ってことに起因しています。迅速な動員に努めるためにやはり最新の海外情報を把握しておく必要があったのです。とくに機密事項に接する機会が多い阿蘭陀通詞との綿密な関係の構築が大切であったわけです。

そういう意味では、対外危機が高まりを見せはじめた 19 世紀はじめに、諫早家が石橋助左衛門のような優れた通詞を館入に抱えていたことは、諫早家が重要な役割を担っていた長崎警備の適切な遂行を図る上で非常に有益であったと考えます。なぜ石橋家や小川家と関わりを持つに至ったのかというところも今後の検討課題になるかと思っています。

いっぽうで裏返してみると、諫早家としては館入を誰か一人でも抱えておかないと、例えば、オランダ風説書の通知などで諫早家だけ外されてしまう可能性なんかもあった可能性も有り得たのかもしれません。先ほどご紹介した 14 家の大名家プラス 3 家の中に諫早家が漏れてしまうと、速報としてオランダ風説書を手に入れることができない。長崎での接遇を受けることができないというような問題ですかね。そういった中で、長崎での地役人たちを通じた必要な情報収集を可能にした仕組みっていうのが館入だったというふうに考えることができるかなと思います。

かたや阿蘭陀通詞にとっては、石橋助左衛門などは当時の阿蘭陀通詞を代表する一人でもあったことから顕著に発現されてしまうわけですが、19 世紀に入ってからの幕府天文方での阿蘭陀通詞の勤務や、あるいは開港後は長崎以外にも阿蘭陀通詞が開港場に派遣されますので、御用の際の格式、自分たちが職務に携わる上で外面を気にする様子っていうのが見られます。

さらに、館入を許されるということそのものが、阿蘭陀通詞としての力量があるというふうに外部から認められた証拠になってくるのかなと考えております。

今後の検討課題としては、先ほど申し述べましたが、佐賀本藩、そして武雄・深堀との情報共有のあり方、要はそこで館入が被っているか、被ってないかをもう少し丁寧にみてゆく必要があると思っております。

さらに、森先生もおっしゃいましたが、19 世紀以前の諫早日記、助左衛門の父の代の館入がどのような状況であったか、そういうところも追いかけてみることで、より幅の広い、時代ごとに館入を許された阿蘭陀通詞に期待されていた役割が変わってくる、そういうこともあり得るのではないかなと思います。

現段階での経過報告という形になりましたが、今後とも、このテーマについては検討して

まいりたいというふうに考えています。

以上で私からの報告を終了いたします。ありがとうございました。

【岩﨑】

では、引き続き九州大学大学院の井上さんの方に移りたいと思います。設定がちょっと確認しますので、しばらくお時間を頂戴いたします。

準備の方が整いましたので、ただいまより九州大学大学院井上さんの報告をお願いしたいと思います。

【井上】

はい、今ご紹介あずかりました九州大学の大学院の人文科学府というところで、博士後期課程の学生をやっております井上修平と申します。普段はですね岩崎先生にご指導いただきながら日本近世史、江戸時代の後ろの方で幕府の儒者を務めていた古賀家の人物を中心に様々研究をしているというところであります。今回その古賀家との関連で、古賀本との関連でこういうふうにお話する場、或いはコラムを書かせていただく場をいただきましてお話をさせていただきます。

今回お話のタイトルはですね、古賀本西洋船図集の伝来を考えるということでお話させていただきます。今回横の展示を既に見られた方、或いはこの後見られる方が多いのかなというふうには思いますが、この展示の第 2 章のスペースに入りますと、向かって右側壁一面にすごく長い展示ケースがありまして、その中に巻物一つ丸ごと見えるような形でバーっと広げてあるそれが西洋船図集というものになります。今回の展示は比較的あの文字ばっかりの資料というのが多くて、我々歴史学をやる人間からするとすごく面白い展示なのですけれども、やっぱりなんかひたすら字があるなという展示の中でイラストがわかりやすく楽しめるようなものが比較的多いそういうふうな展示物になっているかなと思います。この今回実物が展示されているのが、ここから歩いて程なくの諫早図書館に所蔵されている諫早家文書の中に入っているものになるのですが、西洋船図集という同じタイトルの資料がもう一つ現存しまして、それが古賀本に入っているものということになります。今回はその古賀本に入っているものの方が、なぜそこにあるのか、或いはどのように伝わったのかっていうふうなことをお話できたらなと思います。その西洋船図集というのは、先ほどお二方の

お話の中にもありましたように、佐賀で作られて、諫早藩士も関わって、諫早の人間も関わっていてというふうなものですので、諫早家文書に入っているのは比較的、ストーリーが想像しやすいというものなのですけどけれども、古賀は一体なぜ、というところのお話になります。その話をするに先立ちましてですね、すいません、これは西洋船図集の説明なのですが、今回 20 分しかありませんので詳しい内容の説明ができずに、こういう参考情報がありますよということで示すスライドでした。古賀本の方は実物は横に展示が無いのですけれども、一番下に説明してありますようにネットで誰でも簡単に画像版が確認できます。国文学研究資料館という施設がネット上で公開している国書データベースというところですね。西洋船図集というふうに名前を検索してあげると古賀本の方が引っかかるということになります。今回の図録、皆さんお手元にある図録にある諫早家文書版というのはもうございますので、それと手元で対照してあげると、確かに内容に差異があるなということがよくわかるかなと思います。

それでは第 1 章に入りまして、古賀家と古賀本。そもそも古賀家というのはどういう家なのかというところからお話したいと思います。ここの前のスライドに映しておりますのは古賀精里という人物、そしてその息子の侗庵、そのさらに息子の茶渓という人物になりますが、今日はこの 3 人が幕府、佐賀藩から幕府にでて、幕府の儒者を務めたという人間達になります。ただ、彼ら 3 人は幕府で儒者をやるんですが、古賀家全体の歴史でいうと佐賀藩士であった時代の方が圧倒的に長いとそういうふうな家になります。つまり、佐賀或いは諫早との関わりがとても深いという家です。レジュメの方で古賀家と佐賀藩と書いてあるところになります。今回ちょっと時間の都合上かいつまんでの説明になりますが、古賀家の由緒はですね、精里或いは侗庵が作成した家伝であるとか、系譜或いは幕府が公式に編纂した寛政重修諸家譜、そういうふうな要は幕臣・大名の家系図、家のデータを集成したというものがあるんですが、そういうものからある程度見ることができると。家の由来とかいうのはちょっといろいろ怪しい部分もあるのですが、資料の上で確実にこの人がこの時期ここにいたということが確認できるのが遅くとも宝永年間、これは西暦でいうと 1700 年代に入って間もなくという時期ですけれども、その時期に太左衛門という人物、これは通称は安清というふうな名前ですが、その人物の名前が着到という資料で確認できます。着到というのは何なのかというと、佐賀藩における分限帳になります。分限帳というのはまた何なのかというと、江戸時代には各藩がそれぞれの藩の家臣のリストを作ります。例えば、誰がいつ

の時代から仕えているのかとか、親族構成はどうなのかとか、どういう手柄があったのか、どこに屋敷があるのかとか、どれだけの禄をもらっているのかとか、これは時代とか場所によって、どういう情報が書かれているのかとかは多少差異がありますが、そういうものが一般的に作られる。佐賀藩版の分限帳のことを特に着到というふうに言いますが、そもそも着到という資料から、まずは太左衛門という人物が確認できて、それ以降はもう代々古賀家の名前が見えるようになります。つまり近世の比較的初めの方からは確かな歴史が確認できるというところになります。ただしですね、それと同時に古賀家というのがどういうポストにいたのかっていうところを見ていくと、実は代々手明鑓という、言ってしまったら下級藩士の身分であることということも同時にわかる。こちらもスライドでちょっと確認しておきますが、こちらが佐賀藩の家臣団構成概略図になりますが一番上に藩主がいて、その藩主の親戚格にあたるような比較的選ばれた家々があり、ちなみに諫早というのは赤で丸をしておりますが、親類同格、鍋島の親類と同じような扱いです、あなたたちはと。かなり上の方ですね。そこに列せられているという家になります。に対してですね、藩士がどんどんどんどん続いていき、下から 3 番目にあるのが手明鑓、これは本当にはっきり言って下級役人になれたらせいぜい良いぐらいのギリギリ武士みたいな、ちょっと平時は農業半分みたいな人たちで、藩の重役につくような人たちでは決してないと、古賀家は元々そこの出自です。そういう 1 下級藩士あるところの古賀家というのが、いつ歴史の表舞台に出てきて、幕府に雇われるみたいなそういうところまで行くのかというところなのですけど、この契機というのが佐賀藩の第 8 代藩主鍋島治茂。すいません、これレジュメで治茂の茂の字が成人式の成になっているんですけど、これは石破茂さんの茂が正しいと、治茂という藩主の藩政改革を基に古賀家の内の先ほどイラストを見せました 1 人目精里が台頭してくるということになる形になります。この藩制改革の経緯もざっくりと申しますと、佐賀藩或いは佐賀藩に限らず近世中期以降、幕府も藩も財政がどんどん厳しくなってくるというふうな前提状況がありますが、そういうのを打開するために、まずは財政をどうにかしなきゃいけない。そうすると素晴らしい財政案を出してくるような人材を育てなければいけないと、人材を育てようとすると藩校が必要であると、藩校運営、企画運営する人物が必要、そういう人物を藩の外に遊学に出して育てようということで、じゃあ、あなた行ってこいというふうに言って抜擢されるのが精里ということです。そして精里がですね、レジュメの 1 ページ目で古賀精里と四角囲って説明しておりますが、こちらもかいつまんで言いますと、まず藩の命を受けて、5

年間、京都と大阪にお勉強に行きます。そこで朱子学を学んできて、帰ってきてすぐに藩でいろいろ重宝されまして、例えば藩士であったり、藩主の前で教書を説くとかそういうことをする中で、だんだんと藩士或いは藩の重鎮たちの信任を得ていくという。その中で安永9年には手明鑓頭格であったり、諸役相談格、これは難しい内容は、かいつまんでスキップしますが、要は本来ですね家老とか着座そういう上級藩士が担うような、藩の統括役だったり直接的に藩の政治に提言するようなポストというのになるというふうなことになります。だから手明鑓、1手明鑓だった人間がここで一気にどんどん中心に出てくるということですね。そういうふうな改革に関わっていく中で、特に古賀精里の取り組みとして、やっぱ説明していかなければいけないのは1ページ目の最後のこっちで書いてあるところですね、天明元年に佐賀藩の本番の方で藩校弘道館というのが設立されます。その設立もかなり精里による尽力が大きいところなのですが、設立されると同時にそこの教授になる。教授と一言で言っても大学の教授というのとはちょっと違って、強いて現在の大学とかで言うならば、総長とか学長のようなものにあたるポストです。なので、これを以て佐賀の学制の第一人者にまで躍り出ているというふうなことになります。そういうふうな流れの中で、ほぼ同じ時期、数年遅れで諫早にも郷学好古館というものが出来上がりますが、現在の市役所が立っている位置にあった当時の諫早の郷学になります。そこにもですね出張講義に呼ばれて何回か精里が来ているというふうなことになります。諫早市史とかそういう本を見ると、その好古館の学則、校則のようなものですねそれも精里が作ったのです。というふうに書いてあるのですが、こちらは実は資料的に裏付けがしっかりできるかというとそうでもないので、そういう説もありますよ。とにかく諫早との関わりも深かったというふうなことになります。

レジュメ2ページ目に移ります。そうしていく中で例えば遊学中に知り合った人々であったり、藩政改革での活躍というのが噂として広まっていってですね、寛政の時代には幕府からヘッドハンティングされるという形で江戸に招聘されて、寛政8年に昌平坂学問所の儒者になります。つまり、このタイミングで佐賀藩士から幕臣・旗本にわかりやすく身分が変わっていくというふうなことになります。全国的に名前が知れてるような儒者で柴野栗山とか尾藤二洲というふうな人物とともに新しくこの時代に幕府が組織改編をして作り上げた昌平坂学問所のスターティングスタッフになっていると。このときにさっき肖像画真ん中にも示しました息子の侗庵を伴って江戸に行っているということになります。ただしですね、

この系図、ちょっと系図があの文字が小さくてしっかり見えないと思いますが、赤丸をつけているのが上から順に精里、侗庵、茶渓となるのですが、実は精里はたくさん息子・娘がいて、侗庵の上に息子が 2 人、下にも 1 人で、その他女性がたくさんということになりますが、実は江戸に連れて行ったのは侗庵だけ、残りの男子はですね佐賀藩士として佐賀に残っているということになります。特に長男、家系図でいうと 2 段目の右から 2 番目が穀堂という人物ですが。これは佐賀本藩の中で藩主の下でこの後の藩制改革を中心的に担った人物として、とても知られる人物ですが、そういうふうなところで、かなり佐賀藩との関わりというのも精里・侗庵が江戸に出ていった後も残っていくと。つまり簡単に言うと古賀家というのは分家をするわけですね。佐賀藩士としての古賀家も残るし、新たに旗本としての古賀家が新生、誕生するというふうなことになります。学問所に留学に来た佐賀藩士とのコミュニティであったり、或いは佐賀に残った親類縁者、この系図の中でちょっと灰色に薄く網掛けしているのが、古賀家の兄弟の中で佐賀藩士になった人物或いは姉妹と結婚した佐賀藩士になります。つまり古賀家、古賀侗庵同じ当代の筋だけで見ても 6 人ぐらい。佐賀藩士がいるということになります。つまり、親類縁者がパイプとしてかなり機能していると、精里の出府後でも佐賀の繋がりというのは密接に維持されていたということになります。これが大体古賀家の説明になりまして、なんで幕府儒者が佐賀と関係を持ってるんですか、ということの説明です。それでは古賀本というのは何ですかという話もしておきますが、これは所蔵は宮内庁の書陵部というところにありまして、古賀家三代、幕府で儒者を務めた三代ですね、精里・侗庵・茶渓の旧蔵書を明治になってから、当時の宮内省図書寮、今の宮内庁書陵部に移管したものが、その移管された当時、明治 22 年の時点で 1 万 4876 点もあったと、それが散逸、売られたりとか移管されたりしてて、今丸々残ってはないのですが、今なお 1 万点以上のものがここに収められていると。その中の一つに「西洋船図集」もあるということになります。

　では、第 2 章に行きたいと思いますけれども、次にお話するのは古賀家の存在はわかった、古賀本もわかったと。古賀家になんで「西洋船図集」があるんですかというところです。この何で、っていうふうな疑問が発生する根本的な原因というのは、すごく本当に根本的なところにありまして、例えば洋学・蘭学で有名な人の家にこういう洋学資料があるっていうのは結構すっと理解できるんですね。ただ今説明した通り、古賀家というのは儒者の家です。儒者が「西洋船図集」、なんかすっと理解できないというところがあると思いますの

で、そもそも儒者というものと洋学の相性っていうのはどんなものなのですかというところの説明からしていきたいと思います。実は儒学と洋学、なんか同じ学・学とついて対象されるような、いかにも東洋チックなものといかにも西洋チックなもので二項対立的、二律背反的に何かイメージを思われがちなのですけど、実はそうでもないよという話がこれからする話ですね。まず大前提としておさらいしておきたいのは、当時、近世の後期という時代が、日本全体にとって対外危機の時代であったということです。例えば、この時期年代で申しますと 1700 年代の中盤ぐらい、それ以降ですね日本近海にロシア船・イギリス船を始めとして外国船というのが頻繁に現れるようになっていて、ただ海の上を通るだけならいいんですが、たまに漂着したりとか、現地民との接触があったりとか、そういうことが何か徐々にぽんぽん現れたそうで、それが増えてくるっていう状況があります。ちょこちょこ来るなぐらいならばいいんですが、もういよいよこれは危機と言い切れちゃうぞというふうな事件も起こってきまして、それがレジュメにもあります文化 2 年・3 年にまずはこれ名前は有名ですがロシア使節のレザノフという人物が長崎にやってきます。彼はちょっと通商、貿易ですね。それを求めてやってくる国の正式な使節としてやってくるのですが結果的に幕府というのは、その通商要求というのを拒否するということになります。その結果ですね、レザノフの配下の船団が翌年からその翌々年にかけて、日本海側の蝦夷、今でいう北海道沿岸ですね、大砲でボンボン攻撃すると、それによって幕府の会所、今の択捉島の辺りにあった幕府の紗那（シャナ）という場所にあった会所が砲撃を受けて燃えて壊滅してしまうというふうなことがございまして、これはいよいよ大変なことになったぞというふうに自覚されるようになると、そういうふうな決定的な事件があるわけです。ちなみに※印で示しておりますが、この時古賀精里たちが学問所の儒者というのも一応幕府の中枢から諮問を受けまして、レザノフっていうロシア使節から何かこういう交渉が来ているのだが、どういうふうに返答したらいいと思うかねというふうに聞かれて、一応この時、儒者は儀礼的に断るにしても、断らないにしても、断るのがいいとは思うんだけれども一応礼を尽くした形で断りましょう、というふうに言うんですが、これが当時の老中と意見が合わなかったみたいで最終的に黙殺されてしまう。これがいわゆる 1 儒者の立場的には弱いところで、老中みたいな幕府の中枢にいる人間からと比べると、やっぱり所詮 1 学者であって、政治決定に直接噛めないっていうところがあるんですね。だから、そういう自分たちが示した案が、結果黙殺される形で、幕府が対応して、その結果日本にとっては大変な問題になるような砲撃を受けてしまう、という

のがあって結構精里を始め学問所儒者からすると、このレザノフの或いははその翌年のロシア船団による日本の方、日本への襲撃というのはかなりショッキングというか、歯痒い思い出として残るというわけです。さらにですね、折り悪くというか必然と申しますか、そのさらに翌年ですが文化 5 年には、今度はイギリスの軍艦フェートン号が長崎に侵入するという事件が起こります。これはですね佐賀藩に対してすごく重要なことでありまして、このフェートン号は実際は別に砲撃もせず、何かを奪ったり人を殺したりもするわけではなく時間が経つと勝手に帰っていくのですが、ただ本来、イギリス船なんかが来ている場所ではないというところにイギリス船を入れてしまった。好き勝手させて帰らせてしまったっていうことで、責任を取って当初の長崎奉行が切腹をするであったり、あるいは佐賀藩、その当時その年は佐賀藩が持ち回りで長崎警備を担う年でしたから、佐賀藩の家老が切腹をしたりとか。家老のみならず、実は佐賀藩主も幕府からお咎めを受けて逼塞という形、佐賀藩主当時の藩主は斉直でありまして、その精里を見いだした治茂の長男ということになりますが逼塞処分を受ける。逼塞というのは、要は閉門ですね。謹慎処分です。藩主というのはやっぱり幕府との主従関係上幕府に対していろいろ奉仕をする役目を果たすということが藩の存続の大前提になるわけですけど、そういう藩主に対して、お前はもう門の内側に下がれと、仕事は一定期間しなくて良いというふうに言われるわけですから、これはただ楽だとかそういうことではなくて、存在意義を失っちゃうっていうことなんですね。なので、実はこの斉直さんは一応閉門は解かれるわけですけれど、その後も結構メンタル的には喰らっていたみたいで、終生そういうコンプレックスを抱えながら生きていくというふうなことも言われています。要はですね、佐賀藩にとってみればこの海防問題というのはどういうことになるのかというと、これが海防問題或いは対外関係をうまくやっていけるか回していけるかっていうのが、藩の存亡、存在意義みたいなものに直結するっていうふうな危機意識、これは従来からあったと思うのですが、このフェートン号事件を受けて、より自覚されるようになるというふうなところです。また、片や古賀家にとってしてみれば、先ほどのレザノフ来航の件ですよね。やっぱり自分たちが興味を持って、或いは仕事としてやったことなのだけれども、どうも歯痒い形で、しかもそれが結果、国辱となってしまったということで、やっぱ双方同じ時期にかなりこの海防に対して、喫緊の課題としての意識というのが持たれていくと。これと儒者の中でも、古賀家というのは先ほど申しましたように、佐賀が故郷であって、しかも藩主治茂に対して並々ならぬ恩があるというふうな意識がありますので、この意識というのはな

おさら強いということになります。つまり、こういう時代とか佐賀藩、古賀家の置かれた状況を見てみると幕府儒者であるところの古賀家と佐賀藩との間には一卵性双生児的な側面があると言い切れるのかなというふうに思います。こと海防とか洋学みたいなものに対する危機意識、関心の入口としては、とても似たようなアイデンティティを持っているというふうなことになります。そして、次に古賀家固有の問題として古賀家の学問感というのが一つ特筆すべきものが何点かあります。なんで儒者がそんなに簡単に洋学になびくのかというと、まず一つはですね（1）としておりますが、古賀家の学問というのはかなり実用指向するという側面があります。実用を志向するっていうのはどういうことなのかというと、例えば精里はですね、現状としては、これは佐賀藩政時代に書かれた『選士法議』と、いう資料の中でですが、現状の問題として、役人っていうのは、政務は実行するわけだけれども、なにぶん知性というかここでは不学と書いてある、学ばずの不学であって、ちょっとそういう実行に対して知の部分が足りないと、一方で学者っていうのは、いろいろ知をこねくり回しはするんだが、「学者は書を読候迄にて実行これ無く云々」で、それが「却って人の嘲りを請け候」みたいな、そういうコンプレックスも同時に持っている。本来理想像としては何かというと、「役人学者一致に相成るべしと云々」と、要は役人だって知・学に対してもっと関心を持って持つべきであるし、或いは儒者の方もただただ本読んで自分が賢くなって、何か口だけでベラベラ言うんじゃなくて、もうちょっとそれを実用の方に生かすという努力をしたらどうだと、そういうふうな考えを精里は持っている。それが息子・侗庵にも引き継がれておりまして、侗庵というのはいろんな著作を残すんですけれども、その中でひたすら世の儒者というものをめちゃめちゃ批判するんです。これは儒学に対する批判というよりは、世の中の最近の儒者はけしからんという意味での批判です。例えば、腐るに儒者で「腐儒」という言葉を使ってみたり、迂闊の上に儒者で「迂儒」という言葉を使ってみたり、そういうふうなところで、いや最近の儒者は自己満足ばっかりで全然何もしようとしないんだ。そういうことをいろいろ言う。つまり自分たちの学問というのは政治社会の役に立ってナンボであるというふうな意識がかなりあるということですね。さらに（2）で示しております「変通」の論理というのも一つ際立ったところかなと思います。これは極めて朱子学的な考え方でありまして、要は変通、役に立とうとすると、社会のいろいろが時とともに移り変わっていく現状に対応しようとすると、自分も変わらなければならないと。それが正しいというふうな考え方なのですね。これは古賀が新しく生み出した思想というよりは一般的な朱子学のものなのです。この側面

がかなり古賀に関しては強い。特に侗庵の時代からかなり直接的にこの変通という言葉が使われるようになる。これは印象的なエピソードがありまして、実はあの古賀の門弟に国本如庵という人がいますが、その人が日記の中である正月のエピソードを述べていて、侗庵先生のところに正月の挨拶に門人で行ったのだと。そしたら雪が降っていて玄関先まで来たけれども、玄関まで行く道がわからない。雪で埋もれていて、どうしようどこを通ったらいいんだろうっていうときに、横に縁側があるじゃないかというところでビチャビチャなワラジのまま縁側に入っていって、門人みんなでこういう時は先生が言う変通だと言って、本来通る道じゃない縁側だって現状の解決のために通るのが正しいんだというふうなところで、先生の家の縁側を土足で踏み荒らすと、それを見て侗庵も笑っているというふうなエピソードもありまして、かなり門人にもいじられるぐらいには普及するようなかなり特徴として一つこういう変通というふうな理念を持っているという人になります。ちょっと長くなりましたが、要はですね、古賀家というのはまず思考であるとか言動の根本原理としては、儒学というのを確かに据えながら、手段として洋学を選択することに対してあまりストッパーがないというふうな人たちになります。こういうふうな時代において、置かれた状況であるとか、対外危機という状況ですね、それとか彼ら固有の学問的な性質というところで儒者である古賀家というのと洋学が容易に結びついてくると。発想としては和魂洋才的とこれは後世にできた言葉ですが比較的マッチする四字熟語かなと思ってわかりやすく示しております。で、実際に洋学に興味を持っていく古賀家というストーリーなのですが、特に精里の時代に比べて、精里というのは実はあんまり洋学に対する関心が資料上は見えてこないっていうふうなところがあります。素質としてはいつ洋学と出くわしてもおかしくないっていう要素で持っているということは明らかになるのですが、あんまり洋学に傾倒した形跡がない。一方でそのいよいよ洋学、洋学してくるのは息子侗庵の時代からでありまして、侗庵というのはどういう人物かと。この人はすごく海防問題への関心というのが顕著にあらわれる人物になります。これが顕著に表れてくるのも、文化 6 年つまりフェートン号の翌年。幕府にとっても、佐賀藩にしても海防問題というのがいよいよ喫緊の課題として自覚され始めた時期、まさにその時期に海防問題への関心というのが顕著になっている。それ以降もライフワークとして海外の情報収集であったり、地誌の編集、或いはそれを踏まえた海防議論の建設というのをライフワークにしていきます。主な著作物としていろいろ示しておりますが、こちらも細かい説明は割愛させていただきます。割愛はするのですが、西洋船図集との関わりで言います

と、侗庵の議論には一つ特徴がありまして、文化 6 年の初期の頃から亡くなる直前まで、やっぱ一貫して議論はどんどん情報量も議論も磨かれてはいくんですが、一貫して変わらない主張というのがありまして、それは外国と交易を行うべきだという主張。これは別に無条件に開国を是認するというものではなくて、我々は今の世の中で既に外国に対抗する力をつけなければいけない状況になっているという。そのためには、今の国内の現状を見ると無理じゃないですか、じゃあ西洋に対抗するために西洋の長所は取り入れましょう、そういうふうな論理でいろいろな物だったり情報を取り入れるために交易をしましょうというふうな主張をするわけです。さらにその具体的な対抗の術として西洋式の大型戦艦が必要になるだろうというふうなことをずっと言っているわけですね。これもただただ大きい船を作るのではなくて、やっぱり西洋には大砲であったり、蒸気機関のような技術があるわけですから、それも只でかければいいのではなくて、西洋式でなければいけないと、そういうふうなことが言われるわけです。そういうところでやっぱり実際にあの古賀本の蔵書なんかを見てみても、海外の地図とか地誌歴史書だったり、必ずしも海防に直接絡んでこないようなですね物理学、化学、生物、天文みたいなそういうものも含めてかなり洋学由来の情報が書いたものが増えてくるという時代になります。

次ですね、彼の息子・茶渓になると、いよいよ洋学への傾倒というのはより一層見えてくるようになりまして、侗庵というのは実は洋学に関心はあるけれども、オランダ語が読めない人なんですね。なんだけれども古賀茶渓というのはさらにオランダ語も自分でバリバリ勉強して、オランダ語の原書を読むようになると、そういうふうなモデルで洋学に傾倒していく人になります。あまりにも傾倒しすぎて実はあの彼の日記の中には同僚あるいは門人からちょっとチクリと言われるような描写もいろいろあります。これは例えばお父さんの門人ですね、羽倉という人物から苦言を呈されている様子が日記から見てとれまして、要はあなたのお父さんは儒者としても世の中に認められたし、やっぱりすごい人だったから洋書にある程度ふけっててもいいけれども、あなたはまず家学、家学というのは家の学問ですね。儒学を勉強してからにしなさいよと、みんなに笑われちゃうよっていうふうなことをちょっと言われてたりとか、或いはですね、これ自分の門弟からもちょっと言われるんですよ。予西事、西のことですから西洋のこと、西事を放譚するを糸井生から、門人の糸井という人間ですが、忠告してきたと、先生最近洋学ばっかりやりすぎじゃないですかっていうふうなことですね。ただそういう意見がいろいろ周りから賛否両論を受けながらも、この茶渓というのは結構あ

の写真の通りですねヘラヘラしているところがあって、こういう門人から指摘を受けても、何か門人、愚かな門人が何か言ってきたと、彼は何もわかってないと笑うべし、笑うべし、というふうに日記に感想を書いているというふうなことになります。こういうふうな、周りからちょっと批判的に見られるぐらいに洋学に傾倒するというのが功を奏した部分もありまして、彼は日露和親条約締結の時にその日本側の全権の 1 人として長崎に派遣されていたりだとか。ちょっとだけ時代が下って、幕末安政 2 年になると、洋学所というまさに名前の通り洋学を研究教育する専門の機関が幕府によって建てられるんですが、それが建てられるとその教授職に就いていったりとか、そういうふうな人物になります。だから幕府の西洋学問を牽引した 1 人と言って過言ではないと思います。

すいません、ちょっといろいろ長くなっていますが、最後ですねそういう古賀家の下に西洋船図集がどういうふうに伝わったのでしょう。なぜ伝わったのっていう話は今のスライドで何となく伝わってもおかしくないよねと、いつ、どのようにというところで第 3 章の話を最後にしていきます。まず西洋船図集の伝来を考える上でかなりヒントになるのはここスライドでも一部画像示しておりますが、『謹堂日誌鈔』という、謹堂というのは茶渓のことですけれども、彼が書いた日記を多分門人になりますが、門人が一部省略や訳出して書き出した資料というのがあります。これが弘化 4 年から安政 3 年までの 9 年間にわたって書かれているんですけれども、これを見るとかなり人的交流だったり読書歴みたいなものが結構ポンポン出てくるんですね、何月何日何を読んだ何を写したというようなことで、そういうふうなところを見ると、例えば、弘化 4 年の 7 月には蒸気船説というのを写し終えたみたいな話が出てきたり、或いは嘉永 2 年 6 月 27 には 7 種の軍艦造法論というのを読んだというふうな話が出てきたり、彼はどうやらいよいよ西洋船に対してすごく興味を持って読書を重ねているということが見えてきます。では、西洋船図集の伝来のヒントになるような記述はそこにないだろうかというふうに見てみると、何個か可能性が浮かび上がってくるというところで最後の 4 ページのところです。まず一つ可能性としてあるのは、これは日記の記述からではないのですが、西洋船図集を作った本人・嘉村源左衛門が古賀本にもたらした可能性というのはあるのではないかというふうに考えられます。嘉村というのは西洋船図集を作成した後に実は弘化 4 年に江戸に出てきて佐賀藩の江戸御屋敷都合頭人並びに相談役というふうな役職に就いています。

江戸藩邸の総括役というか、藩主とか役人の相談役とかそういうふうなポストだと思わ

れますが、そういうふうになるので、彼が作った、西洋船図集の作者が江戸に来ていると、これはかなり、しかも古賀というのは、佐賀の藩邸にも出入りをしているという人間ですから、そういうところで直接に作者から受け取った可能性というのも一つ考慮できると。次はですね牟田幾之助という人物もちょっと臭い。これはどういう人物かと言いますと、これは諫早の藩士です。厳密に言うとこの時期は藩士の息子なわけですが、この牟田という人物は先ほど申しました諫早好古館で代々儒者をしている家になります。この幾之助という人間はですね、嘉永 6 年に古賀茶渓がロシア使節の対応のために長崎に行く途中で諫早によるんですが、その時にも交流をしておりますし、そこから古賀一同が引き上げていくタイミングに合わせて、自分も江戸に上って、そこから 1 年間江戸で修行をするというふうな人になります。ちなみに言うと、彼の兄・逸馬という人物と彼の父・宗蔵という人物も古賀門下に入っているという人物です。時期的に彼が江戸に上るときに西洋船図集を携えていって、古賀本にもたらしたという可能性も十分にあり得るのかなというふうなことになります。そうするといよいよ諫早家文書の西洋船図集と古賀本というものが直接に結びついてなかなか面白いことにもなってくるかな、これは要検討です。最後に、その他、古賀の江戸の家塾に出入りした人々によってもたらされた可能性というのがありまして、今回はその中で佐賀藩士の中で可能性がかなり濃厚な人というのをピックアップしております。まず一つがですね杉谷要蔵という人物です。この人は佐賀藩士で江戸では直接あの古賀門下に入ったわけではないのですけれども、実はあの蘭書の翻訳が非常に優れた人であったみたいで、この伊東玄外と一緒に蘭書の翻訳事業というのをいろいろ数々やっている人物です。実はこの『謹堂日誌鈔』の中で繰り返し名前が登場しまして、要はどういう関わりで登場するかというと、古賀はですね杉谷に教えを請うような形で、オランダ語の原文を読みたいときに、次はね、今度これ読んでくれませんかっていうふうなお願いをする。そういうふうな、ある種子弟関係のような関係が構築されているというふうなことになります。要は洋学に精通した人間で且つ佐賀の人間でありますから、なかなか筋があるのではないかというところで一つくさい案件、もう一つがですね、千住大之助、千住西亭という名前でも知られる人ですけれども、佐賀藩の儒者が古賀の門下に入っております。これはですね最終的に鍋島直正の側役になる。要は側近になる人でもありまして、これも日記に繰り返し登場しております。その内容を見てみると、千住生、千住ですね。千住生へ西洋の疑案少々相記し、崎港、これは長崎です。長崎カピタンへ内々問い合わす。だから千住を仲介役としてカピタン

とのコミュニケーションをはかっているとか。或いは千住より侯命、これは佐賀藩主ですね。佐賀侯・肥前侯の命を配し家蔵・王龍渓、これは詩人、陽明学の詩人です。『王龍渓全集』を見度旨申し越す、と要は千住を通して佐賀藩主からちょっと本貸してくれないというふうなことが言われていたりとか。或いは千住生、慎機論並びに鴆舌小記を置いて去ると、これはどちらも渡辺崋山による著作になりますが、そういう洋学者の著作というのをポンと古賀の手元に置いていったりとかそういう人物ですね。要は佐賀・長崎とのパイプ役を果たしていたり、茶渓が読みたい本、或いは興味あるだろうなっていう本を茶渓のもとにもたらしたりとか、そういう人物でもあります。さらに先ほども申しました通り藩主との間柄が非常に密接であるというところで、個人的には一番可能性があるのではないかなと思っているのがこの千住という人物です。要はあのルートとして諫早文庫、諫早家文書から古賀本に伝わるまでの間に佐賀本藩が経由されている可能性というのも大いにあるのではないかと、或いは佐賀から直接古賀という可能性もあるのではないかといろんな可能性が考えられるということになります。最後ちょっと示しておりますが草場大次郎、これはあの佐賀本藩の儒者草場佩川というあの大儒者でありますが、その息子になります。これも嘉永元年に古賀のところに入門しておりまして、実は入職記録以外に大した記録は残っていないのですが可能性としてはなくはないかなということで最後に示しております。

ちょっと長くなりましたが最後全体のまとめを少し述べさせていただいて、報告を終わらせていただきます。まずまとめとしまして、結論から申しますと結局古賀本の『西洋船図集』の伝来の正確な時期とか、経緯については確定までいくかというとちょっとその材料を欠くというのが現状であります。ただですね、古賀家の人々と佐賀・諫早というのは、人的な繋がりに加えて海防・洋学への関心というのもかなり密接に共有していたということがありまして、やっぱり古賀本の『西洋船図集』と諫早に伝わった『西洋船図集』っていうのは、無関係ではないかなという気がすごく強くしております。さらに最後に考察しましたような伝来の過程というのは、いろいろ見ていく中で、この先明らかになっていくのではないか、或いは新しいことがわかっていくのではないかというふうに思うのは、佐賀・諫早或いは長崎・江戸、或いは幕府のような大きな組織も含めて、その間で構築された洋学のネットワークのようなもの、そのハブとして古賀が機能していて、その機能するための１ファクターとして、諫早の藩士、あるいは諫早家というのがかなり密接に関わっていたのではないのかなというふうな可能性もこの先いろいろ検討できたらなというふうに思っております。以上雑駁なわ

りに長い報告になりましたが僕からは以上になりますご清聴ありがとうございました。

【岩﨑】

登壇者の皆様どうもありがとうございました。それでは長い時間ちょっと報告お聞きいただきましたので、しばらく休憩の方取らせていただきたいと思います。その間にシンポジウムのセッティング、それから皆様の質疑質問用紙等の回収等も行いたいと思います。いきなり回収といいますか質問書いている時間がありませんので、しばらくお書きいただく時間を設けた後に回収の方の手続きに入らせていただきたいと思いますので、ご質問のある方はよろしくお願い申し上げます。それではしばらくご休憩ください。大体 15 時 15 分か20分ぐらいの間には始めたいと思います。再開したいと思いますのでよろしくお願い申し上げます。

【岩﨑】

それでは皆様から頂戴いたしましたご質問の下、質疑応答の方ですね時間大体 20 分程度を予定しておりますが、進めさせていただきたいと思います。

【岩﨑】

まず『西洋船図集』ですね。今回のあの 3 本のシンポジウムの報告の中で、それぞれ『西洋船図集』といったものが研究の一つのきっかけになっているというふうなことがご指摘なされたかというふうに思います。それではやっぱり西洋船図集の諫早家本といいますか、諫早家の中に残ったやつと、それから古賀本で残ったやつの関係性のようなものっていうのは、イマイチやっぱりちょっとはっきりしないようなところがございますので、その点現状どのような整理をすることができるのか。それから元の元図ですね、ヘリット・フルーネウェーヘンが書いた銅版画のタイトルですね。このあたり基礎的な情報ということになりますが、森さんの方からあの知見がありましたらよろしくお願いいたします。それともう一つ佐賀本藩に残っているかどうか。についてもコメントをお願いいたします。

【森】

『西洋船図集』についてなんですけれども、まず、これはオランダの版画家・ヘリット・フル

ーネウェーヘンとういう人の作品になるということで、ちょっと確定をしております。原本の資料名なのですけれども、お手元の図録 76 ページ、これはちょっと私がオランダ語はできませんので、なんと読めばいいのかなということになるのですけれども、これが一つ 84 点のオランダ船のストックとオランダ語で描かれています。元々7つのシリーズの合体なります。1つのシリーズが12点の絵になっています。それが 7 シリーズ出版されて、それで最後 1 冊になったという形になります。で、諫早の『西洋船図集』にはその内の 6 シリーズが写されています。途中でいくつか抜けはありますけど、6 シリーズ分が写されていて、そこから推測するに最後にまとめられた 1 冊ではなくて、シリーズごとに出されたものが、日本にやってきて、それを見て写したのではないかなと推測しております。あと、この資料が佐賀本藩にあるかというところなのですが、おそらく作者が嘉村源左衛門であるので、嘉村家にはあったと思われますが、今のところ『西洋船図集』という資料名で残っているのは、諫早図書館に残っているものと宮内庁にある古賀本に収蔵されているものと、今のところ2点しか確認をできておりません。

【岩﨑】

ありがとうございます。今の質問とちょっと関連してですが、これは予期しない質問なのかもしれませんが、フルーネウェーヘンの銅版画のサイズと、それから諫早家文庫の船のサイズっていうのは何か同じものをそのまま何か薄紙か何かを引いて写していったのかとか。そういう筆写のあの形態とか、あの形跡については何か推測できるようなものっていうのは現物の観測から得られていますでしょうか？

【森】

現物を一応 2 点ほど特別展の展示室で展示をしております。対比いただければと思うのですが、サイズ感は似通っているのですが、薄紙を引いてトレースしたような感じではないです。そもそも嘉村が作った原本を多分写しているので、諫早図書館所蔵の分については、オランダの銅版画の原本をトレースしたのではなくて、嘉村が写したものの写し。結構、船の部分見ていただければわかると思うのですが、写した福田が船の構造に詳しくないのか船首とか船尾とかが結構曖昧に書かれたりしています。碇の部分が碇じゃなくて、何か模様になっていたりします。そういった苦労をしながら写したなというふうに考えられるの

で、おそらく福田自身は原本を見てないのではないかなと思います。

【岩﨑】

はい、ありがとうございます。これは、すいません今の質問と関連して、藤本さんに予期しないところをお聞きしますけど、あの名村の注記が入りますよね。船図、皆さんもご覧になって、上に注記を書いているのは名村、オランダ通詞がその書いている元の原本にはない注記ですね。ないですかね。元の原本には注記はないです。名村がオリジナルで付け加えている注記なのですけども、あの水準を見て、例えばオランダ通詞の語学力というか、オランダ読解力というのはどの程度あるかなんていうのはある程度推測はできるのでしょうか？

【藤本准教授】

ありがとうございます。阿蘭陀通詞の語学の水準については、どうしてもやっぱり個人差があるという前提がございますので、一概に申し上げられない部分がありますが、全体として阿蘭陀通詞の語学の力量については、17 世紀には出島に平戸から移ってきた通詞がなんかが存命であったわけですけれども、オランダ人たちと直接的に日常的な交事で隔離されることなく密接に関わった時代と比べると、どうしてもオランダ通詞の語学の教授っていうのが、父から子に相伝とで伝えられてきた部分もありますので、時代が下るにつれて、語学の力量の低下が懸念されているところが史料上でも出てきています。

いっぽうで、19 世紀に入りますと、対外危機の高揚を背景に改めて阿蘭陀通詞たちの間で、オランダ語に加え、英語など異なる言語を学習しようという機運が高まってまいります。そういった中で、言語研究に留まらず自然科学とかに関しても医学・本草学・天文学などの知識を身につけ、力量を発揮していく者があらわれてゆく。これは 19 世紀より以前の段階からそうなのですが、阿蘭陀通詞が洋学を長崎からほかの地域に伝播する役割を担ってゆくことになります。阿蘭陀通詞の語学の力量については、大まかな流れとしての説明になりますが、時代によって浮き沈みがあることは前に述べたとおりです。

なお、名村の語学の力量については、彼自身のそういった館入としての才覚とかオランダ語の和訳の注記とかを含めると、当時の水準としては充分とみなされる運用能力は持ち合わせていたのかなというふうに推測しています。

【岩﨑】

ありがとうございました。今のこと一応ご質問の中であったことと少し回答という形になるかと思います。通詞たちがどういう状況でオランダ語を学んでいったのかということが一つの回答にもなるかと思います。その一つの成果が、例えばあの『西洋船図集』の注ですね、頭につけているような文章の表記にも表れているというふうなことです。よくお読みになっていただくと、いろんな単語が使われているというのがおわかりになります。それは『西洋船図集』にないない、あの語彙を使って書かれている言葉ですのでオランダ通詞が独学をしてつけていった言葉ということになるかと思いますので、その辺りで、オランダ通詞の語学力の一端のようなものを感じていただけるのではないかというふうに思います。それと関連してということになるのですけども、森さんの報告の中に、あの表にあの洋学という表現が出てきたということなのですが、これは一般にあの致遠館ですね、諫早の長崎屋敷で行われたあの致遠館事業が英学伝習事業というふうなことで英学を教えて、具体的に何をやったのかっていうと、オランダ人宣教師であったオランダ教会宣教師ですかね。アメリカからやってきたフルベッキに英語の語学、英語の語学を教えるということが致遠館事業の大きな中身であったかというふうに思うんですが、英学というのは基本的にそういうふうなこととして考えて良いのかどうか、いかがでしょうか？森さん、いやいや藤本さん。すいません。

【藤本】

英学学習に関することですけれども、長崎にあって母語話者による英学の教育がはじまった出来事としては、アメリカ出身のラナルド・マクドナルドの阿蘭陀通詞に対する教授が知られています。マクドナルドは焼尻島、利尻島、松前と経由して蝦夷地方面から長崎にやってきます。長崎では座敷牢に入れられて軟禁される中でオランダ通詞たちに英語を教えたという挿話が知られています。それ以前にもフェートン号事件を契機に、オランダ人のブロンホフによる指導のもと、本木庄左衛門らによって英和辞書が編纂されたりしています。長崎は古くからそういった英学教育の発信地といいますか、学習をする上で重要な拠点になった場所でもあります。

岩﨑先生のご指摘にもあった、フルベッキの来日などを経て、長崎では広運館など英語を学習するための教育機関も開設されました。九州、全国各地から様々な学習者たちが長崎に英語学習を目的として訪れたことが知られています。

一般的に語学、英学という言葉だけを耳にしますと、現在の教育機関で行われている語学教育のイメージが非常に強く想起されてしまうものと思うのですが、フルベッキたちの教授方法というのは少しそれとは異なるものです。いわゆる教養に属するような学問領域を対象に、英文で書かれた書籍を教科書に用いて授業をしていたというふうに言われております。例えば英文で記された世界史のテキストを使いながら英語を教えるといったやり方になります。フルベッキは宣教師でもあるので神学なども享受していたようです。つまり、ほかの学問領域に対する理解を促進しながら、純粋な語学教育というよりはそういった教養教育の要素も取り入れて、両方やりつつ英語の読み書き、発音ができるようになるというような学習目標を設定して教育に勤しんでいたというふうにもいわれています。以上です。

【岩﨑】

ありがとうございます。確かに英語の文献を使いながら、様々な知識教養を日本人に享受していくという。そのスタイルが今はあんまりなくて、英語の教科書は教科書としてあるわけですけども、明治、幕末から明治初期にかけてはいろんな世界知識、あるいはその人文学的な自然科学的な知識や英語をもとに、佐賀藩士たちに教示されていたと、そこはひょっとしたら何か語学教育みたいな考えていくと一つの発想になるかもしれないということですね。はい。ありがとうございました。

すいません、井上さんの方に質問を送りたいと思いますが、今回ですねやっぱり一番聞いていて、聞きごたえがあったのが最後の古賀本の伝来についてっていうことで第 3 章の報告ということになるかと思うのですが、いろんな可能性が示されていく中で、あの佐賀藩士でその古賀の塾に入門した塾生から、どっかで佐賀本藩にあったやつか或いは嘉村が持っていたやつか、或いは諫早家にあったやつか、ちょっとそこははっきりしないですけども、それらが門人を経由して古賀家の方、古賀文庫の方に入ったのではないかっていうのは、一つこれです皆さん、多分これ言っているのは、日本に彼だけですので一つの卓見ではないかというふうに思います。なお後日具体的な資料が出てくれば大変評価すべき見解ということになるかと思うのですけども、今のところですね、ただ嘉村が江戸に行って、死没したばかりの、侗庵はもう死んでいるのですけども、その古賀家に献上しようとご本人が持って江戸に行ったけども侗庵は死んでしまったとかですね、ちょっといろんな可能性がある中で、もう 1 回ちょっとどこが一番確率として高そうか、見込みがありそうかというところを

少し改めて強調していただくような形でご説明するとどうか、それが一つと、もう一つは西洋船図集を仮に茶渓、侗庵はひょっとしたら、もちろん生前に入手している可能性がないわけではないわけですけども、古賀家がその例えば西洋船図集のようなものを見たときに、あれはやはりその海防政策の立案であるとか、そういった場面で何か具体的な効用があるというふうに古賀家としては見なされるような内容であったのかどうか、そこはどうでしょうか？

【井上】

はい、ご質問ありがとうございます。まず、1 点目ですね、いろんな可能性いろんなルートが考えられる中で古賀本に西洋船図集が伝わった時期として、らしいです、ありうる、というといえばどこかという話ですが、確かに嘉村という人間が江戸に上ってくるタイミングが、弘化 4 年でありまして、古賀侗庵は亡くなるのがその年の年明けすぐという状態、そういう状況です。だから要は当然嘉村が江戸に上ると、本人が希望したのか藩命なのかわかりませんけれども、江戸に上ると決まり、いろいろ手続きが進み、そして実際に到着するまでには多少のラグがあったはずで、何かを持っていこうというふうになると、当然佐賀を出る前に、西洋船図集というものを自分の風呂敷に入れて、或いは箱に入れて持っていかなければいけないということになるので、確かに嘉村の江戸行が侗庵の生前に既に決まっていたとすると、さらに言うと侗庵が亡くなって、その当日翌日に佐賀に侗庵の訃報というのが伝わるわけではありませんから、例えば 2 月とか、ちょっと実際には亡くなって暫く経ってからであっても、嘉村が侗庵に渡そうというつもりで西洋船図集を手ずから携えていったという可能性はそんなに薄くない線としてあるのかなと。それは確かに弘化 4 年にもたらされたという可能性は大きな可能性としてあるというふうに思っております。あえて最有力と言って、2 個言うのもあれなのですけれども、ただ一方で嘉村は佐賀藩士であって、彼が江戸屋敷に出てきたタイミングでやっぱり江戸藩邸での藩主の交流が直接あったのかというのが私の気になるところではありますけれど、その時の佐賀藩主というのは、鍋島直正、俗に蘭癖として知られる。彼の藩主がそもそも洋学・蘭学で大好きという藩主ですので、やっぱり嘉村が、自分のところの藩士の嘉村がそれを作ったらしい、西洋船図集というのを持っているらしいと聞いて、藩主がそれをこう献上させる或いは写して自分の手元に置いておくというふうな可能性がある。そうすると千住大之助のところで紹介したような古賀と藩主のほ

ぼ直接的な交流の中のもたらされたという可能性もまたあるかなというふうには思います。ちょっと最後話はあれなのですけれども、そういうふうになって、で古賀の、古賀本に西洋船図集が伝わって、要は古賀家の人々、侗庵ないし茶渓がそれをどれだけあの海防とか対外政策に直接的にリンクするものと見ていたのかっていう話なですけれども、これは実際のところそんなに直接リンクするから西洋船のことを深く学ぼうというふうなモチベーションがあったかは、ちょっと怪しいというところであります。確かに侗庵も茶渓も変わらず海防というのは一大問題であって、特に茶渓の場合はもう実際外国との貿易交渉というのは進みだすということで、対外関係は絶対第 1 の課題として脳みその中にはあったと思うのですが、ただ実際先ほどお示ししました謹堂日記抄、彼の残した日記の中の読書録を見ると、必ずしも海防に直接関係するものだけではなくて、結構のびのびした関心のもとで本を選んで読んでいたりとか、いうこともありますので、直接のリンクを彼が意識していたかどうかはちょっとわからない。ただし、どんな問題がどんな課題が今後起こってもいいようになるべく多くの知識を入れておこうとして、今度海防の観点から言うとこういう西洋軍艦の話も当然仕入れておこうという意識は間違いなくあっただろうと思います。ちょっとわかりにくいですね。

【岩﨑】

ありがとうございました。後ですね、これは私の方からお答えできるかもしれません。まず、西洋船図集について、この図の社会的意義ですね。どう見ても本物の船ではない図もあって、多分巻末にあった空船の図ですね。そのあたりを指しておっしゃっているのではないかというふうなことですが、あの西洋船図集そのものは、元々これはオランダのロッテルダムの風景画家が描いた銅版画が元になっておりますので、まさしく風景画です。その風景画なるもの。問題はその風景画なるものがオランダを通じて日本に入ってきて、それは長崎の町人の所有になるのですが、それを嘉村が見てですね、それは単なるその風景画としてではなくて、西洋のその船の、あの船を分析解析するための一つの資料として取り上げたという。そこが大事なところです。要するに当初はあの風景画であっても受容する側は、それはそう見てなかったという、別の受容の仕方をしたということですね。そのあたりが当時の江戸時代のその文化交流の一つのあり方として大変興味深い論点ではないかというふうに思っています。しかもあのフルーネウェーヘンの銅版画に関する具体的な研究を日

本でそれをやっている人はいないのですね。いなくてフルーネウェーヘンが持っている銅版画全てを収蔵している、オリジナルのあの物を収蔵している国内の機関というのは今のところ日本国内にはないということを。あの複製あるんですよ。複製は存続しているのですけども、オリジナル銅版画を収録している国内の研究機関は今のところないということです。1セットで 200 万ぐらいですかね。買えないことはないのですけど、なかなか予算が九大で買ってもらおうと思ったのですけど、なかなか予算がつかずに買えずじまいになってその内丸善の丸善でしたか、あの紀伊国屋かな書店の在庫が消えてしまったので、どっかの研究機関が買ったのか、個人が買ったのかわかりませんが、そういうふうな状況でございます。

それと後もう一つはその全体のシンポジウムをお聞きになって、皆さんはどういうふうなご感想を持ったのかっていうのは、ちょっと私の方から1つこういうことが言えそうだということで付け加えることがあるとすればですね。従来の武士の蘭学というのは、皆さんよくご存知の佐久間、佐久間象山が一つの起点になったと言われています。佐久間象山は松本の、あの真田ですね、真田幸貫の海防顧問、彼が幕府の海防顧問になったときに、いろいろ蘭学を学ぶわけですね。要するにその藩士という立場で蘭学を学ぶ。それまでの蘭学というのは要するに学者の蘭学であったわけですよ。お医者さんとかですね、蘭学者とか。その学者の蘭学が藩士の蘭学に変わっていくっていうのが一つ起点となったのが佐久間象山というふうに言われています。ところが今回の報告を聞くと、まず、直正の蘭学修行に関する通達がそれをちょっと早い。しかも諫早はそれよりもっと先行する可能性があるということなので、このあたりの論点は上手に作っていきますとひょっとすると従来の研究史で言われているようなこととはちょっと違う論点が出てくるかもしれません。そこはただ長崎警備に携わっている諫早家の独自の蘭学修養みたいなものがあったのかどうかも含めてですね。今後大きな一つの研究の課題になってくるかなというふうに少なくとも我々ではそういうふうな認識をしているところです。

後、もう一つはこういった優れた図録がお手元に届けられているかと思うのですけども、これをこのまま留めておくのは大変もったいない話で、是非、国際的な情報発信、フルーネウェーヘンとかオランダの銅版画、銅版画がこういうふうに形になっているわけですので、しかるべきタイミングで例えば英語版の解説をつけてネット上に上げていただくとかですね。それちょっと国際的な情報発信みたいなことに着目されると思わぬ反応がヨーロッパとか欧米あるいは世界の方から諫早に返ってくる可能性があると、それをもとにまた研究も進

んでいくと。これ森さんが掲示された洋学とかその蘭学修養した藩士の一覧がありましたね。あればああいうリストを出すことが大事で、そうすると見学にいらっしゃった方が、これうちのご先祖だとかですね、思わぬところで情報が出てきたりします。やっぱそういった一つ一つの小さい情報が全体としての研究を進めていったり、あの展示の内容を豊かにしていくということにもなるかと思いますので、この辺りやはり我々のような歴史研究家ではなくて、ぜひとも諫早市民の方々の協力が不可欠ということになるかと思いますので、どうも今回のシンポジウムにとどまらず、引き続き諫早市美術歴史館あるいは図書館のいろんな展示とかには興味を持っていただき、必要な知見あるいはご存じの知見があればぜひとも積極的にご提供いただければと私なんかは思ったりいたしますすいません。非常に雑多な雑駁なことになってしまいましたけども以上をもちまして一応タイムテーブル通りにあのシンポジウムの方が無事に終了いたしました。私の方からは皆様に本日ご来場いただきましたことへの感謝のお礼を述べまして、シンポジウムを閉じたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

【アナウンス】

　それでは本日はご来場ありがとうございました。いくつかご案内がございます。まずですね、今回の展示をご覧いただいて古文書読みたいとか、そういう興味がある方いらっしゃいましたら、諫早図書館の方で毎月第 2 第 4 土曜日に古文書解読の研究会みたいなものをやられていますので、興味ある方、図書館の 2 階郷土史料室にお尋ねになられてみてください。それからちょっと先ほどご案内し損ねましたけれどもヘリット・フルーネウェーヘンの原画ですが、Google ブックス、電子書籍で見ることができます。あのオランダ国立図書館だったかな。なんかが提供しているものがありますんで、URL が長崎学研究所の紀要の何号でしたっけ、第 5 号、私と橋本と岩﨑先生で資料紹介させていただいた『西洋船図集』の注釈のところに URL も記されておりますのでご参照いただければと思います。一応ちょっとご案内でした。では、本日はありがとうございました。

おわりに

本シンポジウムの開催にご協力いただきました九州大学大学院岩﨑義則准教授、長崎

外国語大学藤本健太郎准教授、九州大学大学院井上修平氏、そして、諫早図書館など準備段階から多くの機関と方々にお世話になりました。ここに深く感謝申し上げます。

（もりたけふみ／当館学芸員）

（９５）『日記』諫早家文書１１０２２
（９６）『日記』諫早家文書１１０２３
（９７）『日記』諫早家文書１１０２８
（９８）橘湾沿岸
（９９）『日記』諫早家文書１１０３１

【参考文献】

福永酔剣・寺田頼助『肥前の刀と鐔　上・下』雄山閣　一九七四
大喜正勝　『肥前長崎の刀剣』　銀扇社　一九七六
角川春樹『角川地名大辞典　４１　佐賀』　角川書店　一九七八
角川春樹『角川地名大辞典　４２　長崎』　角川書店　一九八七
江口喬裕「古文書紹介～『境家文書』～」『開館１０周年記念　研究紀要』　諫早市美術・歴史館　二〇二四

（４２）佐賀藩諫早領。現在の長崎市戸石町。
（４３）『日記』諫早家文書１０６１４
（４４）佐賀藩諫早領輪内の一つ。現在の諫早市金谷町。
（４５）佐賀藩諫早領。現在の佐賀県太良町糸岐。
（４６）『日記』諫早家文書１０６１９
（４７）諫早家第十一代領主茂圖と室於臺。
（４８）『日記』諫早家文書１０６３３
（４９）現在の雲仙市国見町神代と思われる。
（５０）現在の長崎市古川町・万屋町
（５１）『日記』諫早家文書１０６４６
（５２）『日新記』諫早家文書１０６６６
（５３）深堀鍋島家第１０代領主鍋島茂辰
（５４）『日新記』諫早家文書１０６９６
（５５）『日記』諫早家文書１０７９７
（５６）『日記』諫早家文書１０７９８
（５７）『日記』諫早家文書１０８２５
（５８）江戸時代は佐賀藩諫早領輪内の一つ。諫早市上野町。
（５９）佐賀藩で長崎警備担当。
（６０）『書上綴』諫早家文書１０８２３
（６１）『日記』諫早家文書１０８６６
（６２）『日記』諫早家文書１０８６７
（６３）『日記』諫早家文書１０８８２
（６４）『日記』諫早家文書１０８８３
（６５）『日記』諫早家文書１０９２９
（６６）『日記』諫早家文書１０９３０
（６７）佐賀藩諫早領輪内の一つ。現在の諫早市西郷町付近。
（６８）『日記』諫早家文書１０９３１
（６９）龍造寺高房の菩提を弔うために、鍋島直茂が建立した曹洞宗の寺院。佐賀市多布施三丁目。
（７０）現在の佐賀市長瀬町
（７１）『日記』諫早家文書１０９３２
（７２）『日記』諫早家文書１０９４１
（７３）佐賀市八戸一丁目・二丁目
（７４）佐賀藩諫早領輪内の一つ。現在の諫早市船越町。
（７５）長崎警備。
（７６）佐賀藩諫早領輪内の一つ。現在の諫早市八坂町。
（７７）『日記』諫早家文書１０９６０
（７８）第８代忠吉
（７９）『日記』諫早家文書１０９６２
（８０）『日記』諫早家文書１０９７７
（８１）『日記』諫早家文書１０９７９
（８２）小城藩第１０代藩主鍋島直亮
（８３）『日記』諫早家文書１０９９２
（８４）『日記』諫早家文書１１００７
（８５）『日記』諫早家文書１１００８
（８６）９代忠吉
（８７）佐賀藩諫早家の下屋敷。現在の佐賀市精町。
（８８）厘外津は諫早と佐賀を結ぶ有明海航路の佐賀の港で、諫早領主が諫早～長崎間を往来する際に使用することが多かったので、潮や風待ちのために、佐賀藩諫早家の屋敷があった。また、佐賀市長瀬町には、「いさはやとかいばへ」と彫られた傍示石が立っている。現在の佐賀市末広二丁目。
（８９）『日記』諫早家文書１１０１０
（９０）『日新記』諫早家文書１１０１３
（９１）現在の佐賀市呉服元町
（９２）現在の佐賀市柳町
（９３）『日記』諫早家文書１１０２０
（９４）諫早家第１６代領主諫早一学

注

（１）長崎県指定文化財。諫早市立諫早図書館所蔵。「諫早家文書」は、日記類一〇三三冊、記録類三九〇冊、絵図類八五葉からなる古文書群で、日記類は延宝四年～慶応四年（一六七六～一八六八）の一九二年分の諫早家・佐賀藩に関する事跡が書かれ、日記は諫早と佐賀でそれぞれ書かれている。

（２）紙本墨書、永禄十年（一五六七）、縦十九．一ｃｍ×横七百二十四．一ｃｍ

（３）長崎県指定文化財。諫早市立諫早図書館所蔵。戦国時代伊佐早地方を治めていた西郷氏に関するものや天正十五年（一五八七）の西郷氏と龍造寺氏（後諫早氏）との戦いなどを諫早家家臣などからの聞書きを収録したもの。

（４）西郷家三代。西郷純久嫡子。弟は第十八代深堀純賢。

（５）諫早市栄田町に平野という字名は無く、場所は不明。

（６）『肥前長崎の刀剣』に、「吉野朝時代」…則末初代（散位則末、豊後安則系、肥前国伊佐早に移住、貞和）則末二代（散位則末、応安）「室町時代」…則末三代（散位則末、応永）則末四代（文安）則末五代（文明）則末後代（中村大蔵、時代不明）とある。

（７）諫早市高来町大戸。

（８）『日新記』諫早家文書１００５３

（９）佐賀城下の一町。現在の佐賀市材木１丁目・２丁目

（１０）『日新記』諫早家文書１００８３

（１１）『日新記』諫早家文書１０１０５

（１２）『日新記』諫早家文書１０１０９

（１３）佐賀県藤津郡太良町大浦竹崎にある真言宗の寺院。江戸時代は諫早家の祈祷寺となる。

（１４）諫早家第七代領主諫早茂晴

（１５）『日記』諫早家文書１０１２０

（１６）【６】・【１７】で吉村姓で鉄砲鍛冶として名前が記載されているので、嘉村は吉村の間違いと思われる。

（１７）『日新記』諫早家文書１０１３５

（１８）『江戸御留守日記』諫早家文書１０１５４

（１９）『日記』諫早家文書１０１７０

（２０）『日記』諫早家文書１０１７５

（２１）『日記』諫早家文書１０１８８

（２２）諫早家第八代領主茂行の幼名。

（２３）初代忠吉の孫で、初代行廣と思われる。

（２４）『日記』諫早家文書１０２０２

（２５）『日記』諫早家文書１０２１８

（２６）久世重之・老中。六代将軍徳川吉宗の命により新刀の刀工について調べており、その際の通達記録と思われる。

（２７）『日記』諫早家文書１０２２０

（２８）佐賀藩諫早領。現在は諫早市高来町下与・上与・峰・西平原・折山・平田。

（２９）『日新記』諫早家文書１０４８５

（３０）佐賀藩諫早領。長崎街道２５宿の一つ。現在の長崎市矢上町。

（３１）『日記』諫早家文書１０４９５

（３２）『日記』諫早家文書１０４９９

（３３）佐賀市六座町

（３４）多久家第九代邑主多久茂鄰と思われる。

（３５）『日記』諫早家文書１０５０７

（３６）『日記』諫早家文書１０５４５

（３７）佐賀藩諫早領輪内の一つ。現在の諫早市天満町。

（３８）『日記』諫早家文書１０５７５

（３９）『日新記』諫早家文書１０６１１

（４０）『日新記』諫早家文書１０６１３

（４１）江戸時代は佐賀藩諫早領輪内の一つ。現在の諫早市栄町。

い、空敷罷り在り候、亘り、誠に以て残念千万存じ奉り居り候え共、折節此節御備え筒玉製作等仰せ付けられ候に付きては、斯くの御時節社身□の限り、差し部り御奉公申し上げ候はて、相済まざるに付き、右玉の儀、全分献納仕度存じ奉り候え共、大全の業柄、小身の者にて、何分任せ難く、心力に付き、□ては、其内空丸二百つ丈、左に書き載せの通り、鋳立て献上仕度御座候条、近来願い奉り難く、恐れ入り奉り候え共、御支え御座無く候はば、請けなられ下され候道は御座有る間敷哉、願い奉り候、然るにおいては、御蔭に聊かながら、年来の志願をも相達し申すべくと重畳有難き仕合せ、存じ奉り候条、何卒願い通り仰せ付けられ、下さる様、何分宜しく執達、深々御頼み仕り候、以上

寅八月　副嶋伊平

御武具方

但し、御筒二挺分五放づつ

一、三十六封度空玉　十玉

但し、一挺分

一、三十封度　同　五玉

但し、二挺分

一、二十四封度　同　十玉

但し、四挺分

一、二十寸　同　二十玉

但し、二十三挺分

一、十三寸　同　百十五玉

但し、三挺分

一、十三寸半　同　十五玉

但し、五挺分

一、十二封度　同　二十玉

〆空丸二百つ

【68】境繁之助の鍛冶小屋を諫早領主見学

慶応二年（一八六六）九月二十三日（97）

一、檀那様（76）御事、暁八ツ半時比、厘外屋ヶ代（88）相棲み居り候、境繁之助刀剣打ち方御覧御出でられ、夕七ツ半時比、御帰館遊ばされ候事

【69】香田忠蔵の修行

慶応三年（一八六七）七月十六日（99）

一、研師香田忠蔵儀、佐嘉師家元へ当節より向う一ヶ年稽古御暇一往願い出候え共、差し付け御差し支えと相成り、殊に御仕組筋へも差し移り候訳を以て御差し留め相成り候処、尚又再願い致し候に付き、長崎御仕組方（59）へ打ち合せに及び候処、志願の次第は、余儀無く相聞き候え共、向う一ヶ年と候ては、余り長く相成り候に付き、願いの内、当冬迄半ヶ年御暇差し免され方にては、これ有り間敷哉、返達相成り一体同意相談じ候段、請役方より伺い来たり、御耳に達し候処、其通り仰せ出でられ候に付き、其段端書に及び返報候事

おわりに

佐賀藩諫早領の刀鍛冶の境家、鍔師の野田家は様々な書誌で研究発表してあるが、その他の職人に関しては、子孫の調査や古文書の所有の有無、実物の調査などが進んでおらず、今後の課題である。

（おおしまだいすけ／当館主任専門員）

【62】馬場善右衛門の鍛冶小屋へ諫早領主見学
元治元年（一八六四）五月二十五日（93）
一、檀那様（94）御事、馬場善右衛門八丁馬場下御屋敷内住居（87）、野戦銃製造仰せ付けられ置き候に付き、細工御覧なられ、八ツ時比より八丁馬場下御屋敷御出で御茶屋へ御滞座の末、夜五時比御帰り遊ばされ候事

【63】香田忠蔵の甥香田新七を召し抱え
元治元年（一八六四）十二月二十八日（95）
一、上御研師手明鑓香田新七甥忠蔵儀、刀剣其外研ぎ方練熟罷り在り候由に付き、召し抱えられ方にては御座有る間敷哉、先頃請役方より伺い来たり候に付き、御耳に達し候処、伺い通り仰せ出でられ候に付き、相談じ度儀これ有り候条、今日四時比、此御方罷り出で候様、昨日遣い置き候処、則罷り出で候に付き、中原要助御右筆間ノ間へ同道致し候処、御用人中嶋九左衛門・中嶋弥七左衛門列座罷り在り、九左衛門より左の通り相達し候処、重畳有難き存じ奉り候、用捨ながら、御請け御礼申し上げ候旨、申し達し候に付き、御耳に達し候事
但し、本文忠蔵召し抱えられ度次第、前以て、新七へ御相談、御領掌の上也
香田忠蔵
其方儀、刀剣其外研ぎ方練熟に付き、今般御目見通り、平侍仰せ付けられ、三人御扶持下し置からるの旨、仰せ付け候
元治元年十二月

【64】勝田武平のお目渡し
元治二年（一八六五）一月二十七日（96）
達し帳写
元治二年丑正月二十七日　鑓師　勝田武平
右の者義、鑓師、扨又、塗師御用聞き仰せ付けられ候に付き、当年始自余御用聞き同様御目渡され、仰せ付けられ下され度、筋々を以て、願い出候段、御耳に達し候処、願い通り仰せ付けられ、別条筋々相達せらるべく候、以上
丑正月　御目付　松本藤右衛門

【65】外左衛門を御用聞き
慶応元年（一八六五）八月一日（96）
一、青木町住居外左衛門と申す者、鍛冶屋職の由にて、御用聞き願い出の末、達し帳相成り候に付き、今日役内立会にて、願いの如く仰せ付けられ候段、相達し相成り候事

【66】大坪勝之進を御用聞き
慶応元年（一八六五）十二月七日（96）
一、研師大坪勝之進儀、今般御用聞き仰せ付けられ候段、左達しこれ有り候に付き、御台所列席致し候事

【67】副嶋伊平へ石火矢見積り
慶応二年（一八六六）九月四日（97）
口達
今般御私領浦手（98）御台場御備え付けの御銃鉄玉御鋳立て相成り候由にて、右制作方仰せ付けられ候に付き、一々積書を以て相達すべき旨、御達し承り、重畳有難き存じ奉り候、就いては、此節柄成丈御弁利相成り候通り、差し働き候はて相叶わざるに付き、極々引き詰、右積書の義、別紙を以て御達し仕り置き候通りに御座候、惣じて、私義前方存じ懸け御座無く、昇進をも仰せ付けられ、年来御重恩を承り、御蔭に□形相続き罷り在り候に付きては、似合いの御恩報、露程成程申し上げ度、憚りながら兼ねて御道筋差し含め罷り在り候え共、時節柄彼是にて昨日を送り、其儀も不届き合

右の者儀、前辺より武器類金具師職相営み罷り在り候由の処、当節御用細工は勿論御家中よりの頼み品気懸け能く、細工方別して宜しく出来仕り、御上下の御為とも相成り候由、相聞き候、就いては、以後御勤めとして、書き載せの通り、拝領なさられ方にては、御座有る間敷哉

【56】栄左衛門への褒美
文久三年（一八六三）六月七日（89）
口方米五斗　龍蔵弟　金具師　栄左衛門
右の者儀、前辺より兄龍蔵共々武器類金具職相営み罷り在り候由の処、細工方気懸け能く差し部り候由、相聞き候、就いては、以後御勤めとして、今般書き載せの通り、拝領なさられ方にては、御座有る間敷哉

【57】丈一への褒美
文久三年（一八六三）十一月三日（90）
一、呉服町（91）住居鞘師丈一儀、今度御屋敷御用聞き仰せ付けられ下され度、筋々願い出候に付き、御耳に達し候処、願い通り仰せ出でられ候に付き、筋々相達し相成り候通り、相計らい候事

【58】鶴作への褒美
文久三年（一八六三）十一月三日（90）
一、柳町（92）住居彫物師鶴作儀、今度御屋敷御用聞き仰せ付けられ度、前条同断

【59】宮崎源太への褒美
文久三年（一八六三）十二月二十八日（84）
代々外平侍　鎧師　宮崎源太
右者儀、前方佐嘉鎧師へ製作方稽古、仰せ付けられ候処、随分熟練致し引き取り候に付き、一代外平侍仰せ付けられ置き候、然る末、御武器製作、偖又、足軽具足打ち立て其外仰せ付けられ候処、其時々気懸け能く相整え、別して、出来立て御家中の鎧等も数多打ち立て居り、当節、就中専要の業柄最早数十年御上下の御用弁とも相成り候に付きては、猶又以後の御為筋とも相成り、申すべく、今般書き載せの通り、御褒美仰せ付けられ方にては、御座有る間敷哉、前条同断

【60】野田銀作への褒美
文久三年（一八六三）十二月二十八日（84）
一代一人御扶持　藤繁之尉被官　矢上鍔師　野中銀作（ママ）
右の者儀、若年の砌より家伝の細工方、心厚く遂げ、江戸表へも十ヶ年余り登り、打ち部り、稽古致し、年来居村において細工罷り在り、其内上御道具を始め、長崎御奉行、其外、他所よりの頼み品、毎々打ち立て、別して、宜敷出来立て、他郡へも矢上細工と申す儀、相聞き居り候の由、然る処、最早七十歳罷り成り、相替わらず細工相整え居り、折節年輩の実子罷り在り、折角稽古半ばの由に付きては、往々怠転及ばず通り、御取り立て置かられ候はて、叶わざる儀に候えば、前断御用細工を始め御家中の為筋をも気懸け能く、弁達致し候に付き、自余見合いを以て、今般御褒美として、書き載せの通り、拝領なさられ、忰義も細工方精々取り立て候通り、仰せ付けられ方にては、御座有る間敷哉、前条同断

【61】境繁之助の鍛冶小屋へ諫早領主見学
元治元年（一八六四）五月十九日（93）
一、檀那様（94）御事、境繁之助へ刀剣数打ち仰せ付けられ置き候に付き、右地鍛御覧として四時比より厘外屋ヶ代（88）御出で七ツ時比、御帰り遊ばされ候事

【52】副嶋伊平・副嶋藤次郎の人改め延引願い
文久三年（一八六三）四月十九日（85）
一、副嶋伊平儀、大銃製造方に付きて、舎弟藤次郎其外召し連れ諫早罷り下り候処、今般人御改めに付き、罷り登り候段、申し達し候由、然る処、当時長崎表異船方不容易都合に付き、罷り登り候通りにては、差し支え候付き、余儀無く病の姿に相成り候外これ有る間敷、諫早より申し来たりに付き、左の通り、田川瀧四郎町方持ち出し、これを相達し候事

口達

御当地長瀬町（70）住居家来副嶋伊平儀、自分大銃製方申し付け、弟藤次郎其外、扨又、番子同町夘吉其外左の通り雇入れ、先達てより在所罷り越し居り、当時異国船方不容易都合に付き、一刻も急に成就相整え候はて相叶わず候付き、精々差し部り細工半ばに御座候、然る処、今般人別御改めに付き、早速罷り帰り候様、宿元々々より申し越しに付きては、則帰宅致し候はば、叶わず儀御座候え共、頃日より何れも持病の疝癪、或いは、風邪等散々相煩い何分急に罷り登り候儀、相叶わず候、就いては、近来恐れ入り奉り候え共、今替り候処、相猶予仰せ付けられ下され候道は、御座有る間敷哉、願い奉り呉候様、申し達し候旨、申し越し候、右は当時此方雇い中の儀に付き、御達し仕り候条、前断の事、情け御聞き啓きなされ、何卒願い通り仰せ付けられ下され度、此段御達し仕り候

副嶋伊平
同弟藤次郎
同弟太一
同娘志け

右娘志けには、未だ別して幼年にて、母親罷り在らざる候に付き、与儀無く連れ下り居り候由

番子
長瀬町
夘吉
多吉
半三郎
以上

亥四月　御名内　高柳文右衛門

【53】北嶋駒吉への褒美
文久三年（一八六三）六月七日（89）
一人御扶持　主税殿召仕当時御雇　研師　北嶋駒吉

右の者儀、前方より研師内職相営み罷り在り候処、一体相応の人柄に付き、長崎御仕組召し加えられ、立前にも仰せ付けられ置き候処、当時異船方不容易折柄御家中以下々々迄刀剣類相頼み、其時々気懸け能く尖出来候由相聞き候、就いては、以後御勤めとして今般書き載せの通り、拝領なさられ方にては御座有る間敷哉

【54】毎熊次郎右衛門の嫡子、毎熊徳之丞への褒美
文久三年（一八六三）六月七日（89）
一人御扶持　山足軽　毎熊次郎右衛門子　鑓師　毎熊徳之丞

右の者儀、親次郎右衛門鑓師職相営み、御用細工等仰せ付けられ来たり候、手続きを以て、両三年以前久留米随身等仕り候処、大分熟達致し、当時にては親共々職業差し部り大分細工方宜しく尖に出来立て御上下の御為とも相成り候付きては、何れと歟仰せ付けられ方にては、御座有る間敷哉、長崎御仕組方（59）より達し出候付きては、以後お勤めとして書き載せの通り、拝領なさられ方にては御座有る間敷哉

【55】龍蔵への褒美
文久三年（一八六三）六月七日（89）
口方米一石八斗　金具師　龍蔵

通り、仰せ付けらるとこれ有り、右は刀計り百本にてこれ有るべく哉、且つ、寸尺等御注文の次第等は御座有る間敷哉、右等の処、今一往御吟味合わされ、旁の書、委曲急速に御申し越さらるべく儀、御座候、以上

口達

私儀、刀鍛冶家柄の訳を以て、佐嘉表忠吉へ数年随身仰せ付けられ、精々稽古罷り在り候処、数打ち仰せ付けられ、下され度、師家橋本百太郎より願い奉り候末、今般刀百本丈数打ち仰せ付けらるの旨、御達し蒙り、重畳有難き仕合せ冥加至極存じ奉り候、就いては、此節皆伝に付き、別段火床相立て、打ち立て候通り仕度御座候処、従来支え者にて聢迚も御座無く、工料丈にても何分自力に任せざる候に付き、当時の御半ば、近来、恐れ入り奉り候え共、左の通り、願い奉り候、

一、鍛冶屋　一軒

但し、二間に四間瓦葺き、前庇波へ一間半の下屋付き

右は、御下屋敷内・厘外波戸場内間御新建て細工相整え候通り、仰せ付けられ、下され度、惣じては、諫早において相整え候儀、本意に御座候え共、其通りにては、師家申し請け、且つ又、番子雇い入れ方等遠方懸々何分不届き合い、不弁利の次第これ有り候に付き、前断の通り、佐嘉表において、相整え候通り、仰せ付けられ、下され度

一、大銃床　一丁
　代金十両
一、小同　一丁
　同六両
一、大槌　十一丁
　同五両
一、大挟　二十丁
　同三両
一、小槌　三丁
　同一両
一、吹子　二丁
　同四両
一、水舟研石洗台其外小道具
　代金八両

右細工道具、御新製拝借差し出さられ、下され度

一、刀　一本打ち立て
　正銀三百一匁
一、脇差　一本打ち立て
　同百八十匁六分

右、忠吉御役方納め、御定め値段御座候え共、此節は稽古打ちの儀に付き、能く々々内慮にして、左の通りにて打ち立て相納め申すべくと存じ奉り候、

一、刀　一本
　正銀二百五十匁
一、脇差　一本
　同百十九匁
一、正金七十両

右は、刀金、偖又、炭の儀、筑前表より早速買入の手筈相付け候はて、相叶わざる候に付き、工料の内より先ず以て、急に御下銀下しなさられ度、残金の儀は、追って、曽々相渡され、下され度、右の廉々願い奉り候、然るにおいては、御蔭精気の限り差し部り、念を入れ打ち立て、夫々相納め申すべくと御重恩の程、重畳有難き存じ奉り候条、当時諸色高値彼是の事実等幾重にも聞き召しなさられ、啓く何卒願い通り、仰せ付けられ、下され候様、宜しく御相達し、深々御頼み仕り候、以上

亥三月　境　繁之助

一、白米三石六斗　江戸
外に遠国候に付きては、道中旅籠料、金三両づつ、尤も往来日数六十日にして
一、同二石四斗づつ　肥後・久留米
〆る

【49】保一へ褒美
万延元年（一八六〇）十二月二十五日（83）
一、左の通り、相達し候事
研師　保一
右の者儀、年来研ぎ師職相営み一体気懸け能く、念を入れ精、諸人の為共相成り候趣き、相聞き候、これに依り、毎歳口方米三石六斗拝領なさられ候
万延元年十月

【50】馬場善右衛門への褒美
文久三年（一八六三）二月五日（84）
一、馬場善右衛門義、鉄炮細工上達に付きて、前方一代昇進仰せ付けられ置き候処、数十年堅固に相勤め候付き、今般御褒美として、代々外御目見平侍召しなさられの旨、仰せ出でられ候、同断

【51】境繁之助、佐賀での鍛冶小屋建設と刀注文
文久三年（一八六三）三月十七日（85）
一、刀鍛冶境繁之助伊予掾末孫儀、師家橋本百太郎（86）より忠吉願いに依り数打ち仰せ付けられ候処、従来支え者にて、自力に任せざる候に付き、細工道具代銀拝借、拝借願で候に付き、諫早において吟味否申し来たり候様、左の通り、これを申し越し候事
貴札拝見致し候、境繁之助儀、数打ち仰せ付けられ度、師家橋本百太郎より旧冬願い出候末、其許において吟味相成り候様、申し越し相成り居り候末、尚御打ち込み御吟味合いられ、当時の御半ばに付き、刀百本打ち立て候通り、仰せ付けられ方にては、これ有る間敷哉、御耳に達せられ候処、其通り仰せ出でられ候条、相達し控そ候様、其外委曲御懸け合いの趣き、承知致し、即繁之助相達し候処、重畳有難き仕合せ存じ奉り候、就いては、此節皆伝の儀に付き、何れ別段火床相立て打ち立て候通り仕度候処、従来支え者にて聢迚もこれ無く、工料丈にては、何分自力に任せざる候付き、下御屋敷（87）内・厘外波戸場（88）内間へ鍛冶屋一軒御新建、且つ又、細工道具一式御新製拝借差し出さられ下され度、其外委細別紙の通り、願い出、一体余儀無く相聞き候に付き、右別紙差し越し申し候、尤も、右の内細工場所の儀、両下御屋敷内へは細工小屋等相建て候空地これ無く、就いては、厘外波戸場御米蔵と雑物小屋間より東に懸け、大分の空地これ有り、勝手も宜しき場所に付きては、右の場所へ鍛冶屋相建て細工相整え、左候て、繁之助には御長屋の方、差し支えざる場所を少々仕切り、相棲み居り候通り、仰せ付けられ方にては、御座有る間敷哉、旁其許において、請役方御打ち込みられ、尚又、御吟味の上、御耳に達せられ、仰せ出でられの否、聊か御延引無く、御申し越されべく儀御座候、此段、御再答として、斯くの如くに御座候、恐惶謹言
三月十七日　高柳文右衛門
枚野助右衛門様
中島弥七左衛門様
弥永三右衛門様
追って、本文当時の御半ばに付きては、一刻も急に細工取り懸り候通り、これ無きて相叶う間敷に付き、廉々願い通り仰せ付けられ候節は、細工道具新製金並びに刀金其外買入用前後勤の儀、早速上銀相成り候様、且つ、細工小屋の儀、其許において、代組に相成るべく哉、又は、此御方において代組建て方に相成り候通り、仰せ付けらるべく哉、将又、本行御懸け合いには、刀百本打ち立て候

には御座候え共、似合いの業柄に付き、ボートホー井ツスル一挺丈献上仕度願い奉り候、其通り仰せ付けられ、下さるにおいては、年来の志願相達し、深重有難き存じ奉り候丈、御支え御座無く候はば、何卒願い通り仰せ付けられ、下され候様、何分宜しく執成、下しなさられ度、深々頼み上げ奉り候、以上

辰八月　副嶋源助

【46】馬場善右衛門への蘭筒代金支払い

安政五年（一八五八）八月六日（80）

一、御火術稽古用蘭筒五挺、馬場善右衛門へ製作仰せ付けられ候処、右は稽古用の儀に付きては、□筒其外一体念を入れ候はば、仕揚げ方等は、極上にこれ無き共、然るべき旨、其外、御側において、吟味の次第打ち合い来たり候に付き、一体同意に相談じ、左の通り、返報差し出し候事

御答え拝見致し候、馬場善右衛門へ製作仰せ付けられ候御火術稽古用蘭筒の儀、一体銃筒其外念を入れ打ち立て仕揚げ方等は、極上にこれ無き共、然るべきに付き、其楯とにて積り方に、相成り候通り、相計られ候処、中仕揚げに〆一挺に付き、代金五両一歩、其次同五両迄製作仰せ付けられ候はば、一体念を入れ、成丈色々出来揚げ候通り、仕るべく由、右積り書歩差し出し相成り候由、右は前断の通り、専ら稽古用の儀に付きては、一体跡の儀副え、これ無き候えば、随分下値の方、然るべきと相談じ候条、爰元においても尚吟味合い、否一刻も急に申し越し候様、其外別紙積り書相副え、頃日繁之尉殿迄申し越され置き、委細承知致し候、右は、其御方にて相談じられ候通り、稽古用の儀に付きては、□筒其外丈夫副え、これ有り候えば、下値の方にて、然るべく、御同意相談じ申し候、尤も、地金代前□願いの儀、其筋差し廻し置き、此節迄間に合い申さずに付き、後便より仕登り候通り、相叶うべく候条、旁、左様御承知、一刻も急に出来立て候通り、分けて相計らいなさらるべく候、此段御再答として、斯くの如くに御座候、恐惶謹言

八月六日　田中傳左衛門

早田三左衛門

寺田繁之尉様

高柳衛門様

枚野助右衛門様

【47】如玄への鍔見積り

安政五年（一八五八）十一月二十八日（81）

一、紀伊守様（82）より矢上細工御注文積り書、左の通り覚

鉄の御縁頭御大小分

細工料三両二歩

御小尻大の方は、一文字にして　御大小分

小の方は、持□頭にして

細工料一両三歩

十一月二十八日　鍔師　如玄

【48】岸川武七・山口廣治・北嶋駒吉の江戸への修行

安政七年（一八六〇）七月二十四日（83）

一、研鞘師其外、御取立として、江戸其外へ随身稽古差し越さられ方にては、御座有る間敷哉、右御当弁の儀、随身場所遠近より、左に書き載せの通り

大小目□其外三ヶ年　岸川内蔵之允弟

江戸　岸川武七

柄鞘師三ヶ年　高柳文右衛門与山口力蔵太世忰

江戸　山口廣次

鞘師三ヶ年　宮内殿召仕い

江戸　北嶋駒吉

して年に米六石充と申す歟、三ヶ年の間、差し出され、下され、道は御座有る間敷哉、歎願奉り候、其通り仰せ付けられ、下さるにおいては、御蔭に猶又、出精昇達次第には、家伝連続仕り申すべくと御重恩、猶更、有難き存じ奉り候条、前文の事情聞きなさられ、召し啓き、何とぞ、御慈恵の御吟味下しなさられ、願いの通り、差し出さられ、下さる様、旁、願い奉り候条、宜しく御相達し下さるべく義、深々御頼み仕り候、以上

卯十二月　境　左源太

【45】副嶋源助・副嶋伊平の召し抱え

安政三年（一八五六）十月四日（79）

一、佐嘉在り、御歩行副嶋利十悴源助、孫伊平儀、親子共一代外平侍、御引上げられ方にては、御座有る間敷哉、請役方より左の通り、書き上げを以て伺い来たり、御耳に達し候処、志摩様へも御打ち合いられ、伺い通り、仰せ出でられ候に付き、其段これを申し越し候事

御歩行　副嶋源助
副嶋伊平

此通り

右の者共儀、前方より鋳物職営み来たり御用筋は勿論、御家中稽古筒新製其外、気懸け能く差し働き、嫡子伊平儀も同様鋳法方其外細工方至極宜しく、当時佐嘉表にも右様の細工人、手少なくこれ有る趣きに候、右に付き、去る丑年御石火矢御新製の節も、右の者共へ鋳法仰せ付けられ、其砌も両流稽古筒等数丁相頼み大儀致し居り、就中、御拝領御石火矢台製作に付きて、金物一通り製作仰せ付けられ、至って気懸け能く差し働き、別して、御用弁致し居り、然る処、御火術稽古用和蘭新製、扨又アメリカ新製、束ねて二丁御新製相成り候はで、大炮手前のみにては、現業の稽古出来申さず、殊に当節、分けて御勧めにも相成る儀候処、稽古人等も一円振るい立ち申さず、右は専ら現業の稽古出来申さず処より右の次第に付きては、急に御新製相成り度、稽古方より達し出で候、惣じて近年異船方其外諸般大御物入の御半ばには、御座候え共、御火術の儀は、就中、専要の業柄にて、自余に相置からざる儀候えば、稽古方差し支え候通りにては、相済まず、余儀無く、御新製相成り候はて、相叶う間敷、吟味合い候、然る処、源助儀御拝領御石火矢方にて、爰元御呼び下り相成り居り候処、右の都合内々承知致し、自然、御新製相成り候はば、御重恩の末付き、露程成共、御奉公申し上げ度候間、自身へ製作仰せ付けられ、下され度、然る節は、御支え所御座無く候はば、御新製相成り候御筒の内、一丁自分に鋳立て献上仕度、別紙を以て願い出、訴面分けての志願、付きては、各別御故障所も御座有る間敷に付き、願い通り仰せ付けられ方にては、御座有る間敷哉、尤も、同人儀別條の通り、数年来御用気懸け能く差し働き、別して、大儀致し、第一当節専要の品柄、自分に鋳立て、献上申し上ぐ儀、打ち離れざる費も相立ち候処、彼者式殊紛れの至りに付き、前断旁の訳を以て、相賞され、今般御褒美として父子共一代外平侍御引上げられ方にては、御座有る間敷哉、前例を以て、長崎御仕組方（59）共打ち込み、吟味仕り候、此段御意請け候

辰八月
演達

某儀、弁えず無調法者に御座候処、先年来より御用細工等仰せ付けられ、御蔭に形の如く相続き罷り在り、重畳有難き仕合せ存じ奉り候、付きては、露程成共御重恩□奉り度、千万存じ奉り候え共、御存知遊ばされ候通り、不束の某何分にも力を任せざるに是迄夫れのみ案痛罷り在り候処、此節西洋銃御筒ボートー井ツスル○ランケホー井ツフル御鋳立てに相成り候由にて、右積り書差し出し候様、仰せ達せられ、是又重畳有難き仕合せ存じ奉り候、右は、定めて、御鋳立て相なるべく存じ奉り候に付き、地行難渋の儀

最前より相達し置き候、手覚の儀は、取戻し相成り候事

【43】長崎警備後の佐賀本藩への刀等返却

嘉永7年（一八五四）十月十七日（72）

一、番大小其外古賀牛之助持ち出し諸整え方、藤瀬五左衛門へ左の通り手覚書を以て、相達し候事

手覚

前方高来郡請け持ち中、長崎御番（75）代の節、従者用番大小其外相渡され置き候に付き、右品々返納仕り候様、御達しの趣き、承知仕り、在所申し越し、段々穿鑿に及び候処、下町（76）町宿継別当七郎次より相納め候品々、左に

一、刀　十本
一、脇差　八本
一、看板はおり　十着
一、平看板　御着
一、合羽　二枚

右の通り、品物相副え、此段御達し仕り候、以上

寅十月　益千代内　木下傳之進

【44】境左源太の嫡子境繫之助、橋本新左衛門へ修行

安政三年（一八五六）七月十一日（77）

一、境左源太世忰繫之助儀、御城下忠吉橋本新左衛門（78）へ、去る寅年より二ヶ年の間随身、去る暮迄満年に相成り候え共、業柄纔の年数にては、習熟致し兼ね候に付き、今又当年より向こう三ヶ年の間、随身御暇願い奉り、一際差し部り候はば、奥義・口伝をも致すべき旨、師家よりも申し聞き候由に候え共、地行貧窮者にて何分□続き相叶わずに付き、稽古として数年に米六石充三ヶ年の間差し出さられ、下され度、左の通り、願い出候に付き、吟味所差し廻し置き候処、当時柄何分其通り吟味相付け難く、去りながら、稽古方余儀無く相聞き候に付き、願いの内一ヶ年に米一石八斗充拝領なさられ方にてこれ有る間敷哉、達し出で候に付き、其通り仰せ付けられの旨、相達し候事

付けたり、本文諸筋へは、達し帳を以て、相達し候事

口達

私家の儀、先祖伊予掾より刀鍛冶にて是迄代々伝来仕り在り難き仕合せ冥加至極存じ奉り候、右に付きては、右職連続仕り候はて、叶わず義全く失却仕らざる候え共、私義最早六十余才罷り成り老体共にて、存じ通り、細工方出来申さず残念千万存じ奉り候、これに依り、世忰繫之助儀、年倍にも罷り成り、稽古方一図に差し部り、責めては、御奉公の端共罷り成り度、志願に御座候処、貧窮者にて、宿許にての稽古存じ分届き合い申さず残念千万存じ奉り候、然る処、御城下忠吉橋本新左衛門儀、当時名誉の人にて御用御刀其外手広く細工方繁昌の趣きに付き、右人へ随身稽古致し為し候はば、追々とは昇達をも仕るべく相心得繫之助儀、右新左衛門へ随身差し遣わし度、去る寅年より向き二ヶ年の間、御暇願い奉り候処、願いの通り差し免され、有難き存じ奉り候、御蔭に是迄心切に預り取り立て折角打ち立て方等稽古半ばに御座候処、当暮迄満年相成る業柄纔の年数にて習熟致し兼ね残念の仕合御座候、然る処、今両三年打ち追い差し部られ候はば、追々とは奥儀・口伝をも致すべくと師家よりも分けて申し聞かされ、私罷り成り候ても、忝仕合せに付き、難渋ながら、今一際粉骨砕身、仕りたる度、存じ奉り候、これに依り、明辰年より向き三ヶ年の間、今又随身御暇差し免され、下され度、其筋願い奉り置き候え共、委細前に申し上げ候通り貧窮者にて御座候処、是迄自格護にての随身中何門不行届き儀のみこれ有り、地行の上、彼是と差し支え存じ通り、相運び兼ね去り迚厚き心切の取り立てに預かり罷り在り候儀、不届き合い経て、引き取りとして候ては、是非無き儀に付き、当御時節柄近来是式願い奉り候通り、恐怖至極存じ奉り候え共、随身中稽古料と

嘉永六年（一八五三）五月二十三日（66）
一、今度新製の一〆五百目御石火矢、今日石坂山（67）において鋳砲これ有り候事

【40】副嶋源助への褒美
嘉永六年（一八五三）二月二十一日（68）
一、昼四つ比より築地石火矢制作方御覧のため、御出で遊ばされ、其末天祐寺（69）御立寄り遊ばされ、御弁当召し上がられ、晩七つ半比御帰り遊ばされ候
一、前断に付き、天祐寺へ御茶礼として金子五十疋差し遣わされ、扨又永瀬町（70）住居の御歩行副嶋源助鋳物師職にて右鋳物仕方部る故、御出での節、彼是心遣い等申し上げ、且つ、御内々御菓子等奉献御供中にも酒食等手配仕り候付き、右御出に付き大儀の訳を以て御内々金子百疋、拝領なさられ候事

【41】佐賀藩諫早家鋳造の新製造石火矢名前
嘉永六年（一八五三）五月一日（71）
一、追々御新製相成り候、一貫五百目御炮名、本多郁助へ仰せ付けられ候通り、相計り候処、左の通り相達し候、右の内、主静炮に仰せ付けられ方にては、御座有る間敷哉、諫早より伺い来たり、其通り仰せ出でられ候に付き，端書返報に及び候事
御炮名
伏龍炮
緋将軍
無敵炮
不住雷
主静炮
降天聲

【42】谷口安左衛門の住居
嘉永七年（一八五四）八月十日（72）
一、職人谷口安兵衛と申す者帳入り向き其外取調子否相達すべき旨、先達て以来評定所より相達せられ諫早申し越し置き候処、否申し来たり候に付き、手覚左の通り、評定所へ田中弥右衛門持ち出し深江助右衛門殿へ相達し置き候由の事
手覚
職人谷口安兵衛と申す者、当時御調子中候処、諫早帳内には候へ共、親共には、八戸宿（73）罷り在り候に付き、右の処へ暫く罷り在り、何村何某帳内と申す処相覚えざる旨、申し出候に付き、何某帳内候哉、急速取調子否相達すべき旨御達しの趣き承知仕り候、則在所申し越し候処、一代山足軽鋳物師亡谷口太右衛門と申す者存命中八戸宿罷り在り候、竹次郎と申す者を前方養子罷り在り候由の処、右太右衛門儀、去る申年死亡に及び候に付き、竹次郎儀親太右衛門同様鋳物師一代山足軽申し付け、当時谷口安右衛門と改名仕り居り候旨、其筋より達し出候段、申し越し候、此段御達し仕り候、以上
寅八月　益千代内　枚野助右衛門
嘉永七年（一八五四）八月三十日（72）
一、評定所へ手覚左の通り、梅崎多平次持ち出し相達し候事
手覚
一、山足軽谷口安左衛門帳入り向き、居所相達し候様御達しの趣き承知仕り、則在所申し越し候処、私領船越村（74）帳内にて、同村住居罷り在り候由、申し越し候、此段御達し仕り候、以上
寅八月　御名内　高柳文右衛門
右安左衛門儀、根元居所本文の通りに候え共、当時御用御石火矢鋳方に付き、諫早の儀は家屋敷売り払い、御領へ家内引越罷り在り候に付き、段々其次第相達し相成り候処、其通りにては、何分承知これ無きに付き、望に従って、右本文の通り、認め置き相達し、

に的矢抔大体に相拵え候趣きに付き、弓矢師稽古存じ立て申す間敷哉、稽古方より談合仕り候処、二男にて罷り在り、何の御用にも相立たざるに付き、也べくにも細工仕習い候はば、御用の端にも相成り候訳に付き、何やらの細工事共訳相違候に付きては、存じ立て見申すべく由に付き、佐嘉弓矢師へ弟子付き相談じ仕り候え共、□□細工故弟子取致さず由にて、相断り、然る処、其折長府弓矢師原田与左衛門と申す者罷り出で候に付き、御軍弓仕立て其外稽古方より相頼み一両年爰元罷り越し候に付き、右与左衛門へ弟子付き相談じ仕り候処、段々細工方御恩も御座候に付き、自身丈取り立て□申すべく如実に申し聞き候に付き、即より弟子入り、爰元にても直に細工手伝い等仕り、追々彼地罷り越し三ヶ年の間稽古仕り、下地気量にはこれ有り、一通り熟達仕り、伝法等悉く相済み罷り下り候、其後稽古方弓矢細工致しなし候処、結構えに出来立て候、惣じて、他郡の儀にて稽古中存じ外の物入り等致し難渋共相成り居り候由、去る迚は、此御方にては、弓矢細工も纔の事にて、右利益等を以て相続け仕り候通りにては、御座無き儀は、最前より相見居り候義御座候え共、専ら御用の端とも相成るべく義を達し存じ稽古仕り候義に付きては、何共御恵の御吟味成し下され候、道は御座有る間敷哉、然るにおいては、是迄は久山村罷り在り候え共、爰元出浮仕り候はば、御用細工を始め稽古方の弁利も宜敷御座有るべく、存じ奉り候え共、前断の訳筋、聞き召され、啓く宜敷御評議成し下され度、此段御達し致し候、以上

申十二月　枚野助右衛門
　　真崎次郎次

【37】谷口太右衛門嫡子、谷口竹次郎を召し抱え

嘉永元年（一八四八）十二月二十三日（64）

一、請役方より左の通り伺い来たり、御耳に達し候処、伺い通り仰せ付けられの旨、仰せ出でられ候事

鋳物師山足軽谷口太右衛門儀、最早極老罷り成、御用相勤めざるに付き、子竹次郎と申す者、前方佐嘉鋳物師谷口弥右衛門へ弟子付き仕り、細工方も相応に相整い、伝授をも仕り罷り在り、殊に一体篤実正路の者に付きては、何れ共、御取立置かられ候通り、御座有り度、御石火矢方より委曲別紙を以て、相達し候旨、長崎御仕組方（59）より達し出で候、これに依り、細工方扨又、人柄等の儀、尚又其筋聞き合い候通り、相計り置き候内、太右衛門にも病気差し発し、先般死亡に及び候、然る処、右竹次郎儀、一〆目位迄の石火矢鋳立て方の儀、前方伝授罷り在り、随分一手にて鋳方出来致し、一体細工方巧者にて、相応の者の由、相聞き候段、御目付方より相達し候、総じて、鋳物師の儀、長崎御仕組筋砲術方専要の業柄に付きては、亡太右衛門、畢竟、一代山足軽召し出され、御切米五斗拝領され方にては、御座有る間敷哉、吟味仕り候、此段、御意請け候

申十二月

【38】指山安右衛門の相続

嘉永六年（一八五三）三月十二日（65）

一、中町住居罷り在り候、指山安右衛門と申す者、弓並び弾細工相整え罷り在り候処、亡父指山庄兵衛と申すは、此御方御被官候処、幼少の砌両親に相離れ家筋の儀、相心得ず、打ち過ぎ罷り在り候処、昨今承知仕り候に付き、指山家相続き仰せ付けられ、下され度、委曲願い出候、これに依り、人柄其外聞き合い候通り、相計り候処、弥庄兵衛伴にて、別して、宜しき者の由相達し候、就いては、願いの如く指山家相続き仰せ付けられ方にては、御座有る間敷哉、伺い奉り候処、其通り仰せ出でられ候に付き、其筋より相達し相成り候通り、これを相計らい候事

【39】佐賀藩諫早領内で、石火矢鋳造

下目付中
上馬場　大工　園吉
右の者儀、鎗拵え方稽古罷り在り、細工相応にこれ有り候趣き、御聴達し候、これに依り、今般一代山足軽召しなされ、御切米五斗拝領なさられ候
天保十三年五月

【33】毎熊園吉の諫早家組入
天保十三年（一八四二）(60)
鑓師　毎熊園吉
此通り
右の者儀、今般一代山足軽召し出され候、付きては、木塚小平太与に相加え方にては、御座有る間敷哉、長崎御仕組方(59)打ち込み吟味仕り候、此段、御意請け候
寅六月二十六日

【34】勝太郎の献上刀、千綿栄作研ぎ
弘化四年（一八四七）四月七日(61)
一、上ノ馬場(58)住居罷り在り候勝太郎と申す者、刀剣類打ち方稽古罷り在り候処、此節短刀一本打ち立て候に付き、御内々献上仕度、偖又、御歩行千綿栄作儀、刀剣類研方稽古罷り在り候に付き、前断勝太郎献上の短刀研き立て献上仕度委細人々より書付を以て願い出候段、品物をも差し越し来たり、御耳に達し候処、何れも請けなさられの旨、仰せ出でられ候、右に付き人々相達し相成り候様、諫早申し越し、品物をも今又差し下し候事

【35】毎熊次郎右衛門の駕籠蝿払い献上
弘化四年（一八四七）六月九日(62)
一、鎗師毎熊次郎右衛門、前方右職方に付きて、山足軽に召し出され色々細工方等仰せ付けられ来たり候処、此節御駕籠蝿払い作り立ての積り方仰せ付けられ候処、右献上仕度旨、委細左の願い出候に付き、伺い達し候処、請けなさられの旨、仰せ出でられ候段、申し来たり候に付き、其段相達し候事

【36】村山栄蔵の召し抱え
嘉永元年（一八四八）十二月二十六日(63)
書上げ
一代外平侍　御扶持米三石　村山丈之進二男　村山栄蔵
右者儀、物事器用にこれ有り、的矢等如形細工仕り候に付き、弓矢師稽古仕り間敷哉、弓術稽古方より相勤め、折節、其比長府弓矢師原田与左衛門と申す者、当地罷り越し居り候に付き、右栄蔵を弟子に取り立て呉度相談仕り候末、即より弟子付き仕り、追々彼地罷り越し三ヶ年の間稽古仕り候処、生来の器量にて一通り熟達仕り、伝法等皆伝相済まし、罷り下り、其後稽古方弓矢等細工仕りたる候処、結構えに拵え方出来仕り候由に付き、何れ共仰せ付けられ下され、参道は御座有り間敷哉、委細別紙口達書の通り、枚野助右衛門其外より願い出一体尤もに相聞き、総じて、此御方の儀、鎧師其外段々御取立て置かられ候え共、是迄弓矢師罷り在らず、御仕組向き右職相欠け居り訳もこれ有り、幸い前断の通りに付きては、御軍用専一の業柄、御取立て、置かられ候通り、御座無き候て、相叶わざる筋に付き、今般書き載せの通り召し出され方にては御座有る間敷哉、吟味仕り候、此段御意請け候
申十二月
口上
此御方の儀、弓矢師罷り在らず、稽古弓矢拵え方の儀、佐嘉其外相頼み、就中纔の修理体の儀、懸かり懸かりにては、不届き合い、稽古方甚だ差し仕え、第一は御仕組向き右職相欠け居り候訳も御座候処、折節村山丈之進二男栄蔵儀、物毎細考えにこれ有り、自ら已

方随身仰せ付けられ、罷り出で候事

【31】野田銀作の嫡子、野田長之助の召し抱え

天保十年（一八三九）七月十六日（56）

一、矢上罷り在り候鍔細工人亡野田銀作儀、御用細工をも仰せ付けられ候訳を以て御扶持一石五斗拝領なさられ、一代徒士召し出され置き候、右子銀作にも相替わらず打ち追い御用細工仰せ付けられ候に付き、親代の通り、御扶持米一石五斗にて一代御徒士召し出さられの旨仰せ出でられ候段、御側より申し来たり候末、八月二十七日にこれを控える

天保十年（一八三九）八月二十七日（56）

一、矢上罷り在り候鍔師亡野田銀作御扶持拝領なさられ一代御歩行召し出さられ置かられ候処、当銀作にも御用細工等仰せ付けられ候に付き、同様召し出されの旨、御側より申し来たり候得共、右の者共兄弟罷り在り、銀作には弟にて、兄の儀長之助と申す者にて、御用細工をも致し来たり候に付きては、間違い等にてはこれ有り間敷哉、今一往申し越し相成り候様、御側懸け合い越し候処、矢張り長之助召し出され儀候処、名元分からずこれ有り、亡銀作跡目相続きの旨に付きて、当銀作の兄にてこれ有るべくと申す者にて、其懸け合い相成り候段、今又返答申し来たり候に付き、書付左に

矢上村鍔師　長之助

右の者儀、亡父銀作御用細工仰せ付け候に付き、一代御歩行召し出され置き候処、相易ず家業相営み候に付き、御用細工をも仰せ付けられ候処、一体相応これ有り、気懸け能く相勤め候、これに依り、今般御褒美として御扶持米一石五斗拝領なさられ、一代御歩行召し出さられ候

天保十年八月

【32】園吉の召し抱え

天保十三年（一八四二）五月十六日（57）

手覚

上ノ馬場（58）鎗師　園吉

右の者儀、鎗仕立て稽古のため、久留米鎗師数年罷り越し居り候処、一通り仕習い、相伝にても致し罷り帰り、彼の師匠方より付状、扨又、免状等相渡し候由にて、右書付け類持参、相達し委細聞き届け相成り居り候、これに依り、御家中の人々段々楠毛細工出来、殊に先達て、御長柄鎗虫付き、其外にて柄替え、偖又、修理■■■■■■■■■■■相納め候付き、尚又、小頭杖等鳶口付きにして、今度新たにすくり立て、右の者へ仰せ付けられ候処、是又、相応に拵え立て相納め候に付き、此向き迚も御用仰せ付けられ候者に付きてこれ有るべく、然る処、御仕組前諸職人出張仰せ付けられ候得共、鎗師罷り在らず、総じて刀鍛冶を始め、鉄砲師・鋳物師・鎧師・切革師等も相立て、置かられ候に付きては、鎗師の儀同様御仕組召し加えられ置く方にては、これ有る間敷哉、然るは、平人の儀に付き、鋳物師同様、御仕組召し加えられ置き、山足軽谷口多右衛門召し出され候、見合いを以て、山足軽に仰せ付けられ方にては、これ有る間敷哉、人柄等も兼ねて相応の趣き、相聞き候に付き、前断の通り、評議を遂げ候、猶又、御評議を遂げられ度存じ候、以上

寅三月　長崎御仕組方（59）

口上

上馬場罷り在り候園吉と申す者、鎗師細工方、且つ、人柄等の儀、何れの通りに候哉、承り合い候様、相達せられ、承り□候処、細工方の儀、数年稽古をも仕り候由にて、当時は相応の拵え出来仕り候由に御座候、且つ又、一体無事成る生質にて、大工小頭等申し付け相成り居り、相応の者の様相聞き申し候、此段、聞き合いの次第御達し仕り候

達し承知仕り候段、旁申し出で候由
一、右一件、御目付方よりも郡目付聞き合いとして、差し越し置かられ候由
一、四百目より上は、御上御届けもこれ無きて、叶わざる御定共にては、これ無き哉に相聞き候由
一、右筒密かに打ち立て、他邦へ持ち越し候義、其筋役人等存知これ無き事ながらも、大形共はこれ有る間敷哉に内々相咄し候半ばの由
一、右筒差し出され候様、相達しに相成り候義は、前断の通り、密かに打ち立て候を御買入れ相成り居り候に付き、右は、御取り揚げ共には相成り間敷哉、追って相分く申すべき由
一、右外にも相携え居り候者共はこれ有り間敷哉、相見え候由
一、右の通りに付き、申し口を以て、請役所相伺い候処、盗賊方においては、相調子られ候様、御差し図に相成り候由
一、右の次第に付きては、御自分方へ右与十相渡され候義、参り申すべく哉、尤も、請役所筋相達せられ候はば、御吟味次第の由、申し咄され候
右の通り、大園杢之丞殿より極内々相咄され候、此段御達し仕り候、以上
十二月十九日　内田正五郎

【27】蒲原宜助への褒美
文化十年（一八一三）五月二十三日（51）
一、宇都宮十郎左衛門与蒲原宜助、足軽具足五百両御修理仰せ付けられ置き候処、数年気懸け能く出精致し候処より、皆以て今般成就に相成り、太儀致し候に付き、御褒美として定銀二枚拝領なさられ候事

【28】野田銀作へ注文鍔
文化十三年（一八一六）二月二日（52）
一、旧年孫六郎様（53）より御頼み相成り居り候矢上鍔大小分出来立て、諫早において御聴達し、御状差し副えられ仕り、登り来たり候に付き、今日御使大野権右衛門を以て、深堀御屋敷へこれを遣わす
但し、右作は矢上罷り在り候足軽野田銀作と申す者にて、銘は肥州矢上住光廣と有り、但し、注文千疋馬木瓜形

【29】矢上鍔、佐賀本藩より注文
文政四年（一八二一）八月十二日（54）
一、今日御進物方より御用の旨に付き、北御門弥左衛門差し出し候処、矢上鍔御用これ有り候に付き、鍔師へ打ち立て仰せ付け候旨、別紙の通り、相達せられ候に付き、即諫早へ申し越し候事
覚
鍔大小六面
右は、当御参勤御用矢上鍔師へ打ち立て、仰せ付けられ候条、別紙図面の通り、相違無く念を入れ、早々打ち立て候様、其筋相達せられべく候、以上
巳八月
別紙図面副え、控え略す

【30】宮崎磯吉の修行
天保十年（一八三九）二月十一日（55）
一、此御方具足師の儀、死亡等にて当時相絶え居り、其通り差し置かられ候て相叶う間敷なさられ、旧臘御備立方より達し出での末、委敷諫早懸け合い越し置き候処、宮崎岩治弟磯吉当年二十五歳にて、下地金具細工等致し内々沙汰に相成り候処、不弁者にて、何分習熟出来申すべく哉候得共、成丈出精御用弁の端共相成り候通り、差し部べく達し出で候由にて、今度罷り登り候に付き、上具足師

右の通り、相達し、苗字願出候様相達し候処、谷口と相改め度、願出其通り仰せ付けられ候事
付けたり、与入の儀、小人数与調子合、枚野甚右衛門与に与付き、書上を以て、相伺い候事

【25】谷口与十の石火矢鋳造を諫早家見学
文化六年（一八〇九）三月二十一日（46）
一、今日は、御歩行谷口与十、一〆目唐金御石火矢、金屋久保（44）において、鋳立て仰せ付けられ候に付き、御二方様（47）・於菊様、御見物として御越し成られ候事

【26】谷口与十鋳造石火矢を長崎へ密売
文化八年（一八一一）三月二十六日（48）
御名徒士、居所諫早糸岐村（45）　徳右衛門帳内　谷口与十
右の者、神代下町（49）重七申し談じ、石火矢鋳立て、剰え密かに長崎差し越し、元古川町（50）利助相頼み、売り払うべくと御奉行所差し出し、殊に雑費の筋等差し支えの由にて、右利助へ質入致す不届き者に候へ共、今度万部御執行に付きて、差し免され候
右の通り、申し渡されべく候、以上
　未三月二十五日
右の通り、仰せ渡され候に付き、与十へ御自分より左の通り、役方より申し聞かせ候
　谷口与十
右の者、石火矢鋳立て、剰え密かに長崎差し越し、売り方の手筈致し候に付き、今般上より仰せ渡しの旨に付きては、向後何方より御用たり共、役方差し図無く、罷り出でざる様、将又、此節の一件畢竟不埒の処より評定所御呼出に相成り、御六ヶ敷にも及び候に付きては、自今以後右体の義これ無き通り、急度身分相慎み申すべく候、此旨、役方より申し聞かせ候、以上
此手覚、去年谷口与十評定所御用の時分、内田正五郎より内々聞き合い書付始末に付き、此所へ控え置き候事
　手覚え
一、佐嘉よりと申し、長崎御奉行所へ石火矢御調入共には、相成り間敷哉、彼地銅座の者、手筋を以て相伺い候処、右は当時の半ばに付きては、石火矢等は佐嘉表においても、御打ち立て半ばの趣き相聞き候、然るは、佐嘉表より売り方抔とこれ有る義は、如何の義に相見え候、自然、手筋悪敷事共にて、其筋の役人抔後日無調法等に相成り候ては、決して相叶わず、且つ、何某と申す者持ち越し居り候哉、尋ねに相成り候処、諫早谷口与十持ち越し居り候由、相達し候処、前文振り合いを以て御奉行所へは御入用これ無き趣き、返答相成り候由、品物不容易手筋に付き、右与十御捕らえに相成り、一篇御問合せ相成り候由の処、凡そ左の通り
一、三百目の筒二挺、御自分より鋳立て請負にして、仰せ付けられ候に付き、打ち立て候処、諸雑用過分の不足相立て候に付き、出増しの義段々相願い候処、漸く御聞き啓きに相成り、銭五十貫文歟出方相成り候得共何分にも釣合申さず、これに依り、四百目筒一挺鋳立売り方致し候はば、相応の利潤をもこれ有るべく、然るにおいては、右の三百目筒も堅固に打ち立て差し出でべく相心得え、四百目筒一挺密かに打ち立て長崎持ち越して手筋を以て御奉行所へ売り方相頼み候処、御買入れにも相成らず、殊に数日滞留等仕り、諸雑費五十貫文位入用これ有り何分凌道これ無きに付き、拠無く彼地へ右筒分入仕り、諸入用一通り相弁え罷り帰り候、然る末、田町（41）十兵衛と申す者、承りに付き、右筒所望致し度段、申し聞かせ候故、右は十兵衛等不用の品柄に付きては、何れの筋へも気当これ有る事にても候哉、相尋ね候処、所望致し候はば、御自分方へ何卒献上仕り候含めの趣き、申し咄し候に付き、銭七十貫文に十兵衛へ売り方致し候処、全く右の者買入にてこれ無く、御自分方より正銀一貫五百目に御買い揚げ相成り居り候趣き、跡

れ候処、出精仕り、旁に付き、今般御褒美として、今又御加米一石拝領なさられ、本知合わせ九石二斗の辻召しなさられの旨、仰せ出でられ候

文化五年辰閏六月

一、前条従者具足制作方懸り合い、真崎権右衛門其外へ左の通り、拝領なさられ候

一、金子百疋　真崎権右衛門

一、同三百疋　三輪了甫

一、青銅三百疋　御歩行通　渡邊源五兵衛

一、同三〆文　御仲間　盛助

一、諫早において、前条同様従者具足制作仰せ付けられ候に付き、左の通り、伺い来たり、書き載せの通り、仰せ付けられ候

此両人へは、正金二百疋づつにて拝領候

喜多貞九郎

野田瀧太弟　野田多守

右両人にて、胴二十五両・臑当五十足制作方仕り候に付き、定金五百疋充拝領なさられ方にては御座有る間敷哉

田町（41）清七

此通り

右の者、胴二十五両・小手二十五両分制作仕り候に付き、鳥目一〆文拝領なさられ方にては御座有る間敷哉

戸石村（42）多吉

此通り

右の者、小手二十五領分、外に千平笠六百九十枚制作に付き、前条同断

右の通り、吟味仕り候、以上

【23】佐賀藩諫早領内での石火矢鋳造

文化五年（一八〇八）四月十三日（43）

一、今日金屋久保（44）において、遠国流石火矢鋳立てこれ有り候事

【24】谷口与十の諫早家臣への召し抱え

文化五年（一八〇八）六月九日（43）

一、糸岐村（45）百姓与十製作の石火矢、御覧なられ候処、別して、宜しく出来立て、御筒の儀未だ御不足に付きては、此以後段々製作仰せ付けられ候はて相叶わず、右に付きては、御歩行通り召し出され、猶又、出精仕り候通り、仰せ付けられ方にてはこれ有り間敷哉、吟味、御耳に達し候様、仰せ出でられ候趣、承知仕り、吟味を遂げ候は、仰せ出でられ候通り、御筒の儀も未だ御不足これ有り候に付きては、此以後御繰り合い次第製作、仰せ付けられざる候はて、相叶わず、御家中石火矢稽古人中の義は、上御筒時々拝借仕り候通りにては、両流の稽古人に御座候へば、時に依り差し支え候儀もこれ有り候に付き、相舫製作仕り置き度候者もこれ有る由、粗相聞き候、就きては、鋳物師職退転無く、向々連続仕り候得ば、石火矢稽古方繁昌の基にも相成る儀に付きては、去る寛政八年（一七九六）早田嘉一郎御預与富永渕次郎召し出でられ、畢竟一代御歩行召し出され、御切米一石八斗拝領なさられ方にては御座有る間敷哉、吟味仕り候、何れの通り、仰せ付けらるべく哉、御耳に達せらるべく候、以上

六月五日

右の通りに付き、御書付左の通り

糸岐村百姓　与十

右の者、兼ねて鋳物師稽古罷り在り候由に付き、今般石火矢製作仰せ付けられ候処、別して、宜しく出来立て、向う以て御用にも相立つべく者に付き、御褒美として御切米一石八斗拝領なさられ、一代御歩行に召し出さられ候

文化五年　辰六月

天明六年（一七八六）閏十月十四日(35)
一、矢上宿(30)罷り有り候権五郎と申す者鍔細工宜敷、此前御用細工をも仰せ付けられ候砌、職人扶持一石下され置き候得共、今般召し出さられ、一代間の組に仰せ出でられ、今又扶持米五斗相増し拝領なさられ左の通り、御書き付けを以て、相達し候事
　権五郎
右の者、刀脇差の小道具細工宜敷、最早評判にも相成り候段、聞き召され、上御喜悦遊ばされ候、以来の儀、御用にも相立ち候通り、猶又、出精令むべく候、これに依り、下され置き候職人扶持一石の上、今又一代間の組仰せ付けられ候
　午閏十月
右の通り召し出さられ候に付きては、苗字等の儀、追って相達し候様申し達し置き候処、野田と改め候段、申し達し候事

【19】末蔵の人別帳
寛政五年（一七九三）二月二十五日(36)
一、元佐嘉足軽末蔵と申す者、近年爰元罷り越し居り、武器一通りの細工抔致し、人品も宜しく、根元無調法の義、差して重ね立ち候訳にてもこれ無き由に付き、人別帳に相加え置かられ候、支え所これ有り間敷く、勿論右体の細工人も罷り在らざる候て、相叶わざる故、其段窺い越し候処、吟味の通り仰せ付けらるの由、これに依り、宇戸(37)人別帳に相加わり候事

【20】境左太夫の鍛冶小屋
寛政十一年（一七九九）九月十五日(38)
一、境左太夫刀鍛冶稽古に付きて、細工小屋飾り用、左の通り、竹木願いの旨、右の拝領買いにして、差し出さられ候、尤も代銀二貫八百八十文の半減相納め候様、仰せ付けられ候事
一、二尺二寸廻松　八本
一、二尺廻同　四本
一、二尺五寸廻同　二本
一、一尺廻同　十本
一、四寸竹　五束
一、小竹　十束
〆る

【21】長野又楽への褒美、中原要助の修行
文化四年（一八〇七）十二月十七日(39)
一、久留米長野又楽と申す者、当時御当地罷り越し居り候、右の者へ御内々肴一折、金子千匹、これを下され候を山本元忠よりこれを相達す
但し、又楽義は、砲術方心得の者にて、張抜具足製作方方も相心得居り候故、右具足制方中原要助へ稽古方仰せ付けられ、伝授致し候故也

【22】中原要人・真崎権右衛門・三輪了甫・渡邊源五兵衛・盛助・喜多貞九郎・野田多守・清七・多吉への褒美
文化五年（一八〇八）閏六月三日(40)
一、中原要義、当春従者具足紙にて制作仰せ付けられ、殊に兼々御前において色々細工物仰せ付けられ候処、別して太義仕り、同人義、六ヶ年以前御褒美として、居形召し替えられ、御加米等も下されに付きては、未だ勤功を相賞せられ候年数には、至り申さず候へ共、前断制作方仰せ付けられ候ては、段々最前仰せ出でられ置き候旨もこれ有り、旁に付き、今般御褒美として、左の通り、今又、御加米一石拝領なさられの旨、仰せ出でられ、同人申し達し、諫早へもこれを申し越す
中原要人
其方義、仰せ付けられ候役方、精勤令む、殊に細工方等仰せ付けら

前に下り、鍛屋を構え申し候、夫れより代々鍛冶相続き仕り、当左馬之允迄十三代に罷り成り候、以上
右の通り書き付け二通にして、状相副え差し登らせ候也

【14】宮崎文蔵の小屋修理代
享保五年（一七二〇）九月十七日（27）
一、小江村（28）において出来立て候神剣、磨きの儀、宮崎文蔵へ仰せ付けられ候に付きて、文蔵所磨き場修理の義、田中傳右衛門より会所相達し申され候に付き、修理の義、雑務所相達し候、尤も、右入り方は右心遣い高柳半右衛門より出し候也

【15】権五郎への褒美
天明元年（一七八一）八月九日（29）
一、矢上宿（30）罷り有り候権五郎と申す者、兼ねて大小の鍔、其外の小道具宜しき細工致し候由相聞き、先頃、御用鍔細工仰せ付けられ候処、別して宜しく出来立て候由、以後御用に相立つべく者に付き、今般職人扶持一石一代拝領なさなるの旨、仰せ出でられ、今日右の者会所召し呼び、当役助兵衛より相達す、左の通り、書き出し相渡し候事
右書き出し
　矢上宿　権五郎
右の者、大小鍔其外の細工宜しくこれ有る由、相聞き候に付き、先頃御用御鍔細工仰せ付けられ候処、宜しく出来立て候、夫れに付きては、以後御用仰せ付けられべく候間、猶又細工方鍛練令むべく候、仍って職人扶持の間として、米一石宛毎歳拝領なさられ候
　丑八月

【16】藤瀬片右衛門跡継ぎ藤瀬恒三、渋谷慶左衛門へ稽古修行
天明四年（一七八四）三月二十三日（31）
一、刀鍛冶北嶋左馬佑組藤瀬片右衛門先頃病死致し、忰恒三へ跡式不易仰せ付けられ候、右の者へ刀鍛冶伝授仕り置き候哉、未だ若年者に付きては、其儀これ有り間敷く、然る節は、何某歟伝授仕り居り、末は恒三へ伝授仕る者罷り有る義候哉、承合、否申し越すべく旨、仰せ出でられ置き、筋々承合候処、陣野甚左衛門組渋谷慶左衛門儀、若年の砌、亡き伊豫之允へ弟子付き仕り、片右衛門同然稽古伝授をも仕り置き候得ば、恒三年倍にも相成り候はば、見合い伝授仕る覚悟に候、併し、時節悪敷、自力にて伝授相叶わざるに付きては、其節に至り相達す儀もこれ有るべく由、慶左衛門より相達し候に付き、右の段、御傍申し越し候事

【17】藤瀬弁次郎、吉村良右衛門へ稽古修行
天明五年（一七八五）四月二十六日（32）
一、北嶋左馬佑組藤瀬恒三弟弁次郎、鉄炮細工稽古仕度相願い候に付き、佐賀六座町（33）鉄炮師、伊豆様（34）御家来吉村良右衛門へ聞合、仰せ付けられ候処、何時よりも相付き候様、尤も、上より仰せ付けられ候通りにては、宜しからざる訳これ有り候故、自分稽古罷り登り候通りの儀、了簡罷り在り、始終右の当り間違わざる様、相含め置き、勝手次第差し登り候様、仰せ付けられ候、口方の儀は当暮相渡しにても相澄む儀に候へ共、良右衛門にも難儀の身分に付き、其内相談に及ぶ儀もこれ有る由、其節に至りては一類中仰せ承り、役筋へは内分相達し候様、一類陣野甚左衛門組渋谷慶左衛門恒三へ相達し候事
　付けたり、弁次郎口方米の儀は、上より差し出さられ候事
一、此節、弁次郎佐嘉罷り登り候に付きては、時節柄等にて仕廻方、難渋に及ぶの段、相聞くに付き、鳥目三〆文拝領なさられ候、稽古全く仕募り候通り、出精仕り候様、申し達し候事

【18】野田権五郎への褒美

て
一作の御面類二つ
右の物数御用付きて、江戸差し登り候様、申し来たり候に付きて、来る十四日より田中源右衛門殿、江戸相越さらるに付きて事伝え差し登り候に付き、今日源右衛門殿宅へ持ちなられ候事

【9】境左馬之丞への鍛冶炭代
正徳二年（一七一二）九月十三日（19）
一、今度舞熊善右衛門下り申し来たり候は、左馬之允へ御腰物仰せ付けられて、加治炭の義申し来る、夫れに付きて、山方へ申し達し、急度焼き候様に申し来たり候、尤も樫木・柚春木・椨の木、此類にて焼き申し候炭、一切に用に相立ち申さず候間、相除き候様に申し付けべく由、素炭等能く振るい切り、表（ママ）に入り候様、能々念入り申し付けらるべく也
正徳二年（一七一二）十月二十五日（19）
一、酒井左馬之允より払い候炭代七十匁並び木代七匁、〆七十七匁、早田官右衛門より今朝下し申され候を受取り、山方役馬場三郎右衛門へ相渡し候、以上

【10】高平利助の修行代金借用願い
正徳三年（一七一三）八月十九日（20）
一、宇都宮十郎左衛門より申し聞かされ候は、高平利助儀、御具足金物の儀に付き、春田屋徳左衛門成合として、急に佐嘉差し越し候、左衛門は銀三十五匁程当借仕度由、申し候、急成る義候条、何れの筋よりの出し候様に、返算は御金物質相渡し候間、其内より十郎左衛門心遣いにて相渡すべき由、申され候に付き、江口弥一右衛門へ右銀差し出し申され候様、手紙を遣わし候也

【11】橋本出羽への褒美
正徳六年（一七一六）六月二十日（21）
一、龍松様（22）御鑓、橋本出羽（23）へ仰せ付けられ置き、新たに打ち立て出来、今日吉日に就き、持参仕り候、これに依り、御祝として御酒差し出し、其上白麻二十帖下され候事

【12】原五郎兵衛の境左馬之允への修行
享保三年（一七一八）二月二十四日（24）
一、古賀平兵衛与原五郎兵衛儀、鍛冶器量にこれ有り候に付きて、境左馬之允相付き、稽古仕り候様、仰せ付けらるの由、申し来たる、今日内蔵丞より五郎兵衛仰せ渡され候、御請は未だ相澄まざる候也

【13】境左馬丞へ老中からの問合せ
享保五年（一七二〇）二月二十三日（25）
一、境左馬丞、誰名誰伝にて何代程鍛冶相続き仕り、尤も上手下手の品、久世大和殿（26）より相尋ねられ候由、申し来たり、左馬之允召し寄せ古賀兵部左衛門、書付二通御側へ差し登らせ候、右書付、左に書き載せ
松平丹後守家中諫早豊前扶持人
六十八歳　境左馬之丞源宗次
右の者先祖、鎌倉の住、正宗甥境又八郎源真高子又次郎真正と申す者、正宗十二通りの鍛え、七通りの打ち立て相伝仕り、延慶三年（一三一〇）初めて肥前に下り、鍛屋を構え申し候、夫れより代々鍛冶相続き仕り、伊予掾源宗次迄十一代当左馬之丞迄十三代に罷り成り候、以上
松平丹後守家中諫早豊前扶持人
八十八歳　境左馬之允宗次
右の者先祖鎌倉の住、正宗甥又八郎真高子又次郎真正と申す者、十二通りの鍛え、七通りの打ち立て相伝仕り、延慶三年初めて肥

鋳物師　谷口弥五右衛門
右の人数へ御目渡され候、尤も此者共は、殿様へ御目見仕り候由

【4】春田徳左衛門への諫早領主注文の具足
元禄十六年（一七〇三）十二月二十七日（12）
一、当夏より春田徳左衛門へ仰せ付けられ置き候御具足、今朝出来立て差し上げ申し候、付きて、御書院において平井坊（13）へ加持仰せ付けられ候上、御召初め遊ばされ候、其身様（14）御代御召具足初に仰せ付けられ候に付きて、御祝仰せ付けられ候、左に書き載せ
一、御召初め遊ばされ、御将机に御直り、御鏡餅一重ね・上り長柄・御銚子・御肴三種御直礼遊ばされ、御頂戴の事
一、御料理拝領二汁三菜、春田徳左衛門
徳左衛門より御面頰進上仕り候旁に付きて
一、白銀　五枚
一、生鯛　三つ
一、御樽　二つ　五升入り
一、御料理拝領　春田徳左衛門
一、金子三百疋
一、金子百疋　平井坊
一、同百疋　宇都宮快龍
一、同百疋　林　三四郎
一、同百疋　金具屋　甚五兵衛
御召
一、麻上下一具　古■弥平次
一、青銅二百疋　高平利介
右の通り、拝領なさられ候、三四郎・甚五兵衛・弥平次・利介にはお酒拝領仰せ付けられ候事
一、御飯後、御鎧鏡餅、下々迄頂戴仕り候事
一、御召初め遊ばされ、御将机に御直りなられ候て、快龍召し出さられ、御直に御意なられ候、今度諫早にて軍法指南仰せ付けられ候付きて、御手頭扨又兵法の大事、忰貞右衛門へ相伝仕り候様にと仰せ付けられ候、これに依り名字宇都宮に召しなさられ候由、仰せ渡され候事
一、右御規式御兵具飾り一通りは、御兵具方控有り

【5】嘉村幸左衛門への火縄銃注文
宝永二年（一七〇五）六月十三日（15）
一、御鉄炮二挺、此間より嘉村幸左衛門（16）へ仰せ付けられ、身筒出来致し候に付きて、今日石井樋にて損じ申し候、見届けとして牟田團兵衛仰せ付けられ候、右御鉄炮出来候、牟田関左衛門へ仰せ付けられ置き候に付きて、幸左衛門同前に罷り出候、鉄炮台損じに付き、提重其外何色にても遣い申さず候事

【6】吉村幸左衛門への褒美
宝永二年（一七〇五）十二月七日（15）
一、吉村幸左衛門へ先頃鉄炮打たせなさられ候処、能く出来御大慶なられ候、初めて御細工仰せ付けられ候に付きて、金子二百疋下され候、但し、早田七郎右衛門手寄より金子差し出し候事

【7】松田五太夫への褒美
宝永四年（一七〇七）八月二十二日（17）
一、松田五太夫、当夏より御平法御打ち太刀仕り、大儀仕り候に付きて、白晒一疋下され候事

【8】境左馬之丞への刀注文
宝永六年（一七〇九）十二月十一日（18）
一、酒井左馬之丞（ママ）作の御脇差白鞘物一腰、但し、天鵞絨袋入りにし

て、引き上げ御覧候えば、鯰の腹に錐したたか立。其錐抜かず、其侭にてこれ有り。純堯「此錐、新らしく作りたり、誰が作り候か」と御穿鑿候処。大蔵作に究まる。純堯、立腹有りて曰く、「大蔵、不届者也。渕の主を鍛冶の分として、猟をなして、料理にせんとの企て、只指し置く者に非ず」とて、一命は助かり、大田尾村(7)に牢人す。其の時、下より申し上げるは、「是程の大鯰、腹に錐突き、錐立て申す事、思いもよらざる事也。猟師の業に非ず。御僉議候え」と、重疊申し候え共、承引無し。其脇、程無く西郷殿改易成られ、科無き大蔵、栄田へ帰参す。右の一通り、本明村鍛冶千右衛門、大蔵鍛冶筋故、細かに承届候。尤も、大蔵伝授の鍛冶の秘書、今于持ち来りこれ有り。

との記述があり、「純堯代、栄田村の内、平野と言う所に、中村大蔵とて刀作りの鍛冶有り」、「大蔵伝授の鍛冶の秘書、于今持ち来たり、これあり」との記述があり、中村大蔵は中村大蔵尉盛利と同一人物、鍛冶の秘書は前掲の『神祇血脉』と思われる。

二　「諫早家文書」に見る武具職人

次に紹介するのは、「諫早家文書」(1)に記載のある武具職人の人名や召し抱え、褒美などである。諫早家家臣や諫早家お抱え職人のみでなく、佐賀本藩の家臣、佐賀本藩のお抱え職人と思われる人物もいるが、広く人名や事跡を拾うために記載している。また、職別や人物ごとに記載する方が見やすいが、重複文章を避けるために、あえて、年代順に紹介する。

【1】境五郎太夫への刀代金問い合わせ
元禄六年（一六九三）五月二十三日(8)
一、境五郎太夫へ引合の義御座候条、今日鍋嶋九左衛門殿宅へ差し出さられ候様にと此間石井源左衛門殿・古川六郎左衛門殿より手紙を以て中嶋源右衛門迄申し来たり候に付きて、今日前田弥兵衛相付けられ、差し出さられ候処、材木町(9)弥七左衛門より誂え候中子に、作次の刀代銀四十目に約束仕り候由、申し出で候へ共、弥七左衛門よりは、二十目に約束仕り候由、申し出で候、双方證拠これ無き候、これに依り、右値段三十目に仕るべく候、左候て、右刀則弥七左衛門へ相渡し、疵相改め、其上にて相澄むべく候、尤も弥七左衛門方へ引留め候刀、則差返し候様に申し付候条、又次郎引留め召し置き候、刀二つ早速差返し候様にと、仰せ付けられ候に付きて、判突き候て、右の通り相極め罷り帰り候、奥に右の前承り存じ致し候、以上
前田弥兵衛　判

【2】境左馬佑への刀注文
元禄十三年（一七〇〇）六月二十九日(10)
一、左馬佑作、龍の切物・脇差・白鞘物、枝吉三郎右衛門殿へ遣わされ候、右は此の中三郎右衛門殿へ遣わされ置き候、左馬佑作切物これ有り候、脇差御取成られ候、右替りに遣わされ候、委細は横田次郎兵衛、御使峯田十郎左衛門相勤め候事

【3】橋本茂七・春田六郎右衛門・小原久左衛門・谷口弥五右衛門、佐賀藩主へのお目見え
元禄十六年（一七〇三）一月十五日(11)
一、御武具方御用承り候徳居、四十人程これ有り候内、御扶持下され置き候者六七人、跡方より御頭人様より御目渡さる由に付きて、左書き載せの人数御式台と裏ノ間にて御通り懸け、御目渡され候事
鉄炮屋　橋本茂七
　　春田六郎右衛門
矢師　　小原久左衛門

諫早の武具職人

大島大輔

はじめに

当館には、佐賀藩諫早領主の当世具足、諫早家お抱え刀鍛冶の刀剣、鉄砲鍛冶の火縄銃を所蔵している。本稿は、当館所蔵の史料や「諫早家文書」(1)を読み下したもので、令和五年（二〇二三）七月の歴史講座『江戸時代の武具職人』資料を改題、加筆修正したものである。

なお、人名・地名は底本のままとし、解読不能は□、虫損・不明文字は■とし、適宜句読点をほどこした。

一　刀鍛冶　中村大蔵について

当館に『神祇血脉』(2)との表題の巻子本があり、内容は天の神と地の神の系譜、神代三剱と鍛冶との関わりなどが書かれており、巻末には「永禄十年（一五六七）丁卯五月吉　橘朝臣中村大蔵尉盛利　花押」と作成年代と作成者が書かれている。また、差出人は「権大僧都起雲示々　花押」と書かれているが、「起雲」がどの様な人物であるかは不明である。また、『西郷記』(3)に収録されている「大鯰上る事」には、「中村大蔵」と「秘伝の所」との記述を見ることができる。

大鯰上る事

山下渕と言う説あり。又泉香渕共申し伝え候。両説、未だ詳らかならず。西郷純堯代。

一、純堯(4)代、栄田村の内平野(5)と言う所に、中村大蔵とて刀作りの鍛冶有り。彼者祖父中村惣右衛門は、刀作りの名人にて世間に紛れ無き上作たり。銘に「肥前國伊佐早庄三位則末作(6)」と長銘打ち、本阿彌秘伝の書にも肥前よりは此の作外に入たる無し。右の孫大蔵、祖父の極意伝えざる事を歎き、備前長船と言う所へ相越し、祐定と言う鍛冶の弟子になり、七ヶ年稽古仕立帰り、刀を作るに、天正の祐定に少しも違わざる上手となる。然るに、大蔵神剣を作るとて、百日執行して、忌穢を慎み、家内に注連を張り、御剣を作る。或夜、大蔵所へ男女とも知れざる者、白き着物に白袴着て参り申けるは、「作り度物候て、参り候。錐一本御作り下さるべし。礼物差し出すべく由」申し候。大蔵不審に存じ、取り合い候得共。言葉に構い申さず。人間の様にこれ無く。「右錐は何の用に立るか」と、尋ね候えば、「我に寃をなす者これ有り。右錐を持ち候えば、寄せ付け申さずに付きて、頼み申すの由」申し候。「何様作り進むべく」と約束す。「三日過ぎて取に来れ」とて帰えす。任せに約束に、金を鍛い鳥の舌の如く、錐の如く作る。三日に満する夜に入り、取りに来る。故是を渡す。殊の外気に入る。「忝い」とて、礼物を出す。「何ぞ」と見候えば、打切たる灰吹の白銀小包一つ渡す。「大分の礼物、取り申さず」とて返す。是非、御取候様にと重疊申すに付きて、灰吹一切取たる由。「御身如何なる者が、寃をなすぞ」と尋ね候えば、其の時、「恥敷ながら、我は大渕の主也。此渕に大鯰有りて、子を取り、色々寃をなす。此錐にて即ち突殺し申す用也。此恩礼には、諫早河筋にて、永代人取り仕る事有まじ。其上御身の一家一門に風気と言う事あらせ間敷」と深々約束一礼して帰る。跡より見送り候えば、渕の脇に榎木あるに上り、木末より倒に渕に飛入る。恐敷有様の由。翌朝、山下渕瀬下に長さ二間に余る大鯰流れ掛りて有しを、諸人見付て目を驚す。西郷殿御覧有り